

詞花のゆりかご

文芸研究Ⅰ

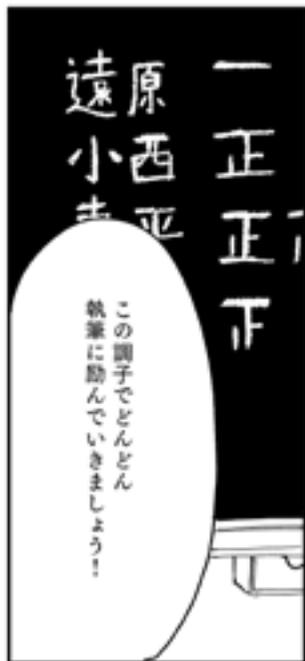
小（神）野ゼミⅠ

目次

・ 不可測の種〈序章〉	道須 南人	7
・ 骨になつても君だけを	小石川	16
・ 或る夏	中条 和音	36
・ 嫁入り	金川 勇人	48
・ 黒百合	星野 新	70
・ スーヴェニア	阿佐比 りい子	92
・ ツツジ	渡邊 凜	106
・ 未来を想つて	枢木 よこわ	116
・ 桃色椿	CROUS	128
・ プリムラ	高尾 憩	142
・ シオンの花を喰らう	陽村 恵	152
・ 素敵な装い	杜 文城	164

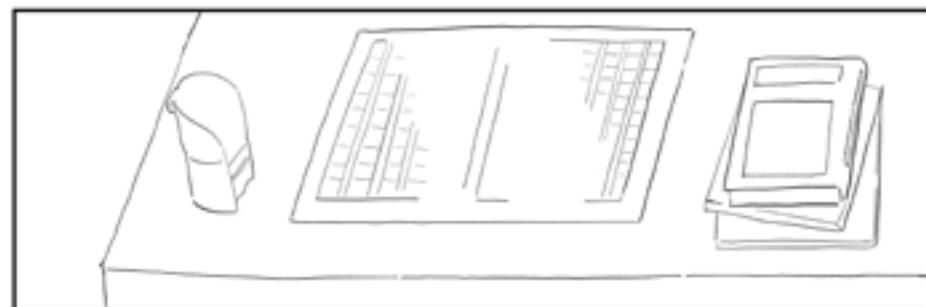
不可測の種
〈序章〉

道須
南人









骨になっても君だけを

小石川

プロローグ

「別れて、ほしいんだけど」

今にも死にそうな顔をして、目の前の男はそう言った。

一瞬、何を言われているのか理解できなくて、私は声の出し方を忘れてしまった。

カラカラに渴いた喉の奥からどうにか出てきたのは「え」という言葉だけ。

ひとつ、咳払いをした。

「……なに言ってるの？」

男は口を閉ざしている。

がさりと、つい先ほど押しつけられた花束が音を立てた。別れようなんて言うのに、なんでこの男は花なんぞを持ってきたのだろうか。

ぐるぐると思考を巡らせてみたが、やはり男の意図は分からず困惑するばかり。訝しげに目の前の男を凝視するも、可哀想なほど真つ白な顔色をした彼とは全く目が合わなかった。なんでお前がそんな表情をするんだ。

地獄のような沈黙が流れる中、セミの声だけが生き生きと耳に響く。それがいつも以上に煩わしく聞こえて、短くふう、と息を吐いた。

男はそのため息に肩を揺らして、焦ったように口を開いた。

いた交友関係の中に、親の都合で放り込まれた私は、放課後の校庭でクラスのカギ大将にいじめられている彼に遭遇したのだ。どうやらランドセルを取り上げられてしまったらしく、千秋は必死で取り返そうとしていた。しかし、小四にしては背が高く体格が良かったカギ大将は頭の上にランドセルを掲げ、背が低い千秋がそれに手を伸ばすのを笑いながら見ていた。

よそ者扱いされて友達がひとりもできなかった私は、その時非常にイライラしていた。

典型的ないじめの現場に遭遇した私の苛つきは沸点を越え、あるう事かカギ大将の頭を後ろからぶっ叩いて逃げたのである。驚いたカギ大将が、持ち上げていたランドセルを落としたのと同時に。

教科書をぜんぶ机に突っ込んで帰ったおかげで私のランドセルは羽のように軽かったので、顔を真つ赤にしたカギ大将が私に追いつくことはなかった。そもそも彼の足が遅かったのもあるが。逃げ出す前にちらりと見えた千秋の泣き顔が、驚きに染まっていたのをよく覚えている。

それが私と千秋のファーストコンタクトだった。

別に正義感があったわけではない。どちらかと言えば面倒なこととは嫌いだし、絶対仕返しされるだろうなと思っただけの夜の夜は死ぬほど後悔した。

けれどその日、よそ者だと遠巻きにされ、誰にも話しかけられ

「そっ、それだけだから！ じゃー！」

「えっ」

沈黙に耐えきれなくなったのだろうか、男は驚くほど速い足で去っていった。

それだけでもクソもないだろうに。

ひとりぼつんと取り残されてしまった私は、腕に抱えた黄色い花の束に目を落とす。百本はありそうな向日葵のかたまりに、無粋にもいくらしただろうと思いが飛びそうになり、ぶるぶると頭を振った。

そうではない。そうではないのだ。

緑に囲まれた広いキャンパスの、その一画で、年季の入った木のベンチに座りながら、私——日下日和は、今起こった出来事を整理しようとして、抱えていた花束をそっと隣に置いた。

逃げるように走り去った男の名前は、高瀬千秋。何を隠そう、私の小学校からの幼馴染である。小中高と恐ろしいほどに進路が被り、ついには大学まで同じというなかなか長い付き合いの男だ。

しかし彼は、こんな突飛なことをする奴ではなかったはずだ。

喉の奥で唸りながら、私は高瀬千秋という人間を振り返ることにした。

出会いは小学四年生の頃だった。すでに出来上がってしまった

ることなく転校初日を終えた私は、教室の隅ですっとひとりいたあの子を放っておくことができなかったのだ。今思えば、仲間意識のようなものが芽生えていたのかもしれない。

次の日、千秋は朝から何か言いたげにして私の後ろをついてきた。鬱陶しかったけど、不安そうな顔をしていたから突き放すこともできなくて、こちらから「何か用？」と聞けば、彼は大袈裟に肩をビクつかせていた。

「あ、あの」

「なに？」

「えっと、こ、この間は、ありがとう」

「……それ言うただけについてきてたの？」

「えっ、あ、ごめん」

「フ、なんで謝るの」

わたわたと慌てるその様子がおかしくって笑みを溢せば、千秋もまた下手くそな笑顔を見せてくれた。

そんなぎこちない会話を交わした翌日から、千秋はまるでヒヨコのように私の後ろを追いかけてくるようになった。面倒なやつに懐かれましたな、とは今でもたまに思うが、もつと面倒なのは私が彼を憎めなかったこと。鬱陶しいことに変わりはないのに、私の姿を見つけて目を輝かせる彼を、どうして突き放すことができよう。

いつからか私は、彼の手を引いて歩くようになった。きつと、

私の友達一号は千秋だったのだ。

そんないじめられっ子だった千秋が成長していくのを見るのは、少し寂しかったかもしれない。優しくて気弱で、泣いてばかりいたあの子の手を、私が引くこともなくなっていたから。

(千秋が大切な人なのは、今も変わらないけど)

ちら、と隣の向日葵に視線を落とす。太陽のかたまりみたいなそれに、なんとも複雑な気持ちになった。

彼は、何故こんなことをしたのだろう。知らぬ間に何かしてしまっただろうか。

腕を組んでもういちど喉の奥で唸る。心当たりはない。

そもそも、私と千秋って――

「日和！ ごめんお待ちせー！」

爪先を見つめながらぐるぐると考えていたその時、前方からよく通る声が聞こえてきた。

こんがらがった頭を持ち上げれば、ポニーテールを揺らしながら駆けてくる友人が見えた。私の隣にある花束が気になるのか、どうも目が合わない。

私は花束を持って立ち上がった。

「それなに？ 誰かの忘れ物？」

「こんなデカイ花束忘れる人間いないでしょ」

「え、じゃあ日和の？」

「そう」

「誰からもらったの」

花束が私のものと分かると、途端にキラキラと目を輝かせた彼女は興奮した面持ちで私に詰め寄った。最近染めたらしい赤茶色の髪の毛が眩しい。

「千秋」

「え、高瀬くん？ 幼馴染の？」

「そう」

「うそ、いつの間にそんな関係に」

この私が見逃すなんて、と大袈裟にショックを受けた顔をした友人に苦笑いを返す。

「んー、それがさあ……」

「あつ、てかごめん、私が遅れたからなんだけど、昼食べる時間めっちゃ少ない」

早く行こう、と手を引かれる。

授業が全部終わったら根掘り葉掘り聞かせてもらうからね、と言われ、慌ててポケットからスマホを取り出して時間を確認すると、どうやらあと三十分で次の授業が始まってしまっらした。たしかに相談するには時間が足りないかもしれない。

(まあ、後でいいか)

意外に重い花の束を抱え直して、私は彼女にならって駆け出した。

一

俺——高瀬千秋には、どうしようもなく好きな人がいる。それはそれは長いこと想いを寄せている人が。

泣き虫だった俺の手を引いて、「しょうがないなあ」って言いながら、呆れた顔で笑っていた女の子。

小学校からの、俺のかわいい幼馴染。

俺が泣いていると決まって面倒くさそうな顔をしてくせに、泣き止むまで隣を歩いてくれたあの子。

彼女は足が速かったから、知らぬ間にどこか遠くへ行ってしまういそうな気がして、俺はいつか置いていかれるんじゃないかとビクビクしていた。

それでもあの子は、ずっとそばにいてくれた。いじめられっ子の俺に構うせいで孤立しても、俺のことを友達だと言って憚らなかった。

それだけで俺は世界一の幸せ者になったような気分になって、あの子からどんどん離れられなくなっていく。

一度、どこへ行くにも後ろをついていく俺を鬱陶しがって距離

を置こうとしたあの子に、みっともなく泣いて続いたことがある。ギョツとしたあの子はしばらくポカンとした後、あまりの俺の

ダサさに大笑いしていた。ごめんごめんと笑いながら、「後ろじやなくて隣においでよ」と俺の手を取ってくれたあの子に、幼か

った俺はあっけなく恋に落ちた。好きだと伝える勇氣なんて俺にはなかったから、少しだけ冷たいあの子の手のひらが、俺の手を離さないでいてくれるうちは、この気持ちは秘めておこうなんて思っていた。

当然、年齢が上がれば手を繋ぐ機会なんてどんどん減っていくけど、それでもやっぱり、告白なんてできなかった。

隣にいてくれるうちは……名前を呼んでくれるうちは……とずるずる引きずって、抱え込んでいた小さな恋心は、いつの間にか、少しばかり厄介な代物に成り果ててしまった。

俺の心臓にしっかりと根を張るそれは、確かに恋心と言って差し支えない。けれどその恋心は年々重みを増し、形を変え、おおよそ人には見せられないだろうというところまで成長していた。

どこで道を間違えたのか、俺はメンヘラに進化してしまっていたのだ。失恋なんてしようものなら、俺は気が狂ってしまいうに違いない。それどころか、身辺整理を済ませた上で樹海に向かうだろう。

好きな人に向ける感情が、他人のそれよりも重いと気がついたのは、高校生の頃。

とにかく幼馴染と離れたくなかった俺は、中学校も高校も彼女と同じところへ進んだ。

世間一般から見ても、小中高と進路が被る男女というのは珍しいらしく、会話のネタになることが多かった。だからある日、会話

の流れでつい溢ってしまったのだ。「彼女とは同じお墓に入るところまでいきたい」と。

友人は絶句していた。

重すぎると誰かが呟いて、ようやく己の愛は重いのだと気がついた。

「俺って重いんだ」

ありえないものを見るような目で頷かれた時、俺は初めて、あの子を好きなまままでいいのだろうか、と年々大きくなる自分の気持ちに待ったを掛けた。面倒くさがりな彼女に重い男なんて相性最悪ではないか。水と油の方がまだ仲が良い。

脈なしどころかそれ以前の問題だと気がついて、その夜俺は盛大に泣いた。それはもうべししゃべししゃに泣いて、あの子のためにもこの恋は諦めようと誓ったのだ。自分がこのまま彼女を好きでいたら、きつといつか迷惑がかかってしまう。それが嫌だった。あの子にはいつまでも笑っていてほしいのだ。

決意新たに、俺は翌日から幼馴染以外の女の子に目を向けるよう努めた。しかしこれが思っていた以上に難航した。

どこにいても彼女の姿を探してしまおうし、見つけてしまう。彼女だけがやけに輝いて見えるから、なんなら彼女以外の人間は全員ぼやけて見えた。恋は盲目だなんて誰が言ったんだ。

何人かの女の子と付き合ってもみたが、幼馴染以上に惹かれる子はいなかったため、当然、続いたことはない。「千秋くんって

私に興味ないでしょ」が別れの常套句だった。申し訳ないがその通りだとは言えなかった。

いっそ玉砕してしまった方が諦められるのでは、とも考えたが、やはり告白する勇氣は塵ほども湧かなかった。フラれたら生きていけなくなる気がしたのだ。想像するだけで涙が出た。

どう足掻いても、俺は彼女のことを好きだった。

俺の幼馴染への愛を知ってもなお友人でいてくれた唯一の男は、八方塞がりの俺を見ていつも呆れていた。

「失恋くらいで人は死なねえよ、と言いたいところだけど、お前はマジで死にそうなんだよな」

「失恋ってワード禁止ね」

「アレルギー反応かよ。あー、日和ちゃん？ だっけ？」

「そう、日和」

「あの子最近彼氏できたって言ってなかった？ 先週ずっと嘆いてたじゃん」

「最終的に別れてくれればもうなんでもいい」

「結婚までいくかしんねえよ？」

「結婚ってワード禁止ね」

幼馴染——日和には度々彼氏ができた。彼女のことならなんでも把握しておきたかった俺は、噂を聞きつけては死にそうになりながら友人に泣きついてた。そんな俺の様子を見かねた友人に、いつだったか「もうお前諦めるの無理だろ」と言われたことで、

俺は変に吹っ切れてしまった。どれだけ諦めようとしても一向に

その兆しが見えないので、流石にもう距離を置くしかないと考えていたのを、聞き直って大学までついてきてしまったのだ。

友人は「そうじゃない」とドン引きしていたが、日和が「どうとう大学まで一緒だ」と面白そうに笑っていたので全部どうでもよくなった。

高校三年間をかけて日和を諦めようとしたけれど、結局、俺は日和を諦めることを諦めた。あの笑顔が離れていってしまうことが、どうしても耐えられなかったから。

けれど、高校卒業までにはいふんど日和への想いを拗らせてしまった俺は、つい先日、とうとう引き返せないレベルの暴走を起こしてしまったのだ。

「……………で？」

所変わって、ここはファミリールレストラン。

夕方の微妙な時間帯、客もまばらな店内の奥のテーブル席で、俺は唯一の友人——矢島渡と、昨日俺が引き起こしてしまったある出来事について緊急会議を開いていた。

高校卒業を機に別々の道へ進んだ俺たちの関係は、「千秋を放っておくと何をしますか分からなから」という渡の危機感によって、お互い大学生になった今も途切れることなく続いていた。俺が言うのもなんだが、彼は面倒見が良すぎて時々心配になる。

「約一ヶ月も音沙汰なかったお前から、急に『別れてきた』ってメッセージがきた俺の気持ち分かるか？」

「本当にごめんと思ってる」

「人の心は失くしてないようでも何よりだよ」

こめかみに手を当てて眉間にシワを寄せている渡は、先月会った時よりも髪が短くなっていた。

最後に会った時、「犯罪だけはやるなよ」と念を押されて別れたのを思い出す。彼は俺をなんだと思っているのだろう。

こちらをじとりと睨んだ渡に、俺はそっと目を逸らした。犯罪はしてないよ。

最初の言葉を考えあぐねているのである。渡と、縮こまっている俺のあいだには、まるで通夜かと勘違いするほど重い空気が流れている。

人のざわめきが、いつもより鮮明に聞こえた。

昼間よりも人が少ないとはいえ、店内には子連れの家族がいたり、学校帰りの女子高生たちがいたり、職に就いてなさそうなおじさんがいたりする。

ザワザワと賑わうファミリールレストランの一角で、その雰囲気にも毛ほども馴染めない俺たちは、いつか周りの目にはどう映っているのだろうか。

「まずさ、花束持ってたって何？ 花渡して『別れてください』って言ったの？」

「そうです」

「マジでキシヨいな」

「向日葵百本はやり過ぎたかな」

「そ、なに？ 百？」

「ネットで買った。個人的に向日葵は日和の概念」

「キモい……キシヨい……」

渡は大きなため息を吐いて椅子に深くもたれた。

これまでも、何度か奇行に走りそうになることはあった。

日和がかっこいいとこぼした雑誌のイケメンに対抗しようと、校則違反にもかかわらず髪の毛をクリーム色に染めようとしたり、友達と小旅行に行くと言った日和の後をつけて先回りしようしたり、日和の誕生日にアホみたいに高額なプレゼントを用意しようとしてみたり……それらを止めてくれたのはいつも渡だった。

俺が今も太陽の下を歩いているのは、「正気に戻れ！」と俺の頬を叩く彼の存在があったからだ。本当に感謝している。だからこそ、俺がこれまでの奇行をやらかしたのは初めてで、たぶん彼も困惑しているのだと思う。

「やっぱりお前を一人にするんじゃないかった」

「いやほんと面目ない」

「気心の知れた仲だったからよかったものさあ……」

日和以外にこんなことしない、と言いたいところだが、渡が言いたいのはそのうちのことではないだろう。告白ならまだしも、別

れ話に花束はドン引き案件でしかない。俺だって分かっているのだ。

(……分かって、ただだけどなあ)

はあ、とふたつ、ため息が重なった。

どんよりとした空気が漂う中、「お待たせしましたあ」と間延びした店員の声が耳に届いた。

項垂れていた頭をゆっくり持ち上げる。

注文した料理が手際よく机に並べられ、二人揃ってお礼を言えば店員は会釈だけして去っていく。どう見ても店員の顔は引きつっていた。会話を聞かれていたのか、俺たちから滲み出る重苦しい雰囲気到店員の笑顔が崩れたのか。どちらにせよバックヤードでヤバイ卓があるとネタにされるに違いない。

「……で、いつの間に付き合ってたんだよ」

フォークやスプーンをこちらに寄越しながら、渡がそう言った。どうにかこの空気を変えたいようだ。

「お前なら付き合った三秒後とかに報告してくるかと思ってた」

「渡は俺のことなんだと思ってるの」

誠に遺憾ではあるが、強く否定できないのがなんとも切ない。

「でもまあ、付き合えてよかったな。もう別れてるけど」

フォークでクルクルとパスタを巻き取っていく渡が、心なしか嬉しそうにそう言う。

日和をずっと想い続けた俺を、一番近くで見ていたのは渡だ。

二

大抵みんな怖がって俺から離れていったから。

少しだけ持ち上がった彼の口角には、友人としての祝福か、面倒を見きったという達成感か、それともただ非リアを面白がっているのか、どんな思いが込められているのかは分からない。けれど、どんな理由であつても友人歴の長さを感じられて、俺の頬も少しだけ緩んだ。

そんな嬉しさと同時に感じたのは、体の内側から刺されるような鋭い痛み——罪悪感だ。

俺は本当に、本当に、とんでもないことをやらかしてしまったのである。

「……………付き合ってた、ないんだよね」

ピタリと静止した渡の手から、静かにフォークが滑り落ちていった。

「……………へえ、小中高いつしよなの」

「うん、わりと仲良いよ」

「珍しいね。しかも男女か」

「夢あるわー」

なんてことない会話だった。

授業が始まる前の、あの短い休憩時間を潰すためにしていた会話だったのだ。

「これで大学まで同じだったら面白いよな」

「できれば同じとこがいいな」

「あ、そうなん？」

「え、え、アオハル？」
 「というか、最終的には同じお墓に入るところまでいきたいんだよね」

脊髄反射で会話をしていたせいで、俺たちは一瞬、千秋が何を言っているのかよく分からなかった。恋人でも夫婦でもなく、「同じお墓」というワードチョイスがあまりに重くて、一介の子高校生にはついていけないかったのだ。

青い春どころではない。とんでもない深淵を覗いてしまった。俺たちはもしやヤバイ男と話しているのでは？と、多分その場にいた誰もが思ったに違いない。俺の隣にいた男は、持っていたペンケースをきゅ……と握り締めていたし、俺は家で飼っているポメラニアンに心の中で何度も助けを求めていた。あのキュルンとした瞳が恋しくてたまらなかった。

予備動作無しでアップパーをかまされたような気分の俺たちを置いて、千秋は事もなげにスマホをいじっている。「冗談言うなよ」と笑い飛ばせなかったのは、彼の様子があまりに普通だったから。「ああ、これ本気のやつだ」と分かってしまったから。

誰かの「おっも……」という呟きが、沈黙にこだましたのをよく覚えている。

それからしばらく、その日会話していたクラスメイトたちは千秋から距離をとっていた。最初は俺もそうだった。理解できないアイツが怖かったから。

きだったのかもしれない。友達のを引つ叩くのが日常になるなんて思いもしなかった。

けれど、意地でもこの男の恋路を見届けてやりたいと思っってしまったから。

早く進展してくれないかな、と常日頃から考えていた。なんでもいいから何か起これ、と。

「……もっかい言ってくんね？」

「付き合っつて、ないんです」

「自分が言っつてること分かってる？」

「理解した上で言っつてる」

「もうダメだ」

俺と千秋は同時に頭を抱えた。

今まで、コイツの奇行は未遂で終わらせてきた。だから日和ちゃん千秋の異常性に気づくことはなかった。

だが今回、俺というストッパーがいなくなってしまった千秋は、とうとう日和ちゃん本人にその想いをぶつけてしまったのだと言おう。

「おま、お前さあ、え、なんで？　なんで？」

「マジでムリ。嫌われた、絶対」

「あんな頑張ってきたのに……」

俺が尽くしてきた努力も、なにより彼女に迷惑をかけたくない

千秋も千秋で気まずかったのだろう。お墓発言以降、目に見えて話しかけてくる回数は減っていた。それでも、俺達以外にも友達はいやし、孤立することもないから大丈夫だろうと思っつていたのだ。

けれどある日、ひとり廊下を歩く千秋の背中に、どうしようもなく罪悪感を覚えてしまっつて。

「……………あのさあ」

その次の日、俺から声を掛けたのだった。

何週間かぶりに話しかけた時の千秋の顔が、散歩に誘われて嬉しそうにする飼犬に似ていて、「ああ話しかけるんじゃないかと」と死ぬほど後悔した。

そうやってずるずると、見捨てることも投げ出すこともできずに友達を続けていたら、こんなところまで来てしまった。

たった今、信じられない言葉を発した千秋を凝視しながら思う。やはり俺は、真性のお人好しだったのだと。

俺は幾度となくコイツの奇行を止めてきた。

何度か友達を辞めたいと思うこともあったが、正気に戻ったアイツが本当に申し訳なきように縮こまるから、結局は思いとどまってきた。

良くも悪くも普通の男、という印象が、幼馴染への愛が重すぎる男に変わってしまった時点で、俺はきつと千秋との縁を切るべ

という千秋の恋心も、たった一度の暴走でパアになった。

だいたい付き合っつてもないのに「別れてください」は意味が分からない。そこに花束も添えたと言っつうのだからますます意味が分からないいうえに怖すぎる。

「せめて『付き合っつてください』からだろうが……」

「フラれたら死ぬ」

「だから『別れてください』つて？　そうはならんのだろ」

本当に怖い。三年間で縮めてきた距離が、この数分でどんどん遠ざかっつている気がする。俺はもう高瀬千秋という人間が分からない。

「なんでそうなっつたんだよ……」

「日和つて、めっちゃめちゃ面倒くさがりなんだ」

「は？」

「お菓子の袋を開けるのが面倒で結局食べない、なんてのはしょっちゅうだし、会話の途中で喋るのが面倒になっつてる時もある。あ、気を許した人にだけね？　チャットで話してても文字打つのが面倒だからつて途中から電話になるし、休日はほとんど家から出ない」

「なに、なに、怖い」

つらつらと挙げられるそれらが、お前の奇行となんの関係があるというのだ。結論を先に言えと何度も言っつただろう。過程から話すな。

指折り数えて言葉を重ねていくその姿に、なんだか懐かしさを感じてしまうのが悔しい。コイツは日和ちゃんについて語る時はいつもこうだった。

「ぐるぐる考え込むのも、面倒くさがる時があるんだ」

「……だ、だからなに？」

そこで千秋は、一旦ふう、と息を吐いて、水の入ったグラスを持ち上げた。俺を置いて一人で落ち着くな。

そこでやっと、自身の喉もカラカラに渴いていることに気がついたので、目の前の男にならって、俺もグラスに手を伸ばす。

さっきから千秋が何を言っているのかまったく分からなくて怖い。それでもその顔が苦悶に満ちているのを見て、本人にやらかした自覚があることだけは理解した。

「たぶん、俺はそれを狙ったんだと思う」

「ちょ、ごめん、もうちょっと詳しく」

「……今回の俺の行動は、日和にとっては理解不能で、だからなんで俺がこんなことをしたのか、すぐく考えろと思うんだ」

「まあ、そうだな」

「でも最終的に考えるのが面倒になって、日和が『もしかしたら付き合ってたのかもしれない』って思考になるのを、狙った、んだと、思う……」

千秋の言葉が尻すぼみになっていく。

俺は絶句してしまった。

「……そうは、ならんだろ……」

なんだそのクソキモ思考は、と千秋を見つめれば、「俺も分かっているんだよ」と呟く声が聞こえた。

「これ結構前から考えてたことだったんだ。日和と付き合いたすぎて。まあそんな上手いかないのは分かっていたから、行動には移さなかったんだけど」

前々からそんなことを考えていた時点でわりと気持ち悪いが、口を挟む雰囲気ではなかった。千秋がここまで萎びているのは、初めて見たかもしれない。

「でも、花東が届いたんだ」

「向日葵の？」

「そう、注文した向日葵が届いて、なんか、どうしても日和に会いたくなって」

「……勢いでやってしまったと」

顔をしわくちやにした千秋が重々しく頷いた。

だからコイツは別れ話に花東を持つてくるイカレ野郎になってしまったのか。付き合ってもいないのに。

俺は、もう何度目かも分からないため息を吐いた。本当に面倒くさいなコイツは。

もそもそとドリアを口に入れる千秋を見つめる。

「いい加減、お前も腹括ったら？」

「え」

「日和ちゃんとは今回の件についてしつかり話し合うべきだし、もうそろそろちゃんとした告白をするべきだろう」

「む、むり」

「無理じゃない。なんで受け入れてもらえない想像ができないんだよお前」

千秋はいつも、フラれることしか考えていなかった。付き合いたい、結婚したいと言ってくせに、それをいつも拒否される前提で話すのだ。

うじうじうじうじ、女々しいつたらない。

「それに、フラれることイコール嫌われるってことじゃないからな？」

なぜ失恋をこの世の終わりかのように語るのか、きつと俺は生涯かけても分からない。フラれたところで時間は過ぎるし、どれだけ憔悴しても腹は減る。死にたくても体は生きようとする。失恋のショックに立ち直れなくても、それはいつか瘡蓋になる。人間とはそういうふうにできているのだ。

「あと、別に脈ナシってことはないだろ」

「……ほんとに？」

黙って口を結んでいた千秋が、そこでようやく口を開いたので、俺は深く頷いておく。

そう、なにも脈ナシってことはないと思うのだ。

過ごした年月だけで言えば、千秋と日和ちゃんは十数年の仲に

なる。その間（おもに千秋のおかげで）疎遠になることもなかったようだし、今でもコイツらはお互いの家に遊びに行くぐらいには仲が良い。千秋も日和ちゃんも実家暮らしだと言うから、もう二人の両親も公認の仲なのだろう。

だいぶ大きなアドバンテージを持っているというのに、なにをそんなに不安がっているのか本当に分からない。ひとつ懸念をあげるとするなら、距離が近すぎてほぼ家族のカテゴリになっっていないかだけだと思う。

言ってしまうえば、傷つくのが怖いからという理由で、千秋は何年もその馬鹿みたいに重い恋心を温めてきたわけだ。ダサイことこの上ない。

「幼馴染なんて特大の強みだろ。もうとつとと告つちまえよ」

なにか大きなきつかけでもないかぎり、この男は一生、あと一步を踏み出すことはできないだろう。

今が勝負どころなのだ。きつと。

俺は短く息を吐いた。

ふと、落としてしまなしにしていたフォークの存在を思い出す。考え込んでいる様子の千秋をよそに、テーブルの下に落ちたフォークに手を伸ばした。

その時、ピコン、と千秋のスマホが鳴った。

「……わ、渡、わたる！」

「んだよ、ちょっと待ってって」

「ひ、日和からメッセージが！」
俺はテーブルに頭をぶつけた。
拾おうとしたフォークもそのままに、頭をおさえながら体を起こす。

「なん、なんで？」

普通、付き合ってもいない男から花束渡されて「別れてください」って言われたら、その男と距離置こうとか考えるものではないのか。俺がおかしいのか？

(いやどう考えてもキショいだろ)

千秋はしつかり気色悪いことをしたというのに、日和ちゃんはなにを考えているのだ。

「なんて言ってるの」

「い、『いろいろ考えたんだけど千秋の意図が読めなかったから今日家行くわ。あと私ら付き合ってたっけ？』……」

「俺がおかしいのかな……」

本当に千秋の言った通りだった。日和ちゃん、考えることを放棄している。君に千秋と付き合ってた覚えがなければそれは付き合っていないという認識で合っているのだ。流されないでほしい。

俺はもう何も言えなかった。

千秋がヤバイ奴というのはこの身をもって知っていたことだが、もしかして日和ちゃんもなかなかヤバイ人間だったのではないか。

頭を抱えていたら、千秋が無言のままにいることに気づく。恐る恐る顔を上げてみれば、彼はスマホの画面を見たまま固まっているではないか。

「……オイ千秋、狙い通りだったからって嘘つくのはやめろよ」

「わ、分かってる」

「ほらスマホ閉じる。嘘ついて付き合ってたことにしても虚しいだけだろ」

「そう、だよね、うん」

一瞬血迷いかけた千秋を落ち着かせて、視線を合わせる。よし、焦点はぶれていない。

「……まあ、嫌われてはいいようだから、ちゃんと話し合ってるよ」

「うん……」

顔面蒼白というのは、こういうことを言うのだろう。

なにもかもが終わった、とでも言いたげな顔をしてドリンクバーへ向かった千秋の背を見つめる。アイツには申し訳ないが、俺はやっと進展しそうな千秋の恋に少したけワクワクしていた。

千秋はもう、自分の感情を誤魔化せないところまで来ている。そろそろ前へ進むべきなのだ。

「…………ハア」

テーブルに乗り出していた身を引いて、椅子にもたれる。なんだか力が抜けてしまった。

以前、千秋にどうして彼女が好きなのかと聞いたことがある。なんで彼女じゃなきゃダメなんだ？ と。

「いじめられっ子だった俺を助けてくれたから」

少し恥ずかしそうに、千秋は笑っていた。

「最初はその子の背中に追いつきたくて、置いていかれないように必死だったんだけど、そのうち、俺と歩く時にベースを落とされてくれるのか、隣を歩こうとしてくれることに気がついて、もう大好きになっちゃったんだよね。そういう優しいところ、ずっと変わらないんだ」

ちよろいかな、と笑う千秋を、からかってやることはできなかった。

恋なんてそんなものだ。

メロンソーダ片手に戻ってきた千秋を見上げる。もう片方の手には、当然のようにもうひとつメロンソーダが入ったグラスがあった。

「は？」

「……おー」

どうしたって憎めないこの男を、俺は結局応援してしまう。はやく俺を解放してくれと日々思いつつも、幸せにはなってほしいのだ。

「……玉砕したら焼肉奢ってやるよ」

「玉砕ってワード禁止ね」

じとりとこちらを睨む千秋の前に、俺はケラケラと笑った。

三

店を出て渡と別れた後、全速力で家路を辿った俺は、帰宅してすぐ、ゼゼエと切れる息もダラダラと垂れる汗もそのままに自室のドアを開けた。

キン、と冷えた空気が部屋から漏れる。

すでに日和は部屋にいて、勝手知ったるとばかりに寛ぎながらも、尋常ではない様子の俺に目を見開いていた。

それでも「おかえり……」と言ってくれる日和に心底ホッとしてしまつて、俺は泣きそうになつた。

「ただいま……」

いや、嘘。本当に泣いた。

口を開いた瞬間に気が抜けて、ぼろ、と涙が零れた。

「え、なに、なにどうしたの」

「迷惑かけてごめん……」

「なんだよ、泣くなよ」

「困らせてごめんね……」

「いやたしかに困つたけどさあ」

ほら座りな、と日和は俺の手を引いた。

こういうところが、ずっと好きだ。叫ぶなら、死ぬその直前までこの手に包まれていたい。

暑い中走つて俺の手のひらが熱くなつていたからか、久しぶり

に触れる日和の手は、いつもより少し冷たかった。

別れる時に渡に強く叩かれた背中が、じんじんと痛む。叱咤激励だと言つて笑つた彼に助けを求めたくて堪らない。こんな調子で、俺は日和にちゃんと気持ちを伝えられるのだろうか。

ずび、と鼻をすすれば、困つたように日和が笑う。

俺の大好きな、その笑顔。

(まだ、向けてくれるんだ)

それだけで嬉しくなつてしまう俺は、本当にとんでもない馬鹿野郎なのだと思う。

「……まあ、私にしては結構考えてみたんだけどさ」

俺の呼吸が整うのを見計らつて、日和が口を開いた。

「千秋がなに考えてんのかさっぱり分かんなくなつて」

「……はい」

「付き合つてたのかなあつて友達にも相談してみたんだけど、すごい形相で『ありえない!』って言われるし」

「そりゃそうです」

「私たち付き合つてないよね?」

「付き合つてないです」

「だよね」

じゃあなんであんなことしたの? と言う日和が小首を傾げた拍子に、ふわふわしたウルフヘアが揺れた。遊ばせた毛先がとんでもなく可愛くて目眩がする。

俺は死刑宣告を待つような気持ちで深呼吸をした。

そりゃあ気になるよな、という気持ちと、とうとうすべてを伝える時が来てしまったのか、という気持ちが入り交じつて、俺はもう今すぐ死んでしまいたかった。

卑怯な手を使おうとした自分が、とんでもなく浅ましい存在に思えて仕方ない。本当ならこうして日和に触れる資格もないはずなのに、俺は彼女の手を離すことができずにいる。どう考えても、俺は日和に相応しくないのに。

それでも俺は、散々重いと言われたこの気持ちを抱えて、今日まで生きてしまつた。

どうしても、諦めることができなかった。

「……………日和のことが、好きだから」

言つてしまつた。言つてしまつた。

ほかの誰にこぼしても、日和にだけは、生きているうちに言うつもりもなかったその言葉。

それは驚くほど耳に馴染んでいて、俺はそこではじめて、この想いが隠し通せるほど小さいものではなかったのだと悟つた。きつとここで言わずとも、いずれバレていたことだつた。

日和が目を丸くする。

その少しだけつり上がった目尻が、笑う時にくしゃくしゃになるのが好きだ。

「え、つと……冗談とかではなく?」

「めっちゃめっちゃ本気」

「なんで普通に告白しなかったの?」

「付き合つてたかもしれないって日和が流されてくれるのを狙いました」

唾然とした日和は「せこい……」と呟いた。

自分でも思つていたことなのに、日和に言われるとダメージがより大きくて死にそうになる。せこくてごめん。

「……………いつから?」

「え」

「いつから私のこと好きなの?」

なんとも言えない顔をして、日和は話を続けようとする。

俺はもうとつとくに嫌われたものだとばかり思つていたので、日和の様子に拍子抜けしてしまつた。

「しよ、小学生の頃から……」

「だいぶ最初だなあ」

そうかそうかと呟く日和は、俺の手を握つたままそれを左右に揺らす。

思い返せば、手を握られるのなんて数年ぶりだ。

意識してしまつと途端に鼓動がうるさくなる。全身が心臓になつてしまつたみたいだつた。

なにかを考え込んでいる様子の日和は、言葉にならない声を漏らしながら天を仰いでいる。

「千秋、それってさ」

「？ なに——」

「ほんとに恋？」

ヒュ、と喉が鳴った。

腹の底に、声になり損なった言葉が沈んでいく。それを、君が言ってしまうのか。

「いじめから救ってくれたから、とかさ、そういうので補正かかってたりしない？」

さあつと手足の先端が冷たくなっていく。

眉を下げて俺の顔を覗き込む日和が、今は憎くて堪らなかった。

そんな否定の仕方、しないでくれ。

「……なんでそんなこと言うんだよ」

悔しいやら悲しいやらで、俺の目からはボタボタと涙が垂れた。せつかくさつき止めたのに。

「死ぬほど日和のこと好きだよ」

世界一ダサイ告白だ。床のシミとかになって消えてしまいたい。

もう駄目だ。終わりだ、なににもかも。

世界の輪郭がぼやける感覚を、頭の片隅で懐かしく思う。俺の泣き虫はもう一生治らないのかもしれない。

「ごめん千秋。酷いこと言った」

「こんな仕打ちあんまりだ」

「ごめんね。泣くなって」

「死ぬほど付き合いたって思ってるのに」

一世一代の告白がこんなにも格好つかないのは、各方面に迷惑をかけた罰だろうか。

「そんなに付き合いたいの？」

「焼かれて骨になっても隣にいさせてほしい」

「骨壺の話してるなあこの人……」

ポケットからハンカチを取り出した日和は、不器用に俺の頬を拭いた。もうやめてくれ。これ以上好きにさせないでくれ。

そんな思いも虚しく、日和はせつせと俺の涙を拭っていく。

かわいい、かわいいなあ。好きだなあ。

「日和の、隣にいたいんだ」

いさせて、と懇願する声は、情けないほどに掠れていた。

「……恋人として？」

「できればもつと近く」

「重たいなあ」

恋人にはいつか終わりが来る。確約してほしいのだ。君の隣を。俺の愛は重いらしいけど、絶対に傷つけたりはしないと誓うから。

ダメかな、と視線が下がっていく。

渡が言っていた「焼肉奢ってやるよ」の言葉が頭を過ぎった。

(食べ放題にでも連れて行ってもらおうか)

俺にはもう、日和と付き合える未来なんて見えてこなかった。

「ほんとに、私しか見えてないんだね」

そんな言葉が、俺のつむじに降ってきた。

そうだよ。日和しか見えていないから、俺は三万円もする向日葵たちを衝動買いしてしまうんだ。日和しか見えていないから、他の女の子がぼやけてしまうんだ。本当に、日和だけを見つめて生きてきたんだよ。

君の背中をずっと追いかけていたら、いつの間にか俺の足も速くなっていたんだと言ったら、流石に笑われてしまうだろうか。

馬鹿みたいに好きだと伝えたはずなのに、まだ分からないのかと言つてやるつもりで、俺は顔を上げる。

視線が絡まって、日和の目を見たその瞬間、俺は声の出し方を忘れてしまった。

「しょうがないなあ、千秋は」

俺を見つめるその瞳の奥が、どろりと溶けた。

はくり、と喉が震える。

いいよ、付き合っちゃおうか、とにんまり笑う日和は、俺が知らない顔をしていた。

或る夏

中条

和音

「もう制服着た？」

「うん」

「そろそろ家出るよ」

「わかった」

母は真珠のイヤリングをつけている。私は支度が終わっている
ので、玄関で靴を履いていた。

「駅まで先歩いていいよ」

私のことを急かした癖に、まだ香水を振りかけている母が言う。

「わかった。早く来てね」

ドアを開けると、日差しが突き刺してきた。耳を劈くようなセ
ミの鳴き声が頭に響く。

「暑い……」

手のひらを顔の前に掲げ、日差しを遮った。

張った。

「そうね。ちょっと此処で待っていて」

そう言っただけは足早に、施設の中へと入っていく。

一人でいると、誰かが私の方へと歩いてきた。

「花ちゃん、今日は来てくれてありがとう」

華のお母さんだ。

「ご愁傷さまです」

「そんなこと言わなくていいのよ。花ちゃんが来てくれただけで

華もきつと喜んでるわ」

「……ありがとう、ございます」

華のお母さんは目に涙を浮かべている。

私の全てだった華。一番思い出が詰まっている夏にお別れする
ことになるなんて、夢にも思っていなかった。目を瞑るだけで、
懐かしいあの記憶がスッと蘇る――。

「……まだ十六歳なのに、早すぎるわよねえ」

式場に着くと、クラスメートの母親たちが集まってヒソヒソと
話している。皆、揃いも揃って全身黒い服だ。ふと隣を見ると、
母も混ざりに行きたそうにしている。

「ねえ、受付早く済ませちゃおうよ」と言い、母の服の裾を引つ

できている。なのに私はぼつんと椅子に座ったままだ。

息苦しい教室を出ようとドアの窪みに手をかけた時。

「うわっ」

ズン、と何かが覆いかぶさってきた。

ギャルだ。茶色く染めている巻き髪と、膝上十センチのスカ―
ト丈。それはどちらも校則違反である。大体、話したこともない
人にこんなことするのはギャルしか居ない。

「私たちクラス一緒に名前も一緒にだよヤバくない？ よろしくね
っ！」

ギャルは手の平を私に差し出した。指の先からは長く伸ばした
ネイルがキラキラと輝いている。ちなみにこれも校則違反である。

ちらつと手に持っている名簿を見る。ギャルの名前も私と一緒に
『はな』らしい。ただ、漢字は『華』と書くみたいだ。見た目
に華があるので、私と違って名前負けしていなくて羨ましいと思
った。

「とりま一緒に帰ろ！」

グイッと手を引く張られると、宙に浮いた気分になった。人混
みを避けながら走る。気がつけば下駄箱に着いていて、ギャルと
帰らざるを得なくなってしまった。

一緒に帰ってみたら、思ったより話が途切れなかった。という
か楽しい。華は全ての語尾にビックリマークが付いているような
喋り方をして、全ての話に大きなリアクションをしてくれる。そ

して一つ一つの話が面白い。高校生になったら絶対にギャルにな

ろうとしていた話、「華」という名前に誇りを持っている話、同
じ名前の人に逢えて嬉しいという話、私の「花」という漢字も素
敵だという話。お腹が痛くなるほど笑ったし、一度も飽きること
なく話を聞いた。気づけば私は、華と友達になりたい、という気
持ちでいっぱいになっていた。

華は、見た目は派手なギャルだが、勉強もスポーツも学年一を
取ってしまうような、文武両道の女の子だった。

いつもは化粧品の話しかないし、可愛いものと甘いものには
目がない普通のギャル。でも、何かに打ち込み始めると途端に人
が変わる。まあまあ進学校なのにテストは全部九十点以上を取る
し、三時間目の持久走はバスケット部や陸上部を抜かしてぶっちぎり
の一位だった。

「華ちゃんすごい！」

ゴールにはクラスメイトが華を讃えるために集まってくる。

「ねね、陸上部に入らない？」

「いやいや、我々バスケット部へ！」

陸上部とバスケット部が集まり、喧嘩を始める。

「いやあ、迷っちゃうなあ」

華は自分の頭をわしゃわしゃと掻く。照れるとやる癖だ。

しかし、私は知っている。登校時間の一時間前に学校に着き、

学校裏の坂道で毎日ダッシュをしていたことを。放課後も、近くの公園に行ってランニングしていたことを。

テストの時もそうだ。二週間前になると全ての予定を断って、駅前のファミレスで終電ギリギリまで一人で勉強している。中間テストの時に一緒に勉強をしたが、華の集中力はなかなか途切れず、ぶっ続けて四時間勉強した。華が持っているのは才能だけではない。努力を惜しまずに行っているからこそその結果なのだ。

華はその努力を、誰にも見せないし言わない。それを知っているのは私だけ。

なんで知っているかって？ それは私だけの秘密、ってことで……。

六月。

ある程度色々なクラスメイトとも交流するようになってきた頃だ。

なかなか掃除をしない男子に注意をした時、毒を吐かれた。

「お前、名前負けしてんだよ。プス」

華と違い、私はプスでどん臭く、運動も勉強も出来ない。『花のように可憐で美しく』だなんて意味でつけられたこの名前を恨むことは数え切れないほどあった。その場に居るだけで周りの空

通せんぼした。

「もう、いいの。ありがとう、華……」

私は恥ずかしいやら情けないやらで、華の顔を上手く見ることが出来ない。

「……うん」

華は、さつきまで流れていた涙をセーターの裾で拭い、何も無かったかのように振る舞う。

「また何かあったら、私に言うんだよ！」

私はそんな華の優しさに惹かれていったのだ。ずっと、大切な友達でいたい。心の底からそう思った。

気付けば私は、華にとてつもなく興味を持っていた。何時に起きるのか、どの電車に乗ってきているのか。お昼ごはんは何を食べているのか。家に帰った後は何をしているのか。どんな些細なことでも、全てを知り尽くしたくなっていた。

いつしか、華とは友達以上の関係になりたいと思うようになっていたのだ。

終業式の日、思い切って花火大会に誘った。

「あのさ、来週の土曜日にある河川敷の花火大会、一緒に行かな

気を変え、容姿も性格も『華』がある華を羨ましく思うこともある。やばい、泣きそう。鼻がツンとしてきた。

それに察した華が、つかつかと歩いてきた。

「おい」

華が、男子の腕をガシッと掴む。華の腕は華奢なのに、男子が全く身動きを取れなくなるほど力が強い。男子は「いてて、なんだよ」と強がっている。でも、あまりの痛さで顔を歪めていた。

「お前、次そんなこと言ったら許さないから。花は、私ができない気遣いもできるし、人間として、ずっと、素晴らしい人、なんだから……！」

華は台詞を一つ一つ噛み締めるように言うと同時に、大粒の涙をぼろぼろと流す。しかし、その視線は驚く程冷たく、男子を逃さまいと訴えかけているようだった。

廊下には野次馬が群がってきた。学年一位のギャルが泣きながら男子の腕を掴んでいる光景は、明らかに目立っている。男子には次第に焦りが見えてきた。

「んな事言たって、泣くことねえだろ……」

男子は大きなため息をつくど、ふん、と鼻を鳴らした。

「まあ、ごめんな」

男子は私に雑に謝って、そそくさとどこかへ行ってしまった。

「あつ、待て！」

華は男子を追いかけようとする。しかし、私は華の前に立ち、

い……？

顔が熱くなっていくのが、自分でもわかる。血管にじわじわといつもよりたくさんさんの血が流れていく感覚。このまま血管が破裂して死んでしまうかと思った。

華はどんな顔をしているのだろう。嫌だったかな、気持ち悪いと思われてないかな、という気持ちだが、頭の中で渦巻く。怖くて堪らなかつた。

でも、そんな私の予想とは裏腹に華は喜んでくれた。

「え！ え!? いいの!?!」

華は目を輝かせて、私の手を握る。

「行きたーい！ ねえねえ浴衣着ていこーよ！」

華は私の手を握ったまま、ぴよんぴよんと跳ねる。この時には、既に意識は飛んでいった。

華の……浴衣姿……？ 花火大会と一緒にに行けるだけでなく、浴衣姿まで見られるの……？ どれだけ幸せ者なんだ私は……。

ポーっと頭が更に熱くなる。そこからは記憶がない。

バタン!!!

気付いたら保健室のベッドで眠っていた。なんか息苦しいなと思つたら、鼻に脱脂綿を詰め込まれていた。

保健の先生に話を聞くと、どうやら私はあまりの嬉しさに鼻血を出し、そのまま倒れてしまったそうだ……。

ここまで運んでくれたのが華だと聞き、私はもう一度寝込んだ。

八月四日。午前六時。

待ち合わせの三十分前に着いてしまった。ドキドキしながら華を待つ。あの人かな？ と何人かに検討をつけながらキョロキョロしていたが、全部違った。

「お待たせ」

柱の影からひよい、と華が顔を出した。

「わっ」

驚いて声が出てしまった。それは、自分が予想していなかった角度から出てきたからだけでない。華の浴衣姿がとても美しくかつたからだ。

白地の浴衣に大きな向日葵が大胆に描かれていて、明るい華の性格を彷彿とさせるデザインだった。帯は赤で、結び目のところからチラッと見える裏地の紫が何とも可愛らしい。いつも下ろしている栗色の髪を夜会巻きのようにし、綺麗に整えられたうなじから何本か後れ毛が出てきていた。

いつもは活発なのに、今日は竹下夢二の描く女性のような、翳りのある色っぽい女性のように見えた。私も一応浴衣で来たけど、

んとなく、小学生の時国語で習った『スイミー』を思い出した。

かと思いきや、空を全て覆い尽くす程の大きな花火が打ち上がる。

この花火大会の目玉である、四尺玉花火だ。

「……………」

華が何か言ったが、花火の音でよく聞き取れなかった。

「何ー！ 聞こえない!!」

私はお腹の底から声を出し、華が何と言ったのか聞こうと試みた。しかし、華は困惑している私をお構い無しに手を引っ張り、橋の方へと連れ出す。

連れてきてくれたのは、小さな橋のど真ん中だった。誰もいないし、周りには障害物がないので空一面を見渡せる。さつき華は、「こち来てー！ みたいなことを言ってくれたのだろう。」

「ここね、昔おばあちゃんと来た時に教えてもらった所なんだ。本当はおばあちゃんと私だけの秘密だったけど、花にも教えてあげるね」

華の笑顔は、花火にも負けないくらい輝いていた。

河川敷から少し離れている場所だから花火の音も雑踏もさつきより小さくて、鈴虫の音がよく聞こえる。

「……花はね、私が今まで生きてきた中で一番好きだと思える女の子なんだ」

華が私にほほ笑みかける。これは両思い……？ 私は思わず心

一緒に歩くのが恥ずかしくなるくらいだ。私なんておばあちゃんの作ったダッサイ模様の浴衣だし。

「花の浴衣可愛い〜!!」

華は浴衣の向日葵のような笑顔をして、私に抱きついてきた。

「……華の方が可愛いよ」

私は華が眩しすぎて、思わず目を逸らしながら呟いた。

待ち合わせ場所の駅から、歩いて十分の河川敷へと着いた。

歩けば歩くほど、人の流れが多くなる。

「危ないから手繋ご」

華が私の人差し指を触った。

自分で制御できないくらい、心臓が苦しくなった。華に心臓の音が聞こえていないか、心配になる。

ドン！ ドン!! ドン!!!

突然の轟音に身体が震える。その瞬間、空がピカッと光り、一面に色とりどりの火球が広がった。

「わあ……」

思わず、歩く足取りを止める。

赤、青、緑の小さい花火が集まって、大きな花火に見える。な

臓が止まりそうになった。

「来年も、再来年も、学校が別々になろうとも、運命の王子様と結ばれようとも、私は花とまたこうやって花火を見たい。……約束、している?」

華の顔が、少しだけ赤く見えた。それは、もしかしたら赤色の花火が反射しているだけかもしれない。それでも私は嬉しくて、思わず華の手を握ってしまった。

「……うん。私も。ずっと一緒にいよう」

十二月。

期末が終わり、冬休みに何をしようかと皆が浮かれている時期。

華は時々体育を休むようになった。

「最近、体調悪いの?」

華は暫く黙っていたが、蚊の鳴くような声でポツリと呟いた。

「ちっちゃい頃からの病気がね、最近悪さしてて……。でも気にしないで!」

華はすぐに顔を上げ、ニコリと笑った。

知らなかった。どんな時にも一緒にいたはずの華のことを何も知らなかったような気がして、少し傷ついた。

「そうだったんだ。お大事にね」

「うん！ ありがとう」

そんな時にも華は元気に返事をする。

「さて！ 今日もしレポート頑張って描かないとな。花も持久走頑張って！」

「うっ、今日は持久走だったか……。思い出したくなかったわ」
この世の終わりみたいな絶望をしている私をみて、華はケラケラと笑う。玉を転がすような笑い声に思わず釣られてしまい、一緒にお腹を抱えて笑い合った。

でも、私が思っていたよりも何倍も、華の体は病に蝕まれていた。

年が明け、また四月になった。

桜が咲き、クラス替えて周りが盛り上がっている始業式の日。桜の花の美しさに気を取られていると、華が私のところに走ってきた。

「花あ！ クラス表見た!? 私たちまた一緒！ やったー!!」

華は私に抱きついた。

「ねえ暑いって……」

「そんな事言わないでよー！ 照れちゃってえ」

華の顔が私の顔にくっついた。私は呆れたような素振りを見せられているが、内心ではガッツポーズをして誰彼構わずキスをしたくなるほど嬉しかった。でもキャラじゃないのでクールぶった。

を押え、嘔吐のように呼吸をしている華をずっと見ていた。

華はなんとか一命を取り留めたが、意識不明になった。今は集中治療室に運ばれ、意識が回復するのを待っている。医者には帰っていいと言われたが、帰ったらもう会えなくなってしまうようで、病院の椅子から立ち上がることが出来なかった。

その時。

「花ちゃん……?」

知らないおばさんが声をかけてきた。優しそうな人。

「そうですけど……」

「やっぱり！ 私、華の母です」

言われてみれば、華に似ている。クリっとした目、真顔でも口角の上があった口。ふわふわと感じる雰囲気は、母親譲りだったのかと思った。

「華からよくお話は聞いていたの。いつも華のこと、ありがとう」

「いえいえ、そんなこと……」

いきなり改まったことを言われたので焦ってしまった。

「華が起きるまで、しばらくお話ししましょ」

いつものように学校が終わり、最寄り駅まで歩いていく。

「ねえ、今日午前授業だったし、久しぶりにお昼食へ行かない? 華最近予定あつてなかなか遊べなかったし」

「うんうん！ いいよ」

「駅前に出来たカフェ行こうよ」

「あそこのパンケーキめっちゃくちゃ食べたかったの！ 嬉しいなあ」

他愛もない話をしていてその時、華が胸を押さえ息を荒くしました。

「え、大丈夫なの」

「う、うん。すぐ収まるから待って——」

華は会話の途中でいきなり動かなくなった。

静かに倒れ、痙攣しだした。口からは泡を吐いて、顔が青白くなっていく。

周りがざわつき始める。

「ねえ、やばいんじゃない?」

「やだ、死んでないよね?」

「ちよっと！ 早く一一九番に連絡して!!」

「AED持ってきてください!!」

私は怖くて、何も出来なかった。ただ、顔が真っ白になって胸

「いいんですか?」

「勿論よ。華のお友達に悪い子なんて居るはずないんだから!」

華のお母さんは、パチンとウインクをした。華のような語尾にビックリマークを付けるような話し方に、心地良さを感じた。

しばらく私と華の思い出話や、華の小さかった頃の話をしていった。華のお母さんはなんでもオーバリアクションを取りながら話を聞いてくれたので、とても楽しかった。

……私はこの雰囲気で何か聞き出せるのではないかと思い、思わず禁断の質問をしてしまった。

「華は、一体何て病気なんですか? 華は助かりますよね?」

「……」

やはり、華のお母さんは黙ってしまった。こんな事聞かなければよかったと後悔していたその時、口を開いてくれた。

「……もしも、華が目覚めることが出来ても秘密ね」

目には涙を浮かべている。

「華はね、余命三ヶ月なの」

頭の中が真っ白になって、息が出来なくなった。手と口が上手く動かない。

「驚かせてごめんね。華に口止めされていたから……」

「そんな……。さっきまであんなに元気だったのに……」

頭を鈍器で殴られたような目眩がする。

「私もね、家ではいつも元気だったからたまに勘違いする時があったわ。でも本当はずっと身体に激痛が走っているはずよ」

知らなかった。そんなに苦しんでいたなんて……。

もつと華の愛情を素直に受け止めればよかった。私も華を抱きしめてあげればよかった。

ダムが決壊したように涙が溢れる。

「華……！ ごめんね、気づかなかった……うっ……うあぁっ……」

私は華のお母さんが隣にいるのを忘れて、泣き崩れた。

……本当に悲しい時って、大声で泣けないんだな。

華のお母さんは、私の肩に手を置いた。

「華はね、いつもあなたの話をしていたわ。いつも華の話を最後まで聞いてくれて、一緒に笑ってくれる。出会った中で一番の友達だって……！」

華のお母さんも嗚咽を漏らす。

私たちは一晩中泣き続けた。

あれから二日後、華は一度目を開けたが、そこから会話することも、動くことも出来ず静かに息を引き取った。余命よりは一ヶ月長く生きたが、私にとってはあまりにも短すぎた。

華とカフェに行つてパンケーキを食べたかった。秋になったら

修学旅行もあった。受験勉強だって共に乗り越えたかったし、卒業式では一緒に声を上げて泣きたかった。花火大会だって、これからもずっと行こうって約束したじゃんか……。

気が付けば焼香は終わって、出棺の準備が進められていた。

祭壇にはたくさんのお花が飾られている。それを一人一本持つてきて、華の棺へと納めていた。

私はなかなか華の元へ行けない。華の死を受け入れることがまだできていないから、華の死に顔を見るとというのが怖かった。

「花。もうあなたで最後よ」

母が脇腹をつついてきた。

「もう受け入れるしかないのよ。華ちゃんの顔見られるの、これで最後なんだから行ってきなさい」

母はとても厳しい顔をしている。でも、私は何だか安心した。意を決して台座のお花を持つ。一番大きな百合にした。そして花の棺へと向かう。足が震えて上手く歩けない。華の顔を見るのが怖い。

すると、誰かが私の肩に手を置いてくれた。

「花ちゃん。一緒にお花添えに行こうか」

華のお母さんが来てくれたのである。

ずしりと覆い被さっていた重い布がフワッと飛んでいったかの

ように、私の心は軽くなった。

「華。花ちゃん来てくれたよ」

華のお母さんが、華に話しかけた。

「花ちゃん。おいで。華、すごく綺麗だから」

私は棺の中を覗いた。

華は、とても綺麗だった。

周りは色とりどりなたくさんの花に囲まれていて、花でできたベッドに埋もれているようだった。いつもより薄い化粧もほんの少し施されていて、頬と唇がほんのり赤く染まっている。華は元から口角が上がっているの、少し微笑んでいるように見えた。でもどこか無機質で人形のようにも見える。もうこの身体には生気が宿っていないことは一目瞭然だ。

それでも彼女の亡骸は美しすぎて、涙が溢れた。

嫁入り

金川 勇人

戸を開けると、ひんやりとした空気がおはくの肌に触れる。草鞋を履いて一歩外に出ると、おはくは村を見渡した。おはくの家からは彼女の住む村、坂根村の様子を展望することができる。まだ朝早いからか、人の姿はほとんどいない。稲穂をぎっしりと敷き詰めた田んぼは朝日を浴びて、黄金のようにキラキラと輝いていた。

村をひとしきり見渡したのち、おはくは少し顔をあげて、村の奥に広がる樹海をじっと見つめた。樹海の中ほどには、深緑色の葉を茂らせた大杉が黒々と聳えている。雄々しいその姿は、周囲の村々を監視しているかのような威圧感を持っていた。

私は明日、あの大杉の下に行かなければならない。

そう考えながら大杉を見つめるうちに、おはくの指は自然と震えていた。手をそっと胸に置いて、大杉から目をそらすように、樹海の向こうに聳え立つ大倉岳を見つめる。大倉岳は既に雪が来ていて、山頂が白くなっているのがよく見えた。

「おらが一番じゃあ」

「何言うとるんじゃあ。おらが一番じゃあ」

視線を村に戻す。引根村へと繋がるささやき川に架かる小さな橋の上を、鬼の面やらおかめの面やら狐の面やらを着けた村の子供たちが渡っていくのが見えた。今年の三根祭のやぐらが立てら

背中越しに聞こえる母の申し訳なさそうな声に、おはくの心は傷んだ。

「仕方ねえだ。もう私の身体は、私だけのものじゃねえ。杉神さまに贈るための、大切な身体だ。その身体に傷でもついて、みんなに迷惑かけちゃ、いかんもんなあ」

明るく振る舞おう。そう思っただけのおはくの声は絞り出すようなものになっていた。おはくの母はフウと一息吐くと、家の中へと戻っていった。

おはくは思い切り息を吸った。朝の空気は爽やかで、どこことなく甘い味がする。息を吐くと、今度は村を、樹海を、大倉岳を眺めながら全身を使って息を吸い上げた。

明日は朝から忙しくなる。こうやって朝の空気をたっぷり吸うのも村や山をじっと眺めるのも今日で最後であろう。

そんなことを考えながら、おはくは朝の空気を味わうように呼吸し、そして村や遠くに聳える大倉岳の景色を目に焼き付けるようにじっと見つめた。

中部の山岳部の奥深くに、おはくの暮らす坂根村はある。

坂根村は他の山々に囲まれた土地に比べて、稲作が盛んであった。秋になるとどの田んぼでも稲穂がぎっしりと実り、毎年

れた引根神社まで、駆けっこをしているようである。

お面……、懐かしいなあ……。

おはくは昔のことを思い出す。――幼い頃は、毎年のようにお菊と作治と三人で、それぞれお面をつけてあの子たちみたいに駆けっこしながら、三根祭のやぐらまで行ったこと。十四の時、やぐらの上で力強く太鼓を叩く作治の姿を見て、初めて格好が良かったこと。それをお菊に見透かされてからかわれたこと。去年、作治と一緒に三根おどりをしたこと。そして三根おどりが終わった後、来年も一緒に踊ろうと約束したこと。――懐かしさで、おはくの心は暖かくなった。だが、もうそうやって過ごすことができない。そのことを思い出し、おはくの暖かくなった心は、再び冷えていった。

「おはく」

声の方を振り返る。布団から起き上がったおはくの母が、じっとこちらを見つめていた。

「あんまり長く外に出ねえ方がええ。……虫にでも喰われたらよくねえべ」

「……わかった。けどもう少しだけ、外に居させてくれなあ」

おはくの母は何も言わなかった。そうして緋色の綿入れを身に纏うと、表に出ておはくの側に立った。

「……すまねえなあおはく。本当はお前だつて最後に三根祭さ行って、みんなと一緒に三根おどり踊りたかつたらうに」

ように村中を黄金色に染め上げた。坂根村の東隣、ささやき川を越えた丘の向こうには引根村がある。引根村は土の質が良いのか、どの季節においても多種多様な野菜が育った。中でも夏野菜は、遠く関東の山々に住む人々の耳に伝わるほどの絶品であった。坂根村の西隣、緑茂る林を越えた先には風根村がある。こちらは樹木が育ちやすい土地のようで、果物がよく実った。特にこの村で採れる梨は風根梨と呼ばれ、他の梨よりも水々しく甘いということの評判である。この三つの村は、いずれも「根」の字をその名に含んでいることから「三根村」とも呼ばれている。三根村の人々はみな仲睦まじく、互い互いを家族のように思いながら暮らしていた。

三根村の北側には遠場山脈が聳え立つ。遠場山脈の山肌は丸々としていて、そこはかとなく穏やかな雰囲気があった。反対に村の南側に聳え立つ大倉岳は山肌が黒々として鋭く、威圧的な雰囲気を持っていた。この大倉岳の麓から坂根村と風根村の間にある林の側までには、鬱蒼とした樹海が広がっている。昼も夜も暗く、まるで物の怪でも現れそうなこの樹海の中に進んで入ろうとする者は誰もいない。村人たちがこの樹海の中に入るのには、樹海の中心に立つ大杉の下に行くときだけである。

樹海に立つ大杉は樹齢千年だと言われている。深緑色の鋭く尖った葉を茂らせ、今にも天に届かんとばかりにそそり立つその姿は荘厳であった。三根村の人々はこの大杉に神が宿り、村を守つ

て下さっていると信じていた。だからこの大杉のことを杉神さまと呼び慕い、木のたもとに社を建てて杉神を祀っていた。そうして豊作祈願や村に災いが起きたときなど、村々にとって重要なことが起きたときは必ず参拝した。

秋が来ると、三根村の人々は合同で三根祭という祭を行い、その年の収穫を祝い、そして次の年の豊作を願った。この祭自体はもう三百年ほど前から行われているものであったが、およそ五十年前から祭の最後にある儀式が行われるようになった。それは、村の若い娘を杉神さまに捧げる「嫁入り」である。

五十年ほど前、三根村は危機に見舞われていた。その年は水捌けが悪く、稲も野菜も果物もほとんど腐っていき、収穫が前の年の十分の一もなかったのである。山を降りて宿場や里に収穫物を売って生計を立てていた村人たちにとって、この不作は大きな痛手となった。さらに、付近の山々から猿や猪といった獣が村に現れて田畑を荒らしてはわずかに実った作物を取っていったり、近くに山賊が住み着いて村の家々を荒らしては残り少ない食べ物を奪うようになったりと、村には不幸が続いた。売るための作物はおろか、自分たちの食べるものまで少なくなったことで三根村の飢餓は段々と酷くなり、夜逃げや自死が相次いで起こるようになった。それぞれの村の村長や三根村をまとめる長老らは打開策を模索し、同時に村の守り神である杉神さまに願をかけた。毎日毎日、暗い樹海の中を進んで、村から三里はある杉神さまを祀る社

風根村の村長らに介抱されて、娘は意識を取り戻した。わずかな米と水で作った粥を飲みながら、娘はこれまでの自分の経緯を寂しげに語り始めた。――両親を早くに亡くしたこと。両親が亡くなつてすぐ、悪い親戚に騙されて家も財産も全て失ったこと。その後に移り住んだ村で米が盗まれる事件が起きて、盗人と疑われ村八分にあつたこと。この世の全てに絶望して、死に場所を求めてあてもなく放浪していること。――娘はそこまで語ると、粥を飲んでからすぐに出ていくと呟いた。

三

風根村の村長の頭の中で、誰かの囁く声があつた。

村長は娘に、例のお告げの話聞かせた。そうして娘に、杉神さまの捧げものになつてもらえないかと頭を下げて頼み込んだ。娘は、

「どうせ必要のないこの命。みなさんの助けとなるのなら、喜んで捧げましょう」

そう呟いて微笑んだ。

こうして三根祭の最後の夜、この娘は生きたまま棺の中に入り、杉神さまへと捧げられた。一年間の安泰を願いながら、村人たちは費になつてくれた娘に感謝し、詫言た。

不思議なことに、三根祭の後から獣や山賊が村に現れなくなつた。その年の秋の終わり、もう駄目だと諦めかけていた稲に、少

に通い、村を救つてくださるよう杉神さまに懇願したのである。

願を掛けるようになってから二十一日目を迎える秋の夜。三根村をまとめていた当時の長老、源左衛門は夢を見た。

夢の中で、源左衛門は樹海を彷徨っていた。真つ暗な木々の間を歩いているうちに、突然源左衛門の視界がパアツと明るくなつた。そこに立っていたのは、あの大杉であった。神々しい光を発する大杉を見て、源左衛門は杉神さまが現れたのだと即座に察し平伏した。すると杉神さまは重々しい声で、源左衛門に対しこう告げたという。

「祭の終わりの夜、若い娘を生きたまま棺に入れて社の前に埋め、私に捧げたまえ。さすればそれから一年は、三つの村を災いから守ろう。なお、娘は毎年捧げたまえ。さもなくば、その年は災いが舞い込むであろう」

翌朝、源左衛門はこの夢の話の人々に話すと、驚いたことに源左衛門とともに杉神さまの社に通つた村長たちや若い衆たちも、全く同じ夢を見たということが分かつた。お告げの信憑性は高まつたものの、さすがに村人たちは躊躇した。お告げとは言え、本当に村が救われるのかどうか分からないもののためだけに娘を犠牲にしようなどと、到底決断できることはなかつたからだ。

答えが出ぬまま十月が訪れ、いよいよ三根祭まであと数日だというときのことである。風根村の風根神社の側で、一人の若い娘が倒れているのが発見された。

しただけであつたが実があつた。その量は、村の者全員が何とか冬を越せるだけのものではあつたという。次の年、稲も野菜も果物も、例年とは比にならないほど、大豊作となつた。

以後五十年、三根祭の最後に、豊作祈願と村への災いを防ぐために、娘を一人、杉神さまに捧げる儀式が続いている。杉神さまの下に娘を送り出す。それを婚禮の儀に見立てて、「嫁入り」という名が、この儀式に名付けられている。

隙間から通そうと反対側の手に投げた桴が、勢いあまつて遠くへ飛んで地面に落ちた。

「あ、いかん」

立ち上がつておはくは地面に落ちた桴を拾つた。幸い軽く投げたので壊れてはいない。機織り機に戻ると、桴につけた緯糸がすでに張られた経糸に絡まないよう、慎重に桴を隙間から外した。そうしてもう一度、桴を隙間に通して軽く投げた。今度は上手く反対側の手に届く。

春先から始めたおはくは機織りも、いよいよ終わりが見えてきていた。白に、薄い桃色を織り交ぜた布。この布を使って、おはくは今年の三根祭に着ていく着物を仕立てるつもりだ。

カンカカンと箆を打ち込む音、桴を隙間から通すときになるシ

ヤーツという音、そして踏み板を踏む時になるガツタンという重い音、いずれの音もおはくはたまらなく好きであった。機織り自体は時間のかかるものであるし面倒でもあるため、あまり好きではない。しかし機織りをする最中になるこれらの音は、おはくの中にある面倒という気持ちをかき消し、むしろ機織りを楽しいと思わせてくれる力があつた。——とは言つても、やはり飽きややる気が落ちてしまうときは必ず来る。そんなとき、おはくは機織り機の音に合わせて、村の婆さや母が教えてくれた歌を唄う。唄うことで気持ちが朗らかになり、次第に機を織る手つきも軽いものになっていくからだ。

杼を落としたことで少しやる気が削がれてしまった。そこで機織りを再開してすぐ、おはくは歌を唄いはじめた。おはくが一番好きな歌、オシロイバナの歌である。

紅い花卉を衣につけて

黒き種から粉を出す

それをちよいと娘につければ

清き花嫁できあがる

「相変わらず下手くそな歌じゃのう」

不意に後ろを振り向くと、機織り小屋の戸口に作治がニヤニヤと白い歯を見せながら立っていた。ムツとしながらおはくは返し

はくの父も、見届け人として他の村人と一緒に引根村の引根神社に行っている。

「それじゃあ息抜きで、行くだ」

そうおはくが答えると、作治は嬉しそうに行こう行こうと呟いて、おはくの手を引いて外に出た。作治の陽に焼けた色黒い手は、普段から力仕事をやっていることもあって固く力強く、だけどこか温かみがあつて心地の良い感触であつた。

夏ももう終わりだと言うのに、陽射しはまだまだ強い。普段は家の外に出ず機織りをして過ごしていたおはくと違って、日光の熱は中々辛いものであつた。そんな暑さの苦痛も、ささやき川の側まで来て、川から来る涼しげで爽やかな風と、さらさらと言いつながら流れる川の穏やかな音を感じることでだいぶ和らいだ。ささやき川の川沿いの草原や葉をつけた低木にはツユクサの青い花や、オシロイバナの白や桃色の花がチラホラと咲いていて、緑色の川沿いに華を添えている。

川辺に腰を下ろすと、おはくはささやき川の水を手を掬い口に含んだ。遠場山脈から流れてきた清水はひんやりとしていて、甘みがあつた。底が見えるほど澄んだ川の水面に、おはくの細く白い百合のような顔が映る。

「おっと、危ない」

おはくの右側に座ろうとした作治が慌てて立ち上がる。おはくがその場に目を遣ると、そこには小さなツユクサの花が二、三輪

た。

「誰の歌が手下だというんじゃあ」

「お前の歌じゃよ。どれ布の方はと……ほう、こっちは中々綺麗に出来上がってきているでねえだか。でも、三根祭までには間に合うんかいの？」

堂々と小屋に入ってきて布を覗き込む作治に、おはくはそっぽを向いた。

「ご心配なく。三根祭まであと二ヶ月もあるで、余裕じゃあ」

「そうか、それじゃあこの着物着たお前の姿も見られるんじゃなあ。そりゃ楽しみだのう」

何気ない作治の言葉に、おはくは顔を赤らめた。しばらく布を眺めてから、作治はおはくを見つめて笑顔を浮かべて言った。

「さつきからずっと機織りして疲れたろ。少しささやき川の方へ涼みに行かんか？」

「涼み？ そりゃあええけど、あんたの仕事はもう終わったか？」

サボったりしたらおとつあんに叱られるよ」

「今日は仕事さないんだ。ほら今日は……三根祭のことで色々しなけりゃいけないから、親父はそっちの方さずるために引根村に行つて、俺は一日休んでろつて言われただ」

「ああそうか。今日は三根祭の……」

そう言われておはくは思い出す。今日は三根祭において最も重要な、嫁入りをする娘は誰なのかが決まる重要な日であつた。お

ほど咲いていた。

「すまんのお、危うく潰しそうになつてしもうたなあ。こっちの方は……、おう大丈夫じゃ」

ツユクサに謝つてから、おはくの左側に花がないことを確かめると、作治はその場に腰を下ろした。子供っぽさを残しながらも、虫や花などの小さな命をも邪険にせず大切にしようとする。こういう優しいところが作治の最も良いところだと、おはくは横に座る彼を見つめて思った。

おはくと作治は涼みながら談笑した。おはくは機織りのこと。作治は畑仕事のことや村の若い仲間としたバカなこと。他愛のない普通の話ばかりである。だが二人にとつて、こうして普通の話や二人で笑いあつて話すときが、何よりも楽しく、何よりも幸福なときであつた。

しばらく談笑したのち、おはくは立ち上がると、近くに立っていた低木に近づいた。そして桃色のオシロイバナを一輪手にすると、元の場所に戻ってきた。

「作治は、なんでこの花がオシロイバナって呼ばれるか知ってる？」

「いんや」

「なら、よおくと見といて」

そう言つて微笑みながら、おはくはオシロイバナの先につく黒い種を花から摘み取る。そして右の掌に種を乗せると、ぎゅつと

掌を握った。

「おおっ」

開かれた右手を見て、作治が驚嘆の声を上げる。掌の黒い種は割れて、中から白い粉が溢れ出てきていた。

「この種を潰すとなあ、こんな感じで白い粉が出てくる。これが白粉になるんじや。白粉は知っておるじやろう。そう、だからこの花はオシロイバナって言うんじやあ」

おはくは左の人差し指にその粉をつけると、それを自分の左頬につけた。そうして「どうじや」と言ってお作治に向かって微笑んでみせた。

「お前の肌は元々白いんじやあ。なんも変わらんよ。それよりも、俺がつけたらどうなるんじやろうかな」

作治も指に粉をつけると、それを自分の右頬につけた。やや色黒の作治の肌と白い丸がつく。それが頬だけ白い狸のように見えて、おはくは思わず吹き出した。

「笑うなや。ところでお前、よくこんなこと知っておったな」

「昔なあ、教えてもらったんじやあ、ここで花嫁ごっこしながら……」

おはくの顔に陰が差した。

「……お菊ちゃんに。確か十のときだったと思う」

絞り出すかのように話すおはくを見て、作治の顔も曇る。顔についた粉を袖で拭き落としながら、「そうか」とだけ作治は呟いた。

おはくの独白に、作治は何も答えなかった。ただ、遠くそびえる大杉をじつと睨んでいる。

「……杉神さまは、罪作りな神さまじやあ」

「え？」

「毎年毎年、娘をよこせと言って奪っていく。俺たちの生活と引き換えに、卑怯な神じや」

「作治、もうそれ以上は……」

おはくの制止も作治にはもう届かない。一度出た作治の感情は言葉になって溢れていく。

「娘を出さなけりやならない、苦しみや悲しみ。それをあんな高いところから見笑っている。お菊も、他の娘も、みんな奪って笑っておられる。酷い神じやあ」

「もう言わないで」

おはくは背中越しに作治に抱きついた。

「もう言わないでそんなこと。杉神さまは、私たちを守ってくださる神さまじやあ。そんな神さまを悪く言うなんて……。それに、そんなこと村の誰かに聞かれたら、袋叩きじやあ。私は、あんなに痛い思いさしてほしくねえ」

背中越しに静かに論ずおはくの声は、確かに作治の耳に届いた。作治は身体をおはくの方に向ける。

「すまん」

一言呟いて、作治はおはくの細く白い手を優しく握った。ひん

た。

しばらく二人は沈黙した。おはくは残されたオシロイバナの花弁を見つめ、作治は空を見上げながら。沈黙の中で、蟬の声と川のせせらぎだけが鳴り続ける。

不意に作治が立ち上がる。指に唾をつけると作治はその指を天に掲げた。そうして安堵して腰を下ろした。

「風は大倉岳の方に吹いておる。矢はお前の家の方に飛んでころう」

おはくはその意味を理解している。作治は風向きを見て、白羽の矢が自分の家の方に飛んでこないか確認してくれているのだ。

嫁入りに出される娘の決め方は、毎年順番に娘を出す村を変えて、その村の中の若い、十二から二十の娘の中から決められる。今年はおはくが住む、この坂根村の番であった。とは言っても当然話し合いなどで決めるわけではない。前の年に娘を出し、そしてその年の三根祭のやぐらが建てられる村の、最も高いところから娘を出す村に向かって白羽の矢を放ち、その矢が落ちたところから最も近くに住む若い娘が嫁入りに出される娘に選ばれる。今年引根村の引根神社からその矢が放たれる予定で、おはくや作治の父もその様子を見届けに引根神社に行っていた。

おはくは今年二十になる。嫁入りに出される可能性は大いにあった。作治は、そのことを気にして風向きを見ているのだろう。

「……矢が私の家の近くに落ちたら、どうなるんやろうなあ」

やりとしたその手は、怒りで熱くなった作治の心を落ち着かせた。

「今年さえ乗り越えれば、もうお前が嫁入りに選ばれる心配はねえ。今年の三根祭が終わったら、俺と、俺と……」

そこまで言うと、作治はおはくの華奢な身体を自分の胸に寄せた。その言葉に應えるかのように、おはくは作治の背中に自らの細い腕を伸ばした。

ビューツという音を立てながら、尾の白い矢が坂根村の上空を舞う。放たれた矢は最初、北からくる風に流され南の方に向かっていった。が、突如南から吹いた強風に煽られ、矢は村の北へと流されていった。

そうして矢は——おはくの家の機織り小屋の屋根に、突き刺さった。

おはくと作治は互いに手を握りながら、村の北にあるおはくの家に戻ってきた。すでに、おはくの家の前には村人たちが集まっており、長老や村長たちが何やら話し合っている。

その側で、おはくの父が呆然としながら座り込んでいた。

村人の一人が村長におはくが来たことを伝える。村長は振り向いて、作治の手を握り締めながら立ち尽くすおはくに目を向けた。悲しげな顔を浮かべながら、村長はおはくに告げた。

「おはく、今年の嫁入りはお前じや」

作治が固く、おはくの手を握る。おはくもそれに返すよう強く握り返した。が、すぐに優しくその手を解く。村人たちの視線が注がれる中でおはくは口を開いた。

「お選びいただき、ありがとうございます」

四

「この度は、誠におめでとうございます」

「祝福していただきありがとうございます」

祝福の言葉を述べて頭を下げる村長に、おはくは感謝の言葉を返した。

坂根神社の社務所の上座に、おはくとその両親が並んで座っている。そうして、上座のおはくに祝いの言葉を述べるために並ぶ人々の列が、社務所の外、坂根神社に続く石段の一番下まで、ずっと続いていった。

この嫁入りの風習が始まって以来、三根村の人々は嫁入りの儀が行われる前日の夕方、嫁入りに出す娘を送り出すための祝言を、娘が暮らす村の神社で欠かさずに行っている。最初は平素の祝言と同様に、上座に座る娘の周りで村人たちが祝いながら大いに騒ぐものであったが、流石に嫁入りに出される娘やその家族に配慮して、近頃では騒がず静かに語らう程度のものになった。基本的には出された馳走や酒をひっそりと食べるだけの簡素なものであ

もしれん。その時はよろしくなあ」

そう言つてホウと一息つくくと、作治の父は去つていった。

作治の父が来たあたりから、列に見慣れぬ人々の姿が見えるようになった。村長曰く、彼らは普段から作物の取引などでお世話になっている山の下にある宿場の者や、この三根祭の話聞いて興味を持つてやつて来た者たちらしい。見知らぬ者からの祝福の言葉に返礼しながら、おはくはなんとも言えぬ気持ちの悪さを覚えた。

列が段々と途切れ始め、次の者が前に出てくるのに間が空くようになった頃。ボロボロの服を身に纏い笠を深く被った男が、社務所に入ってきた。ヨロヨロと上座に近づき、やがておはくの前に立つと、男はしばらくその場にじっと立ちすくんでいたが、やがて意を決したように笠を取った。その男の顔を見て、おはくはハッと息を飲んだ。

「お菊の、おとつあん……」

皺だらけの顔に微笑を浮かべながら、お菊の父はその場に腰を下ろした。

お菊を嫁入りに出してから、お菊の両親は必死に苦しみを隠しながら村人たちと接してきた。しかし、娘を失った傷はあまりにも深く、お菊が旅立つてから三ヶ月後に心労が祟つて、お菊の母もあの世へと旅立った。僅かの間に娘と妻、最愛の家族を失ったお菊の父の悲しみはもう、筆舌に尽くし難いものであっただろう。

るが、その祝言において最も重要とされ、これまで必ず行われてきているのが、人々が嫁入りに出される娘に祝福の言葉を送り、娘がそれに対して返礼の言葉を述べる「祝礼参りの儀」である。

同じ坂根村やその両隣の村々の知り合いが、普段は使わない丁寧でどこか他人行儀な口調を使いながら定型の祝福の言葉を述べる。その姿にどこもない違和感を覚えながらも、おはくはひたすら返礼の言葉を次々に来る相手へと返し続けた。

おはくの前に一人の男が座りこむ。色黒く岩のようにゴツゴツとした四角い顔をした男。作治の父であった。作治の父からの祝いの言葉に返礼を返すと、おはくは作治の父に尋ねた。

「作治のおとつあん、作治はどうじゃあ」

暗い顔を浮かべて、作治の父は重々しく口を開いた。

「だめじゃあ。今日の祝礼参りにも誘つてみたが、行きたくないつて断られてしまうた」

おはくは胸に手を当てた。

あの日以来、おはくは作治と一度も顔を合わせていない。おはくが嫁入りの準備で暇がなかったというのもあるが、何よりも作治がすっかり塞ぎ込んで、家に閉じこもるようになってしまったのも大きかった。一日中、魂が抜けたようにぼんやりしている。そんな話を作治の仲間たちから聞いて、おはくの胸は張り裂けそうになった。

「ただ近頃は少し落ち着いたようでの。もしかしたら後々来るかすつかり気を病んだお菊の父は、その後ひっそりと村を出て行った。お菊が嫁入りしてから半年後、おはくが十八を迎えてすぐの春のことである。

村を出てからどうやって過ごしてきたのか尋ねると、お菊の父は答えてくれた。——今は山を降りてすぐの宿場で、三根村の作物を周りの宿屋や遠くの街に紹介する請負人をしてのこと。収入は少ないが何とかやっていること。坂根村の頃からの知り合いで取引をしている者から、娘の親友であったおはくが嫁入りに出されることを聞き、居ても立っても居られず飛んできたこと。——少し呂律が回らないのか辿々しかったが、それでも何とかおはくに伝わるよう話してくれた。

お元氣そうで何よりです、とおはくはお菊の父に伝えたかった。だが、皺だらけの顔に痩せ細つてすつかり小さくなった身体、一日一日を何とか苦しみながら生きていることがこちらにもありありと伝わってくる、そんな姿をしたお菊の父は元氣とはほど遠く、おはくは何も言うことができなかつた。

お菊の父は少しだけおはくに頭を下げると、そのまま去つていった。他の者と異なり一切祝福の言葉を口にしなかつた。ただ一言、去り際に、

「むこうの世界いで、おきいくさあつたらあ、伝えてえくれえ。おとつあんは元氣だと」

辿々しくそう言つて小さな背中を向けると、そのまま社務所か

ら出ていった。去っていく小さな背中を見ながらおはくは「分か
りました、伝えておきますだあ」と呟いた。

お菊の父が去った後から、祝礼参りに来るものがどつと減った。
その寸暇で馳走を食べながら、おはくは隣に座る両親をちらりと
見た。父も母も、出された料理を黙々と食べている。平然とした
態度を装っているが、ときおり手に握られた箸が震えているのが
見えた。おはくはお菊の父のことを思い返す。父も母も、お菊の
父のようにぼろぼろになって苦しみながら過ごすのだろうか。そ
うやって一生を終えるのだろうか。両親の今後を案じているうち
に、おはくの心はずきずきと痛んだ。

祝礼参りに来るものもいなくなり、社務所にいた村の重役たち
も帰り始めた頃である。作治の仲間の一人、五郎が社務所に現れ
た。おはくの側にやってくると、五郎は耳元で囁いた。

「作治が来ている。坂根神社の本殿の裏じゃあ」

両親や村長に行っても良いかと尋ねると、快く承諾してくれた。
先に行く五郎の後に続いて、社務所を出る。来たときは薄暗かつ
た外が、もう真つ暗闇になっていた。

本殿の裏の暗闇には人影があつた。全身真つ黒なその人影に五
郎が「作治か」と問いかける。声はしなかったがパキッと枝を折
る音が聞こえてきた。「ここからは二人で」と言つて灯りをおは
くに渡すと、五郎は去つた。

人影に向かってゆっくりと、おはくは近寄りながら歩き出す。

人影が灯りに照らし出され、はっきりと姿が見えるようになった。
「作治……」

二ヶ月ぶりにあつた作治の目の下には、隈ができていた。色黒
だった肌は少し薄くなり、そして頬はこけていた。それでも目元
はスツとしていて、輪郭ははっきりしている。凛々しい姿は二ヶ
月前のままであり、おはくは少しだけ安心した。

「作治……」

何を話せば良いのか分からない。二ヶ月前なら何の気兼ねもな
く普通に話すことができた。でも今は、久しぶりに会つたから
というもあるし、自分が明日には遠くの世界に旅立つという
のもあるしで、どんなことを言えば良いのだろうか思いつかない。
——おはくは考える。考えるが、考えがまとまらない。と、突然

作治がグツとおはくの右腕を掴んだ。

「えっ」と言う声を出す間もなく、おはくは、すうつと作治の胸
の中に吸い込まれていった。手に持っていた灯りが地面に落ちて、
辺りが暗くなる。

「おはく、おはく……」

力の弱くなった腕でおはくを抱きしめながら、作治が絞り出す
ように呟く。その嗚咽を聞きながら、おはくは、作治と最後に会
つたあの日のように腕を背中に戻した。

「……おはく、今すぐ逃げろ」

低く小さな声で、作治が呟く。

「明日には、お前は埋められちまう。分かるか、死ぬということ
なんじゃ。俺は、俺は、俺はお前を死なせたくなえ。杉神さまな
んかにお前を渡したくなえ。生きて、生きて、生きてほしい。だ
から、この村から逃げて……」

「もう、ええんじゃ」

作治の腕を解き、おはくは一步下がる。暗闇の中でも、作治の
透き通つた瞳は良く見えた。自分の胸に手を置いて、おはくは口
を開く。

「ええんじゃよ。もう。私の命を差し出すことで、一年間、村の
みんなが安泰に暮らしていける。それで、ええんじゃよ」

「ええことあるか。おはく、みんなのことだけじゃなくて、自分
の幸せも……」

「私にとつての幸せは」

微笑んで言葉を続ける。

「みんなが平和に暮らしていくことだあ」

色々な思いはあつた。生きること。自分のこと。残された者た
ちのこと。だけど、みんな平穏に暮らしていつてほしい。多くの
村人が災害や不況に悩まずに過ごしてほしい。それは、おはくは
とつて偽りのない本心であつた。

作治、と呟いておはくは自分の胸に当てていた手を今度は彼の
胸においた。

「お前こそ、しっかり生きてくれえ。私が旅立つた後に、お前が

悲しい顔してたらなあ、お前の夢の中に怒鳴り込んでやるからな
あ。……しっかり生きて、杉神さまがなくても村を守るくらい、
強くなつてくれやあ。それからなあ」

作治の胸に当てていた手を片方、おはくは自分の胸に当てた。

「私のこと、忘れないでいてな。あんたが忘れない限り、私はあ
んたの中で生き続けられるから……」

互いに目を合わせながら二人は抱き合つた。お互いの身体の熱
を感じ合うように、お互いが生きていることを確認するように、
固く抱き合つた。

別れ際、おはくは作治に、明日の儀式のときにオシロイバナを
持つて来てくれるように頼んだ。作治はそれを黙って承諾し、坂
根神社の石段を降りて、闇の中へと消えていった。作治が消えて
いった闇の中に向かって、おはくはいつの間にか歌を歌っていた。
あの、オシロイバナの歌を。

紅い花卉を衣につけて

黒き種から粉を出す

それをちよいと娘につければ

清き花嫁できあがる

「狐の嫁入り？」

「ああ、見たんじやよ。遠場山脈の麓の林の中で」

ささやき川から流れてくる爽やかな風に髪を靡かせながら、お菊は言葉が続ける。

「この辺では見たこともねえくらい立派な身なりをした人たちがなあ、ずらつと並んで嫁入り行列さ作っておったんだあ。しかもな、行列の中のお嫁さんがのう、すぐくべつびんだんじやあ。本当に、ああ狐なんじやろうなあと思つても、すぐく綺麗だつたんじやあ……」

恍惚としながら、お菊は語った。

話を聞きながら、本当だろうかとおはくは思つた。狐が化ける話も狐が嫁入る話も村の婆さから何度も聞かされてはいたが、本当に狐がわざわざ嫁入りなどするのだろうか。

「狐の嫁入りなんて本当にあるんかいの。普通の嫁入り行列と見間違えたんじや……」

「あんのなあ、おはくちゃん。この辺に、立派な行列さ作つて嫁入りする家なんてねえべ。しかもな、その人たちが持つとつた灯りがなあ、何度も何度も色んな色さ変わるところ、おら見たんじやあ。赤、青、白、黄色、本当に綺麗だつたんじやあ……。そんな灯り、普通の人間が持つとるわけなからう。ありやあ狐火だつ

たんだろうなあ……」

興奮しながらそこまで話すと、お菊は空を見上げながら「ああ、花嫁ええなあ」と呟き始めた。

狐の嫁入りを見たときのことを語るお菊ちゃんの目は、真剣そのものだった。嘘や作り話をする人があんな目をするだろうか。そもそも、お菊ちゃんは嘘をつくような子ではない。だから本当に見たのかもしれない。横でぼんやりとするお菊を見ながら、おはくはそう思うことにした。

「そうだ！」

しばらく「花嫁ええなあ」と呟いていたお菊が、突然立ち上がった。

「おはくちゃん、花嫁ごっこしようや」

「花嫁ごっこ？ でも私たち何の道具も持つてねえし、綺麗な着物もないべ」

そう言つておはくは袖を掴むと、自分の薄汚れた紫色の服をお菊に見せる。

「着物はええんじや。それよりもつと、嫁入りらしいものがあるんじやよお」

ニヤツと笑うと、お菊は側の低木から、オシロイバナを一輪摘み取る。

「おはくちゃんは、なんでこの花がオシロイバナって呼ばれるか知っているか？」

「知らん」

「なら、よおく見とき」

オシロイバナの先の黒い種が取られる。お菊はその黒い種を右の掌に入れると、ギュッとその手を握つた。その掌が開かれたとき、おはくはワツと感嘆の声を上げた。お菊の手の中で割られた黒い種から、白い粉が溢れ出ている。

「この粉がな、嫁入りの時とかに使われる白粉になるんじやあ。だからオシロイバナ。ちよつと、じつとしていて」

そう言つて左指に粉をつけると、お菊はその指をおはくの顔に向けて伸ばす。「あつ」と言う間もなくおはくの顔にお菊の指が触れる。サラツとした暖かい粉の感覚が伝わった。

「なんじやあ、おはくちゃん元々色白やから、あんま変わらんわあ」

お菊の指が触れたところを、おはくは右手で触れて、その指を見た。真っ白になっている。この粉がああ白粉になるのかと思ひながら、おはくは白くなった指を見つめた。

「んじやあ、今度はおらが……」

お菊が指に粉をつけて、自分の顔につけ始める。口の周りにある程度つけ終えたとき、おはくはお菊のその顔を見てふつと吹き出した。

「お菊ちゃん、それじやあまるでイタチじやあ」

川に近づいてお菊は自分の顔を見た。全体が小麦色の顔に、口

の周りだけが白くなった自分の顔が水面に映る。それを見てお菊は素つ頓狂な声を上げた。

「本当じやあ。イタチみたいになつておるう」

その声に、おはくはたまらず笑い出した。それにつられてお菊も笑い始めた。

紅い花弁を衣につけて

黒き種から粉を出す

それをちよいと娘につければ

清き花嫁できあがる

「ええ歌じやの」

お菊の透き通るような歌声を聞きながら、おはくは呟く。

「オシロイバナの歌っていうんじやあ。おらはこの歌でオシロイバナから白粉ができるつて知つたんじやあ」

笑顔で答えると、お菊はふうつと息を吐く。

「清き花嫁かあ。おらたちもいつかなれるんかな」

「私たちならなれるはずだあ。村にはいっぱい男がおるしなあ。作治とか五郎とか……」

「あいつらのとこさ嫁入り行きたいなんて思わねえよ。それよりも村さ出て、遠くの人のところさ、嫁きてえよ。ただ……」

そこまで言つてから、お菊は顔を上げて村の南の方角を見る。

「その前に杉神さまのところさ、嫁入りすることになるかもしれないえなあ」

遠くに聳え立つ大杉を、お菊は憂いた目で見つめた。

「狐やイタチはええよなあ」

お菊がボソツと呟く。

「おらたちみたいに何かに縛られずに、自由に嫁ぐ相手を決めることができ。自由にのびのびと過ごすことができ。おらたちみたいに話すこととができるかわからんけども、何だかとても楽しそうだな。……この間の狐の花嫁さんもな、えらい幸せそうな顔をしておったなあ」

そう言つて微笑みかけるお菊に、おはくは何も返す言葉がなかった。

おはくとお菊が十七を迎えた夏の日。お菊の家の前に白羽の矢は落ちた。それでもお菊は変わらず、明るい姿をおはくや作治に見せ続けた。常に笑みを浮かべて、気丈に振る舞うお菊の姿に、おはくの胸は締め付けられた。

嫁入り前日の朝、お菊と最後に話そうとおはくがお菊の家を訪ねたときのことである。おはくは家の中から啜り泣く声を聞いた。戸の隙間から覗くと、お菊が伏せて泣いている姿がそこにあった。今までつけていた面を取つて、抱えていたもの全てを吐き出すかのような姿。瞬間、全身を引き裂かれたかのような痛みを、おは

寂しく思いながら、おはくは家に入った。

おはくの長い黒髪に、櫛を持った母の暖かい手が触れる。さらさらと糸のように細い髪が、櫛の間をすうと抜けた。

嫁入りの際の服装は、身体を清めた後に白装束を着るだけの簡素なものである。本当の嫁入りのように化粧をすることはない。だがおはくは、嫁入りの際に白粉をしてほしいと母に懇願した。村の他の女から、「おはくはそのままで十分色白なのだから、白粉することなんてない」と言われても、おはくは絶対に譲らなかつた。おはくの母は、娘の心中を察してか、嫁入りの際には白粉を用意すると約束してくれた。

「それじゃあ、白粉つけるでな」

おはくの母はそう言つて白粉の入った鉢を手に取る。その鉢の中を見たとき、おはくは「あれ？」と思わず呟いた。

「おっかあ、これ本当に白粉なのか？」

「本物の白粉じゃよ」

鉢の中の白粉をじつと見つめる。雪のように真っ白だ。オシロイバナから出たあの粉も確かに白かつたが、少し黒みも混じつていて、ここまで白くはなかつたはずだ。

「……おっかあ、白粉つてオシロイバナの種から取るんでないのか？」

不意に沸いた疑問を母にぶつける。おはくの母は微笑みながら

くは胸に感じ取つた。やり切れなさ、悲しさ、苦しさ、そうしたものの全てに耐えかねて、おはくは逃げるようにその場を去つた。おはくがお菊の泣く姿を見たのは、それが最初で最後だつた。お菊は、翌日の夜、杉神さまの下へと旅立つた。

六

機織り小屋の戸を開くと、埃を被つた機織り機とそれにかけられた織りかけの布がおはくの目に入った。

あの日、嫁入りに選ばれた日以来、おはくは機織り機に触れていない。二ヶ月間、誰にも触れられず、埃を被りながら、時が止まったかのように、機織り機も布もそこにあつた。

布にすうと手を触れる。払われた埃の下から、白と桃色の布がふわつと、姿を表した。埃を払つて、浮かび上がる白と桃色を味わいながら、この着物を完成させて着てみたかつたなあとおはくはしみじみ思つた。

おはく、と母の呼ぶ声がして、おはくは別れの言葉を言う間もなく機織り小屋を出た。

朝日に照らされた稲穂が、昨日の朝と同じくキラキラと光るのが見える。でもこれから嫁入りの準備で忙しいおはくには、それをゆつくり見る時間はもう無い。

朝の空気も、もう吸えそうにない。

返した。

「オシロイバナから出る粉にはなあ、少しだけ毒が入つておるんじや。目に入れたり口に入れたりしたら身体が痺れてしまう。だからなあ、あれは化粧に向かんのじゃあよ」

おはくが初めて聞かされる真実を、母は淡々と語る。ペタペタとして冷たい白粉をつけながら、おはくの母は言葉を続ける。

「まあオラも、子供の頃までは同じことさ考えておつたよ。だけど、嫁いだときに初めてそのことさ知つただなあ」

嫁いだときに初めて知つた。その言葉はおはくの心に突き刺さつた。

「さあ終わっただ、水桶で自分の顔さ覗いてみい」

水桶が前に出され、おはくはその中を覗く。元々色白だつた肌、白粉でさらに白くしたことで美しくなつたおはくの顔が、ゆらゆらと揺れる水面に映つた。

水面に映つた自分の顔を見つめながら、おはくはぼんやりと考える。もし、白粉がおシロイバナからできていないというのを知るのが、もつと後の、別の時であつたら……。

頭の中に浮かぶ。自分が、白粉だけでなくもつと濃い化粧をしてちゃんとしている姿が。婿の服装をした作治の隣に、ちゃんとした花嫁衣装を着た自分の姿が。おはくの花嫁衣装を見て、見かけでなく心の底から喜ぶ両親や村人の姿が。そんな、あり得たかもしれない幸せな未来の場面が、次々と頭に浮かんで、そしてそ

れらが、頭の奥の闇へと消えていく――。

目頭が、熱くなる。

「おはく？」

母に目を向ける。おはくの目には老いた母の姿が、周りの背景とともに歪んで見える。

「おっかあ……」

小さな母の身体に、おはくは抱きつく。

「おっかあ、私、死にたくねえ……」

もう、耐えられなかった。

「生きたい……。生きていたい……。生きて、もっと長く生き続けて、おっとうとおっかあど、作治と、村のみんなと、ずっと一緒にいてえ……。本当は、杉神さまの下なんか、行きたくなえ……。ずっと、ずっと、この村にいたいんじゃない……。」

感情を涙ながらに吐露する、そんなおはくの背中を、おはくの母はずっと摩り続けた。優しく、優しく、そっと撫でるように、摩り続けた。

おはくの頬を伝って流れた白い涙が、床に落ちた。

七

暗い樹海を、列になつて村人たちは進む。列の先頭には長老が灯りを持って先を照らすように、その後ろに三根村の村長三人が

ここにその御礼を申し上げます。……そして、来年もまた村をお守りいただけるようお願い申し上げます」

長老が手を合わせるのと同時に、その場にいた全員が手を合わせた。長老が一步下がる。そうして、今度はおはくが前に出る。深く息を吸って、おはくは口を開く。

「杉神さま、来年もまた村をお守りください。村を守ってくださいるのと引き換えに、私のこの命を、杉神さまに捧げます。どうぞ、村をお守りください」

悔しかった。姿の見えない神に、こんなことを言わなければならぬのが。見えない神に、自分の命を差し出さなければならぬことが。その悔しさを、今からでも吐き出したい。でも、それでも、自分の命と引き換えにしても、他の皆を守りたい。そう思いながら、おはくはグッと堪えた。

おはくは棺の前に立つ。こうして外の世界を見るのも、皆の姿を見るのも最後だ。そう思いながら辺りを見渡したとき、群衆の中から前に出てくる者がいた。作治である。

村人たちの前に出て、作治は立ち止まる。立ち止まって、おはくを見つめる。おはくもまた、作治を見つめる。作治がゆっくりおはくに向かつて歩き出し、おはくもまた一步一步作治へと向かつて歩く。そして二人は、向き合った。

「おはく……」

続いて、そしてさらにその後ろにおはくとその両親が並んで歩く。

おはくのすぐ後ろには、彼女を納める棺を担いだ男たちがいた。

おはくは後ろを振り返った。棺を担ぐ男たちのすぐ後ろに、灯りを持って俯きながら作治が歩いている。最期のときギリギリまで作治がそばにいてくれることが、不安や恐怖を抱きながら歩くおはくにとつて、何よりも救いであった。

闇の中に、大杉の太い幹がぬつと現れる。近くでみても黒々として荘厳に聳え立つその姿に、おはくは息を飲んだ。

杉神さまを祀る社は、おはくが思っていたものよりもずっと大きいものであった。不気味に閉ざされたその社に、まるで怪物でも潜んでいるような感じがして、おはくは身震いした。

最初に机が用意され、その上に供物として村で取れた米や野菜や果物が並べられる。その作物を並べている間に、棺を運んできた男たちが穴を掘り始める。おはくを埋めるための穴である。その穴を掘る方から目を逸らすように、おはくは目の前にそそり立つ黒い大杉を、じつと睨んだ。

穴を掘り終えたところで、長老が一步前に出た。杉神さまに、感謝の気持ちを伝えるのだ。

「昨年の秋より一年間、風根村、坂根村、引根村、この三根村の村々をお守りいただき、誠にありがとうございます。おかげさまでこの一年、大きな災害もなく、例年同様大豊作でこの秋を迎えられることができました。これも杉神さまのおかげでございます。

作治が懐から何かを取り出す。四輪のオシロイバナであった。

「達者でな」

作治が僅かに微笑んだ。

「作治も、達者でな」

オシロイバナを受け取り、おはくも微笑んだ。安堵した表情を浮かべて、作治は群衆の中に戻っていった。

棺の中におはくは横たわる。胸にしつかりとオシロイバナを抱いて、横たわる。棺の蓋が閉じられ、おはくの視界が暗闇に包まれた。土が棺の上に乗る重い音が、棺の中に響く。その音を聞きながら、おはくはギュッと胸のオシロイバナを握りしめた。

土の乗る音がだんだんと鈍くなり、そして聞こえなくなった。

暗闇の中で、おはくは溜めていた感情を涙に変えて外へと流した。不安、恐怖、絶望、全てをこの一人の空間で、嗚咽しながら、吐き出した。

ひとしきり泣いて、落ち着いたあと、おはくは顔に触れた。ひんやりとした白粉が、涙によって流されてしまっていた。おはくは闇の中、手探りでオシロイバナの黒い種を取る。そしてその種を割ると、そこから出た粉を自分の顔につけた。暖かい感覚が肌伝に伝わってきた。

紅い花卉を衣につけて
黒き種から粉を出す
それをちよいと娘につければ
清き花嫁できあがる

暗闇の中でおはくは唄う。先に旅立ったお菊のいる世界に辿り着けるように。この唄を聞いたお菊が自分のことを待っていてくれるように。そのことを願って、おはくはオシロイバナの歌を唄う。

黒百合

星野

新

机の上に置かれた灰皿。背が高くて足のつかない椅子。使いかけの香水。

「まるで、流れていく時の中で私だけが取り残されてしまったような。」

そんな私を見て彼女はこう思うのだろう。低い声で笑いながら「バカだねえ」と言うだろうか。それとも、優しく抱きしめてから私の首筋に鼻を当ててくるだろうか。

どっちにしたって、その感触と感覚は永遠に消えないまま、私の中に沈んでいる。

忘れられない。

ずっと残っている。

私はきつと、呪われてるに違いない。

一日常

カーテンの隙間から入った日差しがあまりにも強くて、アラームが鳴る少し前に目を覚ましてしまった。白く輝く陽の光とは裏腹に冷たい外気が身体を伝う。

疲れた。朝起きただけなのにそう感じるのは、昨日、夜遅くまで残業をしていたせいだろう。重い体を起こしてキッチンへと向かった。起床後すぐに飲むコップ一杯の水は健康にも美容にも良いとどこかの誰かさんが言っていたから、なんとなく続けている。ふうっ、と一息ついてから朝の準備を始めることにした。

「あ、佐藤さん。おはよう」

会社に着くや否や、先輩社員らしき人が声をかけてきた。顔に霧がかかっているようでよく分からない。名前はなんだったか。彼の首にかかっている社員証を横目で見ながら、設定されたような声と顔を反射的にする。

「おはようございます。大野さん」

「あれ？　なんだか眠そうだね」

「昨日、残業してて。少し寝不足なんです」

「そっか。眠気覚ましにコーヒーでもどう？　奢るよ」

「いいんですか。ありがとうございます」

私たちは、会社の前のカフェへと足を運んだ。

「それではそういうことで——」

会議が滞りなく終わり、そろそろと退出していく中で一人の女性が私の方へと向かってくる。

「久しぶり。元気だった？」

「やっぱり、りっちゃんだよね！」

「うん！　早苗、久しぶりだね」

曇りのない笑顔をしたりりっちゃんは、私の高校の頃の親友だ。まさかの再会に私たちは会議室にそぐわない高い声をあげた。

「会議中に目があった時、びっくりしちゃった」

「私も。それに、早苗がめちゃくちゃ可愛くなって、一瞬誰だかわからなかったよ。髪伸ばしたんだね。すごく似合ってる」

「ありがとう」

「せっかくな何年ぶりに再会したんだから、ご飯でも行こうよ。今日はどう？」

「いいね。行きたい」

りっちゃんが出してくれた連絡先を素早く登録する。携帯につけているストラップの趣味が高校の頃から変わっていないことに、なんだか笑ってしまった。

駅前でお待ち合わせに私は心を躍らせている。

りっちゃんとは高校三年間同じクラスだったこともあって、私の一番の親友であり理解者だった。考えることが似ていて、おま

気がつけば、会議の時間が迫っていた。予定時間の五分前になると取引先の面々が会議室へと入ってくる。女性が社会進出する機会は増えているらしいが、会議室はほとんど男の人で埋め尽くされていた。女性の姿は私ともう一人だけ。霧のかかった顔がずらっと並んでいる様は、とても気持ちが悪かった。

雑用として先方に資料を配っていると、ふと彼女と目が合う。

私は衝撃のあまり、「え」と小さな声を漏らした。久しぶりに人を見た気がした。

「やっぱり、朝のコーヒーの香りは最高だよね」

そう言つて、先輩社員であろう人がコーヒーカップを鼻のあたりに近づける。が、私を感じたのはコーヒーの香りではなく、彼から微小に香る煙草の匂いだった。

「そうですね。コーヒーの香り。落ち着きます」

私は彼の真似をするようにコーヒーカップを鼻のあたりに持つていき、それらしい顔を作る。

「そういえば、今日は初めて会議に参加する日だったよね？　新入社員が会議に出るなんて滅多にないことなんだから、気合入れてけよ」

「はい。この美味しいコーヒーのおかげで頑張れます」

貼り付けたような笑顔でそう言つて、まだ湯気のたつコーヒーを口に含んだ。舌が焼けるような感覚が少しだけ感じられた。

けに佐藤と里中で名簿上でも隣だった私達は「前世は双子だったかもね」とよく話していた。それが、まさか大人になってこうして再会できるとは。

「お待ちせー！」

遠くから聞こえた一言とともに、ちょこちょこ走ってくるりつちゃんがとても可愛いらしかった。

「ごめんね。待たせちゃって」

「ううん。たまたま私の仕事が終わったただけだから。じゃあ、行こうか」

こんなふうには友達とご飯に行くなんてことは久しぶりかもしれない。たまたまと言ったが、待ちきれなくて急いで仕事を終わらせたことはりつちゃんには内緒にしておこう。

「高校卒業してから一回も会わなかったよね？」

「会わなかったって、早苗が同窓会一回も来なかったんでしょ」

「そうだった」

「高校卒業してから毎年やってたのに、全然来ないんだもん。何してたのよ」

「あはは、ごめんごめん」

高校卒業後、その単語を聞いた瞬間、私の頭にゆらりといくつかの場面が浮遊した。けれども、りつちゃんの問いかけにカラカラと笑って、自分の感情をも誤魔化する。

「まさか、あの早苗がこんなに可愛くなるなんてね。学生時代に

そうしてたら絶対にモテたのに」

「そうかな」

「まあでも、早苗に男子が近づいたら私が阻止してたかもだけけどね」

「りつちゃんは私のこと大好きだったもんね」

「今も好きだよ」

二人で笑い合いながらお酒を飲んでいると、あつという間に時間が経っていた。お酒で自分の体温が上がっているのが分かったが、それでも負けるくらい外の寒さに冬の訪れを感じた。

「会議でも会えると思うけどさ、また一人でご飯食べに行こうよ」
「そうだね。りつちゃんとの時間早すぎて、全然話し足りなかったし」

「じゃあ、近いうちに。また連絡するね」

「うん。待ってる」

りつちゃんがバイバイと手を振ってきたので、私も振り返した。最後まで振り続けるその姿はあの頃と変わらない。

家に帰って一息つくと、なんだかいつもと違った感情が自分の中にあった。少しの高揚感と明るさ。りつちゃんの笑顔が私の闇を照らしてくれるような。本当に良い友達を持ったんだなあ、とひとり笑みを溢した。

この日はいつもよりも、少しだけ心地よく眠りについた。

二 序奏

早苗と出会ったのは高校の入学式の日。暖かい風が吹いて校の道ができる季節だった。受験の時に通ったはずの道を覚えていなくて、事前にちゃんと調べておかなかった自分を責めながら携帯の地図とにらめっこをして歩いていった。

「もう、絶対遅刻だ……」

携帯に表示された時間を見てそう呟いた瞬間、ふわっと風が吹く。地面に落ちていた桜が舞って、私が視線を上げると、そこには男の子みたいな女の子が立っていた。

「もしかして、東第一に行くの？」

「え、うん」

「早く行かないと遅れるよ」

彼女の短い髪が風に煽られて、サラサラと揺れていたことをよく覚えていたんだと思う。心臓の音が吐く息だけが自分の耳によく入ってきて、不思議な感覚だったっけ。

「何ぼーっとしてんの。こっち」

早苗は私の手を引っ張って坂道を走ってくれた。今思えば一目惚れだったんだと思う。心臓の音が吐く息だけが自分の耳によく入ってきて、不思議な感覚だったっけ。

なんとか式に間に合ったのは嬉しかったけれど、それよりもその子と同じクラスで、しかも席が隣だったことの方が私には衝撃だった。式の最中もまだ自分の心臓がうるさく感じた。

式が終わった時、すぐに話しかけてくれたよね。

「まさか、隣なんてね」

「そうだね。びっくりした」

「私、佐藤 早苗。よろしくね」

「私は里中 律」

「律ちゃんか。じゃあ、りつちゃんだね。私のことも名前で呼んで」

「早苗」

「うん」

入学して間もない頃は、授業の席も名簿順で隣同士だった。授業中にふと見る早苗の横顔は吸い込まれるくらいに美しく、気づかれないようにノートの端っこに何度も描いた。

高校生活の三年間はいつまでも続く感じがしていて、いつの間にか早苗が隣にすることが当たり前になっていたんだ。早苗はいつだって私の味方でいてくれたし、かっこよくて可愛くて、私だけの早苗だった。

でも高校を卒業してすぐ、早苗は消えた。返ってこないメッセージ。彼女のいない同窓会。まるで今までのことが夢だったのかと思うほどに、私の景色は色を失っていった。もうどうすることもできなくて、辛いだけだから、忘れることにした。あの桜の日も一緒にズル休みした日も、卒業してもずっと一緒にいようねってした約束も。

月日が流れるとともに、捨てきれない想いを抱えて、自分を騙しながら生きるということにも慣れ始めていた。

なのにどうしてなんだろう。また、あなたに出会ってしまった。

六年ぶりに初恋の人と再会するなんて、そんなのドラマみたい。信じられない。信じられないから、運命だと思うことにした。

会議中に早苗と目が合った時、私の止まっていた時間がまた動き出した。短かった早苗の髪は長くなっていて、でもサラサラの綺麗な黒髪はあの頃から変わっていない。開いたブラウスから覗いている鎖骨がどうにもそそられる。少し声のトーンが上がった気がするけど、それも大人な感じがしてすごく好き。可愛い。

駅前に一人立っている早苗を見て、早苗は私を待っていてくれるんだ、と改めて実感する。気温は低いはずなのに、溶けるくらいに幸福感が私を包む。ニヤついた顔にパシッと喝を入れて、彼女のそばへと駆け寄った。

レストランに入ると思いのほか照明が暗く、早苗の艶かしさをさらに演出していた。

「高校卒業してから一回も会わなかったよね？」

「会わなかったって、早苗が同窓会一回も来なかったんでしょ」

「そうだったけ」

「うん。待ってる」

そんな優しい声で「待ってる」なんて言わないですよ。私は魔法にかけてられたように溢れて止まらない愛を、喉の奥で必死に止めた。息が苦しい。手を振る私に伝えるように、胸のあたりで手を振る早苗。その姿をいつまでも見ていたくて、人混みに飲まれそうになりながらも手を振り続けた。

家に着いて早苗の連絡先をぼーっと眺める。次はいつ会えるんだろう。これで終わりにしたくない。本当に、人間の欲深さは時として、とても煩わしいものだと感じる。

「次いつ会える？」

気がついた時には、私の送ったメッセージが画面に映し出されていた。

「高校卒業してから毎年やってたのに、全然来ないんだもん。何してたのよ」

「あはは、ごめんごめん」

なんだろう、この違和感。早苗の笑い声は、感触のない砂を掬っているようで、どこか寂しい感じがした。

「まさか、あの早苗がこんなに可愛くなるなんてね。学生時代にそうしたら絶対にモテたのに」

「そうかな」

「まあでも、早苗に男子が近づいたら私が阻止してたかもだけだね」

かも、というか絶対にするけど。

「りっちゃんは私のこと大好きだったもんね」

「今も大好きだよ」

本当に。どうしようもないくらいに、いつまでも大好きだよ。笑わないでそう言ったら、早苗はどうするだろうか。私は知っている。彼女の目に映る私は、どこまでいっても友達でしかないことを。本当に、世界は残酷だ。

「会議でも会えると思うけどさ、また二人でご飯食べに行こう」

「そうだね。りっちゃんとの時間早すぎて、全然話し足りなかったし」

「じゃあ、近いうちに。また連絡するね」

三 決壊

次の予定は意外にも早く決まった。早苗の見たいと思っていた映画が驚くことに、私が公開前から楽しみにしていたものだったのだ。これはきつと運命の力だろう。そうに違いない。自分に言い聞かせながら、早苗の隣にいられる時間を存分に味わっている。

「貴重な休日、本当に私に使っていいの？」

「貴重な休日だからりっちゃんと過ごしたいの」

キュン。何それ。ズルい。

「そっか。じゃあ行こう！」

「映画館なんて久しぶりだなあ」

「私も。学生の頃はよく早苗と映画見に行ったよね」

「安いうちに一つでも多く見たくて、はしごしたりして」

「そうそう」

「懐かしいね」

二人で映画館に行った思い出を早苗が覚えてくれている。それだけで胸が弾んだ。ポップコーンが塩派なのも、ドリンクはメロソニーダ一択なのも変わっていない。

「なんかりっちゃんとかうして過ごしてると、あの頃に戻った気分」

早苗はニコニコしながらそう言った。その一言が、早苗にとっ

ての学生時代。私と言われてるように聞こえて、彼女の学生時代は私そのものなんじゃないか、と思ってしまった。いや、大袈裟かもしれないけど。

辺りが暗くなつて映画が始まった。素敵なカットがたくさん詰まった映画だったけど、スクリーンの明かりに照らされた早苗の横顔が一番綺麗だった。

「意外と切ないストーリーだったね」

「そうだね」

「そうだったのか。あんまり覚えてない。」

「夜ご飯どっかで食べて帰ろうか」

「うん」

え、もう帰らなくちゃいけないの。せっかく二人でいるのにまだ何も出ていない。まるで私の時間だけが何倍もの速さで進んでるみたいだ。冷たい空気が私の肌に刺さつて余計に気持ちを煽つてくる。嫌だ。まだ帰りたくない。一緒にいたい——。

早苗への想いが溢れたところで私の意識は飛んだ。

自分の体が自分のものではないかのようにだるく、重たい瞼を上げると、視界は少し濁っていた。ガンガンする頭をゆっくり上げると、知らないベッドの上にいる。そしてそこからは、見覚えのない景色が広がっている。

「あ、りっちゃん起きた？」

「ここは……？」

「私の家だよ。りっちゃん大丈夫？」

さっきまで私に乗っかってきた重荷が一気に吹き飛んだ。早苗の家つてことは、これは早苗のベッド。急に全ての感覚が研ぎ澄まされる。確かに、私の頭の下にある枕からは早苗の匂いがする。というか、この家全てから早苗の匂いがする。良い匂い。

まだ少しふらつく体を起こすと、段々と思いついてきた。あの後どうしても帰りたくなくて、やけくそな気持ちと長くお店に居座りたい一心で、お酒をハイスピードで体に流してしまつたのだ。寝ぼけて早苗のこととか言つてなかつたかな。そんな心配をしていると、早苗が隣に座つてきた。

「はい。お水」

「あ、ありがとう」

優しい。そんなことよりも早苗の顔がすぐ近くで緊張する。

「どうする？ タクシーって言つても、うちからりっちゃん家までちょっと遠いよね」

「うん」

「私の家ベッド小さいんだよね。それでも良かったら泊まるのは全然良いんだけど——」

「えー！」

自分でも驚くほどに大きな声が出た。え。今、泊まるつて。私が、早苗の家に……。

「泊めて、くれるの？」

「うん！ 私も明日は何もないし、りっちゃんが良ければだけど」

「泊まる！」

やつぱり運命だ。こんなできすぎた展開ドラマでも見たことない。きつと私達は何があつても一緒にいられる運命なんだって心の底から感じた。

「じゃあ、寝る準備しようか」

天にも昇る気分つてこういうことを言うのだろうか。私は今、早苗の服を着て、早苗と同じ匂いを纏いながら、早苗と同じベッドの上にいる。いつもより近くにいられるだけでこんなにも幸せなんだ。

「ベッド狭くてごめんね」

「全然。私がお邪魔してるんだし。むしろ、私が下で寝ようか」

「いいつて。それにりっちゃんと一緒だと安心するから」

そうやって、またそういうこと言う。その一言で私がどれだけ浮かれちゃうのか、あなたは知らないんだ。ああ、もういつそのこと全部曝け出したいな。

「りっちゃんはさ、私のことどう思つてるの？」

早苗が体をこちらに向け直し、息混じりの声を出す。

「知りたいな……」

とろけた目をした彼女がはにかんだ。

ああ、もう駄目だ。早苗が悪いんだ。これ以上我慢したら私は

呼吸ができなくなるつて思つたんだから。

私は彼女の問いかけに応えるように、唇を塞いだ。

早苗の驚きと不安を抱えて光る目が、ゆらゆらと泳いでいる。でも、もう止められない。

早苗、好きになつて、ごめんね。

「早苗、好き——」

四 自壊

りっちゃんは震えた声で私にそう言った。大きな瞳から涙がこぼれ落ちて私の頬を濡らした。

「ずっと好きだった。出会った日からずっと」

「りっちゃん……」

「卒業してから早苗と連絡が取れなくなって心配した。同窓会に一回も来なくて寂しかった。何してたの」

「……」

「なんで黙るの」

ああ、なんてりっちゃんは綺麗なんだろう。言えない。私の黒を彼女に写したくない。

「……我慢しようと思ったの。再会できただけで幸せだったし、これからも定期的に会えればそれだけで十分だって。でももう無理。私を壊したのは早苗だよ」

りっちゃんはそう言うてすぐに私に口づけをした。それはまさに壁が壊されたような、ダムが決壊したような、感情の波がどくどくと流れてくる、そんなものだった。

私はりっちゃんの肩を持って引き剥がし、その流れてくる波を止めた。自分の体が熱い。いや、りっちゃんの熱が伝わって私の中に入ってきたんだ。

「ごめん……」

私に好意を持ったのかなどを赤裸々に語ってくれた。

「早苗の家、行っても良い？」

お店を出てすぐ、りっちゃんと言う。

彼女の誘いを断る資格は私にはない。ひびの入った気持ちを抑えて、風の流れるままに、私達は一週間ぶりにあの時と同じ空間にいる。

「ねえ、早苗。私と付き合って」

「……ごめん」

彼女の目を見れない。もし目を合わせたら、あの時と同じ感情の波に押しつぶされてしまうと思ったから。

「じゃあ、なんで今日私と会ってくれたの？」

言いかけたことが喉のあたりでキュッと止まった。贖罪のつもりだなんて、たぶん、りっちゃんはそんなことを望んでいるんじゃない。でも、代わりになる言葉が見つからなかった。

「そういうところだよ」

りっちゃんがそう吹き、私を押し倒した。ぐらぐらする頭にベツドの軋む音が響く。

「早苗は優しいからなあ……。本当に……」

彼女は目を据わらせて、私をなぞるように撫でながら蜜のような声を漏らした。

「ねえ、私と会ってなかった六年間何してたの？」

顔を閉じるとあの時の光景が頭を過って呼吸が浅くなる。何か

何も言えずにいた私に、りっちゃんはそう言って背を向けた。震えた彼女の背中に私は触れてあげることができなかった。彼女のすすり泣く音が部屋に響き渡り、何が引き金になったのか。あの時の光景がフラッシュバックする。

外が明るくなりきらないうちにりっちゃんは私に何も言わず、家を出て行ってしまった。私は寝たふりをしてそれを見過ごした。今の私が彼女にかけられる言葉なんてない。

仕事の時のりっちゃんはいつも通り笑っていた。まるであの日の記憶が現実とは乖離しているかのようで、少し怖かった。私が思っているよりも彼女は強いかもしれない。

あの夜から一週間。連絡が来た。

「今日の夜、会える？」

あの時、りっちゃんがどれだけ勇気を出してくれたのか、私には分かる。

私は「会える」と返した。

駅入り口の隅っこで気まずそうに待っている私に、りっちゃんは何もなかったかのような笑顔で手を振り駆け寄る。迷うことなく私の腕に自分の腕を絡めてきて、心なしか前よりも距離が近く感じた。ご飯を食べてる最中でも仕事や昔の話をしてきて、なんで

言わなくちゃと思ったが、それは言葉にはならなかった。

「言つてよ」

彼女の握力が私の手首を締め付け、視線が合う。あの夜とは違った瞳で私を見つめるその顔は、私の唇へと近づいた。彼女が入ってくる。感情の波に飲み込まれた私はその反動で彼女を突き飛ばしていた。そして、何かが外れた。

「……好きな人が、いたの……」

絡まった糸を解いていくように、私は言葉を紡いだ。

勝手に溢れる涙。外では雨が窓に叩きつけられる音がしていた。

五 零落

あれは私がまだ大学生だった頃。りっちゃんどころか、高校の知り合いが一人も同じ大学に進学してなくて、何をどうして良いのかもわからず一人でした。高校に比べて、大学は大人の人がたくさんいるなっていう印象だった。学食は周りがうるさくて自分が一人だつてことを痛感させられている気がして嫌だつたから、人通りの少ない棟の空き教室で昼食をとっていた。でもある時から一人の人が来るようになった。

怖そうな見た目に近寄りたがたい雰囲気をしたその人。うわ、相容れなさそう。それが彼女を初めて見た時の印象だった。でも、その次の日もまたその次の日もその人がその教室に居るから、今日こそあの人がいたらもうここに来るのはやめようと決意してずっと教室を覗いた。

「何してんの？」

後ろからの低い声に思わずこけてしまった。

「ごめん、驚かせるつもりはなかったんだけど」

床に膝をついている私に彼女は手を伸ばす。

「君、いつもここでご飯食べてる子だよ。一年生？」

「はい」

真正面から見たその人は色白で綺麗な人だった。短い髪の間から出た耳にはピアスが三つ並んでいる。

「学食で食べないの？」

「友達いないんです。それに、学食の雰囲気があんまり好きじゃなくて」

「あ、それわかる」

彼女はクスツと笑ってそう言った。案外良い人かも知れない。

「私は四年の相ヶ瀬 千夏。よろしく」

「一年の佐藤 早苗です」

「隣に喫煙所があるからこの教室好きだったんだけど。迷惑だつたらもう来ない」

「別に、迷惑じゃないです」

「そう」

それが彼女との出会い。

それから私と千夏は同じ時間を共有するようになった。一緒にいるとすぐく楽で、安心できる。そして、気がつけば私たちは学校外でも一緒にいるようになっていた。

ある夜。二人でご飯を食べた後に千夏の家泊まることになった。

「お邪魔します」

「早苗、お酒飲む？」

「私、まだ未成年」

「ああ、そっか。じゃあ一人で飲んじゃおっかな」

私がいることなんかお構いなしに彼女は缶チューハイの蓋をプシュッと開けた。

「意外と綺麗にしてるんだね」

「少しは見直した？」

千夏はニヤニヤしながらそう言った。私はいつもの如く無視をする。

勝手に部屋を物色していると棚の上の小さい額縁が目に入った。そこには千夏と男の人が並んで自撮りをした写真が飾られていた。

「これ誰？」

「彼氏」

「付き合ってる人いたんだ」

「まあね。この家の家賃も一応その人が払ってくれてるし」

「え？ 同棲してるの？」

「うーん、どうなんだろう。彼、就職してて今は大阪に長期出張してるの。だから、今は同棲ではないかな」

「そうなんだ」

彼氏がいる。同棲していた。この事実がやけに胸に刺さる。

「ねえ、本当に酒飲まないの？」

「飲まない」

「ケチ」

話をしながら気付けば、彼女は二本の缶チューハイを飲み干していた。アルコールを摂取したことは顔には出ていないが、明ら

かに話し方が緩くなっている。眠そうにしている彼女にさっさと寝ることを提案した。

「眠い」

「だからもう寝るじゃん」

寝つ転がってうたうた言っている彼女に私は無表情で返し、同じベッドに入った。

「ここで彼氏さんと一緒に寝たの？」

「そりゃ、ダブルベッドだからね」

「ふーん」

「何？ 嫉妬しちゃった？」

「別に」

調子に乗った彼女を見て、聞かなきゃ良かったと後悔した。

「ねえ、彼氏さんってどんな人？」

少し間を置いて、私は彼女にそう尋ねた。そんなに興味があるわけではなかったが、なぜか聞いてしまった。

「優しいよ。でも少し面倒くさいかな」

「なんで？」

「夜、寝かせてくれないから」

私はその一言で察した。

「例えば、こんな感じで——」

と、急に彼女が私の上に乗る、ゆっくりと抱きしめた。首筋に彼女の鼻が当たる。離れたかと思うと、今度は温かい感触に唇が

包まれた。酒と煙草の鈍い匂いが嗅覚を刺激する。私はただ目をぎゅっと閉じているしかなかった。気がつく、彼女は重ねていた唇をそっと離していた。

「なんてね」

薄暗い部屋に彼女のニヤついた顔が浮かぶ。

「びっくりした？」

「びっくりした」

「やったあ。よし、じゃあ寝よう」

千夏は欠伸をしながら私の上から降りるとあつという間に寝てしまった。静まり返った部屋で私の耳がどんどん遠くなっていった。

六 没落

あの出来事から二週間が経つが、私はあの日に感じた落ちていくような昇っていくような感覚から抜け出せずにいた。それに反して千夏はというと、これが不思議なくらいに普通で、今でもいつもの教室で隣に座り、携帯をスワイプしながら菓子パンを貪り食っている。滅茶苦茶なその態度に怒りさえ覚えるほどだ。そう思っているとパンを食べ切った千夏が口を開いた。

「そういえば、早苗の誕生日っていつ？」

「五月七日」

「え、それあと二日じゃん！」

「ああ、確かに」

「言つてよ！ しかも、七日は私バイト入れちゃってるし」

「いや、祝わなくていいよ」

「そういうわけにもいかないでしょ。じゃあ明日ご飯食べに行こ！」

「まあ、良いけど」

次の日の夜に、彼女は私をいつもより少し小洒落たお店へと連れて行ってくれた。そして、その後はどういうわけだか、私が今一番行きたくない場所へと行き着いた。

「お邪魔します……」

「いやー、美味しかったねー」

「なんか高そうなお店だったけど、本当に大丈夫なの？ やっぱりお金出すよ」

「いいの」

彼女はそう言つてソファに座るとポケットから出した煙草に火をつけた。

「え、吸うの？」

「早苗も吸う？」

「吸わないよ」

「もつたいない」

私は吐き出される煙から逃げるように、ソファの対角線上に置かれた背の高い椅子へと腰掛けた。床につかない足を片っぽ投げ出して、もう片っぽを抱えて、彼女を眺めた。私は煙草が嫌いだ。でも、煙草の煙に包まれた千夏の横顔はなんだか幻想的で、そこはかとなく好きだった。

一本を余すことなく吸ってから火を消す。すると、急に立ち上がった彼女がどこからかラッピングされた小さな袋を出してきた。

「はい」

「何これ」

「ブレゼント」

「え、わざわざ買ってくれたの？」

「そりゃ誕生日だからね。あ、でもそんないものじゃないから期待しないでね」

綺麗に結ばれたリボンを解くと小さな箱が入っていた。

「香水？」

「これ、私が使ってるやつと同じ。欲しいって言つたよね？」

「うん。ありがとう」

「これで私達、同じ匂いになるね」

「千夏は煙草の匂いもするから違うよ。この香水すごく良い匂いなのに、煙草のせいで最悪」

そう言つたが、内心では香りを共有できるという事実がすごく嬉しかった。彼女をずっと感じていられる気がして。

そんな気持ちのまま寝る準備を済ませ、私達はベッドに横になった。千夏はなぜだか私に背を向けていた。

「千夏」

「何？」

「どうしたの？」

「何が」

「なんでそっち向いてんのって」

「ごめん。今はちよつと無理」

「無理って、何もしてないよ」

「そう。何もしないようにしてるからさ」

「……どういふこと？」

千夏の考えていることがなんとなくわかった。けれど、私はそう言つて彼女の言葉を待った。

「早苗。私さ、早苗のこと大切にしたいんだよね」
声が少し震えていた。

その消えてしまいそうな一言を聞いて、私は彼女を後ろから抱きしめた。この行為がどれだけの意味を持つのか私にはわからな
い。でもきつと、彼女にとっても私にとっても悪いことなのだろう。

彼女が私の方を恐る恐る向き顔を合わせると、そこには湿つた
目をした彼女がいた。

「いいよ」

私は言った。彼女を焚き付けたかった。

「バカだねえ」

低い声で少し笑いながらそう言って、千夏は私を抱きしめた。

その日、私達は一夜の夢を結んだ。

七 追憶

あの夜を何回も思い出す。早苗の一言で私は見事に彼女に落ち
てしまった。説明のつかない燃えるような衝動が、自分の全身を
駆け巡った感覚を反芻する。あの時、初めて自分の自制心が無意
味なものへと成り下がってしまったのだ。まるで、自分が自分じ
やなくなつたかのように。

大学を卒業してから一緒にいられる時間が減つてしまったこと
は私の中の最大のストレスだったけど、早苗は学校の日以外は
よく家に泊まりにきてくれていた。

「ねえ早苗。私さ、彼氏と別れたから」

「本当？」

「本当。私は晴れて早苗のものになったよ。嬉しいでしょ？」

「別に」

向こうを向いてしまつて早苗の顔は見えていないけれど、喜ん
でいるのがわかる。そんな姿がとつともなく愛おしい。

「だからさ、引越すんだ。今よりも家すごく小さくなると思っ
けど」

「だろうね」

「早苗が大学卒業したらさ、一緒に住もうよ」

「それ良いね」

「あと、今度の家は一緒に見に行こう」

「うん」

私は早苗がいつでも来れるように大学の近くのアパートを借り
ることにした。同じ鍵を持つているだけなのに何もかもを共有し
た気になる。早苗ともっと一緒にになりたい。私のことだけを見て
てほしい。そんな気持ちが高まる一方で早苗が少しずつ変わって
いた。

「今日、泊まりに来る？」

「いや、今日が行かない」

「何かあるの？」

「別に、特に何も無いけど」

早苗が家に来る頻度が減つていくに連れて、私達が一緒に過ご
す時間も減つていった。早苗に何かあったんじゃないかと心配に
なつても、次に会つた時にはいつも通りの早苗がいる。きつと、
大学の課題とかで忙しいだけなのだろう。でもなんだかちぐはぐ
で、ボタンを掛け違い続けているような日々が怖くて堪らなかつ
た。その恐怖はやがて、私の中で早苗への束縛として変わってし
まった。他の人と話さないでほしい。どこにいて何をしてるの。
全部知りたい。あなたが欲しい。悲しい。寂しい。愛おしい――。

「どうして電話返してくれなかったの」

「忙しかった」

「本当は？」

「本当だってば」

私達は喧嘩をした。他愛もない喧嘩を。私は怒っているわけ
はなかったけど、早苗がどこかに行つてしまうような気がして言
わずにはいられなかった。

「でも、なんで用事が終わった後に返してくれないの」

「忘れてた」

「嘘だ」

「千夏、最近おかしいよ」

「おかしい。そう。私はおかしい。私は――」

「私は、早苗がいないと生きていけないよ」

「私は千夏がいなくても生きていける」

早苗の声で私の言葉が掻き消された。静かな部屋で二人の声が
響く。わかっている。今の早苗の一言は勢いで言っただけ。本心じ
やない。早苗が泣きながら出て行つてしまった。ボタンッと閉ざ
される扉。残された部屋には、まだ二人の声が響いている気がした。

八 呪い

私はあの時、千夏のことでも自分のこともわからなくなっていた。なんであんなことを言ってしまったんだろう。彼女の声に反応して叫んだ出鱈目は私の胸にも刺さった。

その数日後になって、私は自分のしてしまったことの重さに気づく。

あの時、私は生まれて初めて慟哭した。自分の声帯が引きちぎれるくらいに。

部屋に浮かんだ彼女の体は青白く濁っていて、冷凍されたかのように冷たかった。

私は呪われてしまった。

彼女が好きだと言ってくれた短い髪も洋服も声も全て変えた。でも、心の中に残った彼女は私を離してはくれなかった。

出来るだけ女の子らしくして自分を偽ったら、男の人から声をかけられるようにもなったし、少しの優遇をもらえるようになった。

「ねえ、可愛いね。どこ行くの？」

「本屋さん」

九 余喘

私は自分の過ちの全てをりっちゃんに話した。そうすると、彼女は私を静かに抱きしめて優しい声で問いかける。

「苦しむ？」

「……うん」

「その傷、私で癒していいよ」

冷え切った体に小さな火が灯ったかのような暖かさがあった。この優しさに溺れてしまいたい。でも、そうしたら私はもう帰ってこれなくなってしまう。私が声を出そうと思っただ瞬間に彼女が口を開いた。

「私としてじゃなくていいから」

「え」

「代わりとしてでいい。だから、お願い」

そんなこと出来ないよ、私は言えなかった。

「……りっちゃん」

「早苗。私の好きは『それでも良い』の好きだよ」

りっちゃんの顔は寂しそうな、微笑んでいるような、どこか歪んだ顔だった。

彼女の手と私の手が重なる。

どうして、そんなにも私のことを好きでいてくれるの……。彼女は大嫌いな私に、抱えきれないくらいの大好きをくれる。もし

「まじ？ 俺と遊びに行かない？」

「……いいですよ」

出来るだけ多くの人に心を開いたフリをする。空っぽの関係。そうしていれば自分の中身も軽くいられる気がした。

カラオケルームのカラフルな壁で目が回る。私に強引にキスをしてきた顔のわからない彼からはタバコの匂いがした。でもそれは私が求めていたものではなくて、気がついていたら私はその場から逃げ出していた。

どうすることも出来ない。逃げても逃げても、彼女から離れることはできない。

炎のように熱く照りつける太陽に、いつそのこと溶かしてくれと何度も念じる。

蝉の声と自分の吐く息が奇怪に混ざり合って虫唾が走った。

も私が受け入れたら、危うくて今にも消えてしまいそうな彼女を救うことになるのかもしれない。でも、それは都合の良い言い訳だ。それに、私はもう、誰かを失いたくはない。

「りっちゃんごめん。私——」

「わかった……。もういい」

私の最後の言葉を聞かずにりっちゃんはそう言い放った。

「じゃあ、これで最後にするから。ごめんね。許して」

りっちゃんがそっと私の顔に手を添え、唇を重ねる。確かめるように、噛みしめるように。空っぽのはずの心に小さな雫が落ちる音がして、彼女の頬を流れる涙が私へと染みわたる。

「早苗は強いね」

りっちゃんはそう言い残していなくなった。

彼女は最後まで綺麗だった。

十 雲隠

早苗の家の香りとは打って変わって、湿った匂いが鼻についた。きつと、さつきまで雨が降っていたのだろう。ふらふらする頭を左右に揺らせば、冷たい風が耳へと流れてくる。

早苗はあの時、私に「好きになれない」って言うとしたんだと思った。だから私は自分から身を引くことにした。彼女の声でそんなことを言われたら、もう何もかもが崩れてしまうと思ったから。せめて大切な思い出だけは、汚さずに残しておきたかったから。

そんなの、敵うわけない。早苗の過去を聞いてそう思った。早苗の中にはその人しかいなくて、私が入る余地なんてない。代わりになんてなれないことも知っていた。

でも、それでも早苗のそばにいたかった。どうしても、彼女が欲しかった。あれ、私いつからこんなに欲しくなってしまうんだろう。

「……本当に、好きだったなあ」

小さな独り言は白くなって、暗い空へと吸い込まれていった。

十一 走馬灯

静まり返った部屋で一人。さつきまでの温もりはもうなくなってしまうと、ただ冷たい空気が一段と部屋を重くしていた。

私は強くなんかない。忘れることができなくて、りっちゃんを代わりにしようとしていた。最低だ。彼女がくれる「好き」はとても温かくて、明るくて、深くて、私とは釣り合うはずもないくらいに美しかった。

こんな時まで、消えない彼女の面影が私を抱きしめてくれる気がする。

私は引き出しにしまったままの煙草の箱とライター、そして使いかけの香水を取り出した。慣れない手つきで煙草に火をつけ、机の上の塵ひとつない灰皿にそっと置く。足のつかない椅子に座って、暗い部屋に朦朧とつく煙草の火を見ながら、私は香水を自分に振りかけた。

どこか物足りない香りが私を儂く包んだ。

十二 黒百合

「ねえ早苗、これなんだと思う？」

「黒い百合？」

「ピンポン」

「珍しいね、花買ってくるなんて。ていなかんでそんなのにしたの？ もっと綺麗な色のにすれば良かったのに」

「これが一番綺麗だったの」

「あっそ」

「早苗はさ、私のために不幸になれる？」

「ん？」

「不幸になっても私と一緒にいられる？」

「どういう意味？」

「知ってる？ 結婚と出産は女の幸せのうちの二つらしいよ」

「……」

「それ以外にも私と一緒にいるから出来ないことだって山ほどあるんだよ」

「私が千夏と一緒にいてそういうことができないから不幸になるって」

「うん」

「本気でそう思ってたの？」

「……」

「私は女だからとか男だからとかじゃなくて、千夏だから好きになったんだよ。千夏といることで私が不幸になるんだったら、私の幸せ一生分、千夏が背負ってよ」

「早苗って本当にバカだねえ」

「バカじゃない」

「良かった」

「何が？」

「呪ってでも早苗の幸せ一生分、私がもらうつもりでいたから」

あの時、彼女がくれた百合のように黒くて、冷たい世界に私は取り残されているのかもしれない。

私は幸せになれない。

忘れられない。

ずっと残っている。

彼女という幸せな呪いが一生消えない。

スーヴェニア

阿佐比

りい子

どうしても、忘れたくない記憶があった。妹の中学の入学式。妹は、美しい少女に育った。白い肌に、長くて艶のある黒髪、すらっと伸びた背が制服にとても似合っている。

何かを忘れていような気がした。

昔から人と話すのが苦手で、小学校ではうまくいっていなかった。話そうとするとどうしても喉の奥がキュツと狭くなり、出てくる声は震えてしまう。言葉は常に重たいものだった。そんな私に対し、父は甘えだと言う。私は、母の前以外ではすらすら言葉が出ないようになってしまった。

四年生の新学期が始まる目前、父と母は私を北海道の祖父母の家に送り込んだ。新学期に学校に行けなかったら、新しいクラスでも浮いてしまう。母に必死に訴えかけたけれど、その説得も虚しく、一ヶ月も学校に行けなかった。田舎の綺麗な空気でその暗い性格も治るだろうと父は言い、落ち込む私にさらに追い討ちをかけた。

その頃、母は妊娠していた。私が預けられたのは、母が切迫早産で入院することになったからだったが、当時の私はそれがどんと寂しくなったときのために残しておくのだ。

飛行機の中では、たくさんのお姉さんが入れ違いで話しかけてくれた。一言も返事はできなかつたけれど、思っていたほどの不安は感じなかつた。

——なんだ、私一人でも余裕じゃん。

心の中で呟いた。

普段祖父母の家に家族で行くとき、使うのはいつも新幹線だった。飛行機は、新幹線と比にならないくらいあつという間に私を目的地へと連れて行ってくれた。こんなに近かつたのか、と緊張が少し和らいだ。

祖父母は優しくかつた。そばの畑で野菜を育て、それを売って生活していたが、私は野菜があまり好きではなくて夕飯は少し苦痛だった。一番嫌いな野菜は人参だったが、ちょうど雪解けの今の時期に収穫した人参がお味噌汁に入っていて、でも残したいと伝えることもできず息を止めて飲み込んでいた。祖父母は私が無理して飲み込んでいることに気がついていて、無理に食べなくてもいいよ、と言ってくれた。しかし、私は首を横に振ることしかできない。祖父母は困った顔で私を見つめていた。

私は到着して一晩も寝たないうちにホームシックになった。飛行機の中で沸いた小さな自信も、到着して数秒で消えていった。こんなことなら赤ちゃんなんていらぬ、と本気で願った。

なもののなかも知らず、出産のための入院だと勝手に解釈した。そして、私が家に帰る頃にはもう赤ちゃんは産まれているのだと思いついていた。小さい赤ちゃんは、きつと一人では何もできない。私が色々教えてあげよう、と密かに楽しみにしていた。

出発の日、すでに入院していた母の病室に父と二人で行った。必ず迎えにきてねと念を押したが、母は不安がる私を笑い飛ばした。そしてカバンの中から飴玉を一つ取り出し、私に手渡した。「どうしても寂しくなつたときに舂めなさい。心がハッピーになる魔法の飴玉よ」

リュックの一番手に取りやすいところにしまった。キラキラと光を反射させる赤い玉は、確かにハッピーになれそうな感じがした。

母といい子していると約束し、病院を後にした。私が心を開いて話せる相手は母しかいない。学校も心配だったが、それ以上に母と離れることが不安だった。言葉を胸のうちに溜め込むことは、実際すごく疲れるのだ。

父は空港まで送ってくれたが、一緒に飛行機には乗ってくれなかつた。空港のお姉さんが席まで連れて行ってくれたけれど、急にひとりぼっちになつたような気がして飴玉を眺めた。飛行機が飛び上がるときに飴をなめておくど耳が詰まりづらくなる、とお姉さんは教えてくれたが、うまく話せない私は下を向いて俯いてしまった。それにまだ飴を舂めてしまうわけにはいかない。もつ

毎晩、布団に潜って泣いた。母に会えない寂しさと、学校を休んでいる不安と、優しい祖父母にもうまく言葉が伝えられず困らせている申し訳なきで、私の心はいっぱいだった。家のものとは違ふ布団の匂いで眠れず、天井の木目の数を数えて過ごした。泣くと次の日目が腫れるので、祖父母も私が泣いたことに気づいていて、それにもまた申し訳ない気持ちでいっぱいになってしまう。

朝は、ほぼ寝られていない上に泣いたせいで腫れぼつたくなつた目を隠すように下を向いて過ごした。スーツケースにお気に入りの本数冊を入れてきていたため、大体は本を読んでいた。

ある日、バーネットの『秘密の花園』を読んだ。持ってきたものではなく昔の母の部屋の本棚にあつた本だ。少し難しかったけれど、私はすぐに夢中になつた。メアリのなんでもわがままに言える性格が羨ましいと思つた。本の裏のあらすじには性格の悪い少女だと書かれていたが、メアリは性格が悪いのではなくて、人の優しさを知らないだけだ。人との関わりを知つた後のメアリは、きつと心優しい少女になるだろう。読み終わっていないけれど、そう思った。

まだ序盤だったが、私はメアリと駒鳥の出会いのシーンが好きになつた。メアリは駒鳥と出会って初めて自分の寂しさを自覚する。駒鳥はメアリの最初の友達だった。こんなふうに寂しさを共有できる友達がきたら、と私は妄想する。今の私はメアリと同じくらい孤独だと思つた。違うのは、私には友達が作れないこと。

学校で同級生に話しかけられて嬉しくても、どうしても応えられないのだ。

昼は、うとうとし始める時間だった。真昼から布団に行くのは少し気が引けたため、大体は本を読みながらこたつで眠った。四月とはいえど、北海道にはまだ雪が残っていて寒い。こたつは寝落ちするのびつたりだった。

夢を見るときもあった。あるときの夢は、不安に拍車をかけるものだった。

父と母は生まれたばかりの赤ちゃんを優しく見つめている。私が静かに近づくと、それに気がついた父の目が急に冷たくなり、母はすぐにそっぽを向いてしまった。赤ちゃんはその様子を見て楽しそうに笑っている。とうとう家の中でも居場所がなくなってしまった。私は泣かぬまいと歯を食いしばって耐えている。

目を覚ましたとき、額にはびっしり汗をかいていた。祖母が起きた私に気づいて水とタオルを持ってきてくれた。

「うなざれていたけど、大丈夫だった？」

祖母は優しくかった。

私は額いてコップの水を一口だけ飲んだ。

もう夜になっていた。その日の夕飯のお味噌汁に、人参は入っていないかった。

夢の光景はいつまで経っても頭の中から離れない。楽しみにしていたはずの赤ちゃんも、悪魔の子のように思えて仕方がなかつた。

HARU」と刺繍してくれた。金色の刺繍糸が赤色に映えて綺麗だった。

ちようど日の出の時間で、太陽の光で白い地面がキラキラ光っている。久しぶりに私はワクワクして、ぎゅつと硬く閉ざしていた唇が緩まり自然と口角が上がった。

庭に小さな雪だるまを二つ作った。近くの小枝と小さい木の実で顔もつけた。ちゃんと笑顔になるように曲がった小枝を見つけてるのは少し大変だったけれど、出来上がった雪だるまは二人で内緒話をして笑い合っているように見えた。

ふと、昔母に連れられて行った秘密基地の存在を思い出した。母が子供の頃に友達と作った秘密基地で、母が大人になってからもまだその場所は残っていた。真ん中には小さなテーブルと二つの椅子があつて、周りは花で囲まれている。大体はどこにでも咲くような小さな花ばかりだったが、端に一本の薔薇の木があつて、春の季節には美しく咲くらしい。母はその場所を秘密の花園と呼んでいた。そういえば、この前読んだ本と同じ名前だ。まだ本は読み終わっていない。途端に続きが読みたくなってきた。

私が小学校一年生くらいなときに連れて行ってもらったきり、ずっとその場所の存在は忘れていた。拙い記憶を頼りに、公園までの道のりを思い出す。

家の裏の道を少し歩いたところにその公園はあつた。でも記憶にあつた抜け道は見当たらなかった。

た。

その晩、いつものように眠れなかった私は、一つしかない魔法の飴をボリボリ噛んで食べた。ゆっくり舐めなかったのが悪かったのか、心は全くハッピーにならなかった。私の好きな苺味だったけれど、ちっとも美味しくなかった。

ここでの生活は、なかなか時間が過ぎなかった。うるさい街の音も、公園から聞こえてくる子供とその母親たちの笑い声も、たまにやってくる移動販売のあの音楽も、何も無い。時間が過ぎることをずっと願っているのに、退屈な時間は永遠のようにこの場に停滞する。朝が来ると早く夜になれと願い、夜が来れば朝を願った。食卓に並ぶのは基本和食ばかりで、唐揚げやハンバーグは並ばない。たまに母と食べる昼間のジャンクフードや、母が食器を洗うガチャガチャという音や、自分の部屋の枕が恋しかった。鮮明に思い出せば思い出すほど、戻る日が遠く感じ、さらにはもう帰れないのではないかとまた不安に襲われる。そして、私は退屈に慣れていた。

ここにきて二週間と少しが経ったとき、久しぶりに雪が降った日があつた。いつものように眠れずに朝を迎えて、ふと窓の外を見たら雪が舞っていたのだ。まだ早朝で祖父も祖母も寝ていたが、どうしても外に行きたくなって静かに縁側から抜け出した。母に買ってもらった赤いマフラーを巻く。ここにくる前に、母が「

「こちら辺のはずなんだけどな……」

一人でいるときは普通に言葉が出た。久しぶりに声を出す感覚が気持ちよくて、独り言を繰り返した。

「もう抜け道、なくなっちゃったのかな」

木の茂みに小さな隙間があるのを見つけた。小さくしゃがめば、通れそうなくらいだ。

「入口、ここ……？ だいぶ狭くなってる」

引っかかりそうなマフラーは外して近くのベンチの上に置いておき、体を小さくして通り抜けた。

「秘密基地、まだあつた……！」

まだ雪が残るこの季節、花は咲いていない。しかし、確かにここが母の秘密の花園だった。古びたテーブルも椅子もまだちゃんと残っていた。あとでまた遊びに来て、ここで『秘密の花園』の続きを読もう。

「ハルちゃん」

遠くから私を呼ぶ声が聞こえた気がした。太陽もだいぶ高く上がってきていた。

家の方へ走って帰ると、祖母は家の前でキョロキョロしていた。私の赤く上気した頬と緊張が解けて緩まった表情を見た祖母は、ほっとしたように笑顔になった。

「今朝は雪が降っているのね。外はどうだった？」

祖母が優しく聞いた。私は首を縦に振った。言葉は出なかった

けれど、少しの不安が飛んでいった。

秘密の花園は、お気に入りの場所になった。

バーネットの『秘密の花園』はこの場所で読み切った。搾りたての牛乳と葡萄パンを食べるメアリたちの姿が、現実のように目に浮かぶ。熱い紅茶を入れた水筒、朝ご飯の残りのサンドイッチやおにぎりを持って、毎日通うようになった。牛乳の代わりに紅茶を飲み、葡萄パンの代わりにサンドイッチを食べる。私はすっかり物語の主人公になった気分だった。

「私、寂しいの」

私は、駒鳥と出会ったときのメアリのセリフをそつと呟いた。メアリが本の向こう側で返事をしてくれているように感じた。

誰の視線も感じず、ひとりで自由に声を出したり、本を呼んだりできるこの場所は私にとって貴重だった。ある日は画用紙とペンを持ってきて絵を描いたり、またある日には歌を歌ったりした。

ここに通うようになってからは、昼夜逆転しかけていた生活のリズムが健康的に戻った。もともと昼間から夕方にかけて寝ていたのが、その時間は花園にいるようになったのだ。夜にはすっかり疲れていて、泣く間もなく眠りに落ちていく。

彼女とも、この秘密の花園で出会った。私がいつものように公園に来たとき、彼女は先にいた。花園へ続く抜け道のある公園でひとり佇んでいたのだ。赤いマフラーを手に持って。

「あ、私のマフラー」

思わず声が出た。

最初にこの公園に来たときにマフラーを外したことをすっかり忘れていた。あの日忘れて帰ったことも、彼女が手に持っているマフラーを見るまで全く覚えていなかった。

「あなたのだったんだね。そのベンチの下に落ちてたよ。雪で少し濡れちゃってるから、帰ったら一度洗った方がいいかも」

彼女は私に近づいてマフラーを手渡した。確かに、マフラーは冷たく濡れていた。ありがとう、と一言だけでも言いたかったが、声は出なかった。

彼女は綺麗な声で、淀みなくすらすら話した。

白い肌に、長くて艶のある黒髪、すらつと伸びた背が美しくかった。ジーンズにトレーナーとダウンを着ていた。どこにでもいそうな格好をしていたし、言葉遣いだって普通の子供となら変わりはなかったが、それでもどこかのお嬢様のように、私は緊張で固まってしまった。私たちはしばらく見つめ合った。

沈黙を破ったのは、やはり彼女だった。

「そのリュック、何が入ってるの」

私はその日、いつもより豪華なお茶会をしようと思って、紅茶を入れるための綺麗なティーカップと、缶に入れたクッキーをリュックサックに入れて持ってきていた。

——紅茶とクッキーが入ってるの。一緒に食べる？

そう言いたかったけれど、声を出してみようとすらしなかった。どうせ出ない。今日はお茶会も諦めようと後ろを向いて、家の方へ歩き出した。

「待って、もう帰るの？ 今来たところなのに？」

後ろから話しかけられて、私は振り向いてしまった。彼女は言葉が続けた。

「もしかして、紅茶持つてる？ 良い匂いがする」

「うん」

また、思わず声が出た。

「紅茶とクッキーで、お茶会するつもりだったの」

今度はすらすらと言葉が出た。母以外となめらかに話せたのは本当に久しぶりのことだった。

「こんなテーブルもないところでお茶会？ おうちの方が良さそう」

「秘密の花園があるの。そこならテーブルも椅子もあるよ」

私は、自分が普通に話せていることに驚きながらまた答えた。

「秘密の花園ってバーネットの本のこと？ 私も連れて行って」

私は彼女を花園に案内した。

「洋服気をつけて。汚れちゃわないように」

思ったことはなんでも声になって伝えられた。

「ただのジーンズとダウンだよ。気にしないで」

と彼女は笑った。

ただのジーンズとダウンですら、彼女が着ると、高貴なワンピースよりも輝いて見えたのだ。

心臓が、低く響くように鳴っていた。いつもならここで胸のあたりがぎゅゅと驚掴みにされているような痛みを感じるが、今日は感じなかった。

花園は私の安息地だった。誰にも知られられなかったはずなのに、今さつき初めて会った彼女に場所を教えてしまった。でも不思議と嫌な気持ちはなくて、期待と興奮に静かに胸を躍らせていた。

「ここ、ハルが見つけたの？」

彼女はそう聞いた。

「え、私の名前……」

「ああ、マフラーに書いてあったから。もしかして違った？」

「ううん、違くないよ。——この場所はね、もともと私のママの秘密基地だったの。ママが秘密の花園って呼んでたから、私もそう呼んでる」

普段言葉が出てこないのが不思議なくらいだった。すらすらと言葉が紡がれて、もつと話したいと言うように言葉が溢れてきた。「せっかくだから、紅茶とクッキー一緒に食べよう。お名前はなんというの？ 私のことはさつきみたいにハルって呼んで」

「いいの？ ありがたく頂かね。名前は好きに呼んでよ」

ティーカップは一つしか持ってきていなかったから、彼女に譲

った。繊細な薔薇の絵が掘られているティーカップだ。彼女が紅茶を飲む姿は、やはりどこかのお嬢様のように綺麗だった。

「メアリって呼んでもいい？」

私はふと聞いた。

「メアリ？ 『秘密の花園』の？」

彼女は嬉しそうな顔をした。

「そう。この前読んだの。メアリは憧れ。私にはないものを持つてる」

「それってもしかして、私にも憧れてくれたってこと？」

彼女は少し照れたように笑った。

「憧れだよ。なんだかどこかのお嬢様のように見えるよ」

普段なら気恥ずかしく感じてしまうような言葉も、彼女には簡単に伝えられた。

そして彼女は、その時から私の友達になった。

「明日も、来る？」

夕方になりかけた頃、私は少し緊張気味に聞いた。

彼女はうなずいて、私の顔を見て楽しそうにニコツと笑った。

「そんなに緊張しないで、私の顔を見て楽しそうにニコツと笑ったよ」

彼女はそう言ったけれど、私からしたらすごく特別だった。言いたいことを言葉にできる相手は、今まで母以外にいなかったのだ。

それから私たちは、毎日のように会った。新しい花の種を植え

でも可愛い子たちが集まるグループで私は遠くから見ていただけだったし、クラスのドッジボールに誘われることはほとんどなかった。歌いながら帰っていた仲良しグループの女の子たちの数メートル後ろを、私は一人で歩いていた。

ひとつ嘘をつくたび、少しずつ言葉が重くなった。いつか、彼女の前でも言葉が出なくなるのが怖くなった。

でも、一度つき始めた嘘を止める方法を、私は知らなかった。毎日、新しい嘘を塗り重ねていく。きっと彼女の目に私は、明るくて友達のたくさんいるごくありふれた少女として映っただろう。

「メアリが学校にいてくれれば、きつともっと楽しくなる」

小さく呟いた。「もつと」は余分だったかもしれないが、これは本心だった。

相変わらず、祖父の前で言葉が出ることはなかった。人参のお味噌汁が出ることもしばしばあったが、最初と同じように息を止めて飲み込んだ。祖父母は変わらず困った顔をしていたけれど、その頃の私にはもう気にならなかった。夜泣くことも無くなっていった。

嘘をつくたび、感情もひとつひとつ消えていたのかもしれない。

「ハルちゃん、お父さんから電話よ」

たまに父から電話が来て祖母に受話器を渡されたが、私はそれを受け取った後、一言も発せずただ父の言葉を聞き続けることが

たり、薔薇の木の根っこに絡まる雑草を全て抜いたりした。綺麗な花を咲かせますようにと祈って、二人で笑い合った。

「学校って楽しい？」

あるとき彼女がそう聞いてきた。まだ微かに残る雪の上に落書きをしながら。

もう世間では学校が始まっている時期だった。通学中の子供たちもたまに目にする。彼女は私より年上で中学生くらいに見えたが、学校には行っていないようだった。

私、学校嫌いな、と言いかけたとき、彼女はこう言った。

「学校の話、聞かせて」

その瞬間、どうしてだか、学校で上手くいかない自分を彼女に知られたくないと思った。順風満帆に学校生活を送る自分を想像した。

「新学期始まってから学校に行けてないから今は分からないけど、春休み前は教室で流行りの曲踊ってたよ。友達にすごくダンスの上手な子がいて、いつも教えてくれてたんだ」

「天気がいい日はね、クラスみんなでドッジボールしたり鬼ごっこしたりすることもあったよ」

「音楽の授業で歌った曲がね、すごく変な歌詞なの。みんなでその曲歌いながら家に帰るのが楽しかったな」

嘘はすらすら出てきた。教室で踊っていた女の子たちはクラス

常になっていた。電話中は縁側に出て、庭の雪だるまを眺めていた。もう半分くらい溶けていて、形は歪になっていた。

父は、「このままのお前ではお姉ちゃんになれない」とよく言った。

もともと、私は赤ちゃんなんて望んでいなかった。母が「楽しみね」と言ったから、私も楽しみなような気がしていただけなのだ。父の言葉でそう気が付いた。ここに来てから、楽しみなどは少しも思わなくなっていた。

赤ちゃんなんていらぬ。誰のせいでもこんなところで寂しい思いをしなければいけなくなつたと思っただけだ。私が毎晩泣いていたことは微塵も知らないくせに、私が当然赤ちゃんを待ち望んでいると父は思い込んでいる。

ずっと母のお腹の中で守られている赤ちゃんが羨ましく、そして憎くも思った。

赤ちゃんなんていらぬ、いなくなれ、と必死に祈った。母を返して欲しかった。

父は、祖父の前で私が言葉を発しているのかどうか気がなつていたらしい。父は、私が電話で声が出ないのをいいことに、いつも一方的に色々言って満足していた。

「赤ん坊だつて頑張っているのに、お前が頑張らなくてどうする。一言くらい話したらどうだ」

「話さないのは嘘を言っているのと同じだ。母さんの前なら話せ

るじゃないか」

嘘だと言われたとき、彼女の前で吐いた嘘が頭の中を駆けた。私は話せても話せなくても嘘つきだと知った。

父から長い電話があった次の日、とうとう彼女の前でも言葉が出なくなつた。喉がキツく締めまり、息をするのも苦しくらいだ。でも、彼女は何も言わなかつた。私が話せないことが当たり前かのように、何も聞いてこなかつた。独り言のようなことをたまに呟いたが、私の反応は求めなかつた。

持ってきたココアを持ってきたティーカップに注いで、彼女に手渡した。

「ありがとう」

彼女はいつも通り、ニコツと笑って受け取つたが、その後は何も言わなかつた。

——ごめんね、嘔吐してたの。私、声が出ないの。

伝えられたら、どんなに楽かと思つた。でも声すら出なくなつてしまつた今となつては、もう何も伝えられない。最初から嘘なんてつかなければよかつた。

「そろそろ、雪が溶けてきたね。前に埋めた種たち、芽が出ればいいけど」

その日私に話しかけてきたのは、この一言だけだつた。私は、案の定応えられなかつた。

昼過ぎ。朝に少しでも会えらなかつた。明日、必ず本当のことを言おうと心に決めた。

久しぶりに一睡もできないまま、朝を迎えた。祖母が握つた塩おにぎりを口に頬張る。水筒にココアを入れて、クッキーを持って、急いで公園に向かつた。

「メアリ、来てる？」

久しぶりに声が出た。ただ、彼女はまだ来ていなかった。

花園の中の雪だけ、なぜだか綺麗さっぱり溶けていて、代わりに小さな青い花が地面を覆っていた。

「赤ちゃんに持って行ってあげよう」

彼女が来るまで、私は花を摘んで待つことにした。赤ちゃんに對する、小さな罪滅ぼしのつもりだつた。この世に生まれてきた小さな子を、「いらない」と拒絶していたことが、途端に申し訳なく思つたのだ。

途中喉が渴いて、持ってきたココアを一人で飲んだ。私は紅茶が好きだつたけれど、彼女は紅茶よりもココアが好きだつた。最近はずら、ココアしか持ってきていない。

甘つたるいものが、喉を通り過ぎていく。喉の渴きは全くもつて解消されなかつた。一人で三杯飲んで、水筒の中身は無くなつてしまつた。

クッキーも食べようと思つたが、最後に彼女と食べようと思い、手をつけないでいた。

それから何日か経つたが、彼女の前でも言葉は一言も出ないようになつてしまつた。彼女は時折私に話しかけたが、返事をしなくても特に何も気にしていないようだつた。

「赤ちゃん、楽しみだね。元気に生まれてきてほしいね」

あるとき、彼女はそう言つた。その途端私は涙が止まらなくなつた。泣き止まない私に彼女は驚いていたが、何も言わず、静かに背中を撫でてくれた。

泣きながら思つた。なぜ彼女は赤ちゃん存在を知っているのだろうか。赤ちゃんを望まない自分を知られたくなくて、このこだけは意識的に話さないようにしていたのに。ただ、そんな疑問も涙とともに流れて、いつの間にか忘れてしまつた。

彼女は時折、そんなに泣かないで、と独り言のように呟いていた。

夜ご飯を食べていたとき、父からまた電話があつた。いつもの文句の電話ではなかつた。

「母さんが退院するよ。明日の飛行機を取つたから帰つてきなさい」

私が祖父母の家に泊まり始めてちょうど一ヶ月だつた。

明日の朝、彼女に会うのは最後になる。そのことに、電話を切つた後になつてふと気がついた。

彼女とは毎日、朝九時に公園で会つていた。飛行機の間はお

なのに、いくら待つても、彼女は来なかつた。

私が話せなくなつたせいだと思つた。きつと私の嘘がバレて、もう会いたくないと思つたに違いない。謝ることもできなかつた。

祖父母が空港まで送ってくれるらしい。家を出発する時間が迫つてきていて、私は彼女に会えないまま秘密の花園を後にした。

祖父母の家についても、なぜか声は出るようになったままだつた。

「おじいちゃん、おばあちゃん、泊めてくれてありがとう」

空港で別れる直前、私は言つた。

話している私を見てすごく驚いていた。

「またいつでも来るといいよ」

一ヶ月間困らせ続けてしまつたのに、二人は最後まで優しくかつた。

きつと、言葉が出なかつたのも私の勘違いで、父の言う「嘘つき」も事実だつたのだと思つた。

飛行機を降りたら、父と母が迎えにきてくれていた。一ヶ月ぶりに会つた母は少し痩せているように見えた。

なぜか、赤ちゃんを抱いていなかった。

「赤ちゃんどこ？」

私は尋ねた。

「……赤ちゃん、生まれる前に死んじゃつたんだ」

一度も行かなかった。

母が、咳くように教えてくれた。ハッとした。私が、赤ちゃんなんていらないと願ってしまったからだ。

母は目に涙を浮かべていた。私はそれを見て、大きな声で泣いた。涙は止まらなかった。私のせいで、小さな命が途切れてしまったのだ。

「寂しい思いさせたな」

父は車に乗る直前、私の頭に手を置いてそういった。家に着くまで、この父の一言以外、誰も何も発しなかった。

荷解きの最中、リュックサックに入れてきたあの青い花を母に渡した。

「この花、綺麗だったから摘んできたの」

「あら、ワスレナグサ。今はもう自生してないはずなのに不思議ね」

もう萎れていて、全然綺麗ではなかった。母はその花を小さな瓶に入れた。水を吸っても、ちっとも上を向いてくれなかった。

一ヶ月遅れで新学期を迎えたが、今まで全くと言って良いほど出なかった言葉が、簡単に出るようになっていた。大人になつてから知ったが、選択性緘黙症という病名があったらしい。

その後、母はもう一度妊娠、出産した。私はそのとき中学生になつていて、友達もできていたし、順風満帆な日々を送っていた。

家族四人で何度か祖父母の家に訪れたが、結局、あの場所には

妹の中学の入学式。私はもうとつくに成人していて家を出ている。朝、会社へ行く電車の中で、母から写真が送られてきた。妹は、美しい少女に育った。白い肌に、長くて艶のある黒髪、すらっと伸びた背が制服にとても似合っている。

妹の背後に、小さな青い花がたくさん咲いている。

何かを忘れている、そんな気がした。私は、写真の奥に咲く花をじつと見つめた。

ワスレナグサ。花言葉は、「私を忘れないで」である。

ツ
ツ
ジ

渡
邊

凜

わたしは今年から大学に通っている。通っているといっても、今はすべての授業がオンラインで受けることができるのでほとんど家にいる。大学での友達は何と言っても過言ではない。

だから今年の夏休みは本当に暇だった。誰かと遊ぼうと思ってスマホを開いたけど、高校の頃の友達を誘う気も地元友達を誘う気も起きなかった。

わたしは家でアニメを見まくっていた。流行りのアニメからマイナーのやつまで。大学生の夏休みがこんなに暇だとは思ってなかった。

そうしたら、コロナ禍なのにもかかわらず親が

「ぐーたらしすぎ。少しは外に出たらどうなの」

とあるので、イラッとして衝動的にバイトを詰め込んでしまった。そのときのわたしは、すっかりバイト先にあの子がいることを忘れてしまってたんだ。

「おはようございます」

彼女はマスク越しからでも分かるくらい満面の笑みで、勢い良く休憩室のドアを開けた。わたしは声の方向に振り向く。

「美奈ちゃん、おはよう」

彼女の名前は高橋美奈。最近のわたしの悩みの種だ。

「はるかさんだー！ お久しぶりですね。今朝からずっと一緒

ですよ。うれし〜」

彼女は大きな目をよりいっそう輝かせてそう言った。

美奈ちゃんは一個下の高校三年生。今どきの子って感じがして、男子受けはもちろんのこと、女のわたしから見てもついつい目で追っかけてしまうほどに可愛い。明るくていい子だし、わたしにすぐなついてくれている。

ただ一つだけ気になることがある。美奈ちゃんがわたしの真似をしてくるのだ。真似といっても些細なことで、わたしの化粧ポーチやリップなどのちよつとしたものだ。最初の方は

「見てください、はるかさん！ はるかさんとお揃いのポーチ。可愛いから買っちゃいました！」

って感じてわたしもそんなに気になってなかったし、むしろ嬉しかった。だけど、どんどんエスカレートしてきている気がする。わたしはだいぶ冷たく接しているが、美奈ちゃんはまったくひるまない。

わたしは結構淡白人間だ。

今まで出会ってきた人とは大体うまくやれていたし、喧嘩だつてもう十年以上していない。仲良くなれそうな子のジャッジは外さないし、すぐに友達と呼べる関係値になれる。その子たちと一緒にいる時間は楽しいし、その子たちのことを好きだと思ふ。

でもほとんどの子とすぐに疎遠になってしまう。小学校ででき

よく見ているせいなのだろうか。そう考えるとまた怖くなってくる。

「いいじゃないですか。応援しますよ。あ、もう時間ですね、早く行きましょ！」

そう言って美奈ちゃんはわたしの手を引っ張って休憩室を出た。その手を見てわたしはまたぎよつとする。美奈ちゃんの爪は私と同じ色をしていた。

それからほぼ毎日美奈ちゃんと顔を合わせてきた。美奈ちゃんは今会うたびに何かしらわたしに近づいている気がした。わたしが持っている靴、鞆、服。まったく嬉しくないが、お揃いの物たちが増えていく。段々と怖さが増してきた。この前なんて田村くん

に

「双子コーデみたいで可愛いね」

なんて言われてしまった。本人に言ってもどうせ流されてしまうだけだ。他の子に相談しよう。

でも他の子ってだれだろう。バイト先では常に美奈ちゃんと一緒にいることになっているし、大学はオンラインだからちゃんと話せる人はいない。解決しなくてもいいから誰かに毒を吐きたいなあと、ため息をつく。

「ため息ついてどうしたの」

の！」

正直だいたいイラつくくるが、ついつい可愛いなと思ってしまう。

「そういえば今日……、田村くんもシフト入ってますね。よかったじゃないですか！」

シフト表を確認した美奈ちゃんがこつちを向いてニヤニヤしながら言ってきた。

「うるさいなあ。そんなんじゃないって」

誰にも言っていないのに何故だろう。美奈ちゃんだけにはわたしが田村くんが気になっていることがバレている。わたしを

柔らかそうな前髪と長いまつげが視界に入る。わたしは思わず体をのけぞって後ろの柵に頭をぶつけてしまった。

「うう……」

痛さと恥ずかしさで変な声が出てしまった。

「ごめんごめん、大丈夫？」

困り顔で笑うこの爽やかイケメンが田村颯馬くん。

ザ・塩顔イケメンってかんじの顔面で、しかも優しい。だからわたし以外にだって田村くんを気になる人がいても全然おかしくないのだけど、田村くんはそこまで人気がない。わたしだけが田村くんをイケメンと思っているらしい。

「何か悩み事でもあるの？」

「えっと……」

わたしは一瞬話そうかと思っただが、あんまり弱音を吐いたり、マイナスな印象を与えたくないと思っただけ口を閉じる。

「なんだよ。なんかあるんでしょ。あ、帰りにご飯食べてかない？」

「え、行く！」

「はるかの方が一時間あがるの遅いよね。外で待ってる」

「あ、うん！」

そう言っただけ、わたしの返事をまともに聞かずに、田村くんはにこにこの笑顔で去っていった。

え。田村くんにご飯……。急にバイトへのやる気が芽生える。

ど何も出てこない。

「そう？ 俺、イタリアン系がいいかも。ここから近くておいしいところあるんだけど、そこでもいい？」

なんだか何かのドラマでありそうな言葉を言っただけ、田村くんはちよつと高そうなお店に連れて行ってくれた。

席に着いていざ向き合うと、想像していた以上に緊張してきた。さつきまであんなに楽しみにしていたのに、自分の食べ方が変じやないかとか、フォークとお皿がぶつかる音がうるさくないだろうとかいろいろ考えるてしまう。ちゃんと話を聞いていたいのに相槌もうまくできなくて、話が全然入ってこない。ひと通り話題が尽きると

「で、今日はなんのことで悩んだの？」

そう言っただけ、田村くんはわたしの話を聞く体制に入ってくれた。「……実は、美奈ちゃんのこととちよつと悩んでいることがあった……」

それから、わたしは今まで自分が抱え込んでいたことを出来るだけ美奈ちゃんが悪者にならないような言い方を選びながら話した。それでもやっぱり抑えていた気持ちが溢れてしまって、つい早口になってしまう。

言い終わってから田村君の顔を見るといつもの優しい顔で聞いてくれていた。

「そんなに思いつめていたんだね」

わたしはその後、ひとつのミスもしなかった。そして、その間美奈ちゃんはずっとニヤニヤしながらわたしを肘でつついてきていた。いつもより早く早く仕事を終わらせ、休憩室に駆け込む。そして急いで着替えてメイクを直す。ちゃんとメイク道具を持ってきておいて本当に良かった。わたしが休憩室を出ようとすると、美奈ちゃんが入ってきた。

「はるかさん、田村くんにご飯行くんですかあ？」

わたしはあからさまに嫌そうな顔をする。

「わたしもはるかさんにご飯行きたいなあ〜」

「ごめん、急いだから。どいて」

いつものダル絡みが始まりそうだったのでだいたい冷たくあしらってしまった。

「も〜。気を付けてくださいね！」

なにが「気を付けてくださいね！」だ。わたしが一番気を付けるべきはあなただと思っただけ。

表に出ると田村くんが待っていた。

「お疲れ様。何か食べたいものある？」

そう言っただけ、わたしの顔を覗き込む。心臓に悪いのでやめて欲しい。わたしはまた少しのけぞって

「別になんでもいいよ」

とついデートで絶対に言っただけではないのである。言葉を発してしまった。やっちゃったと思っただけか必死に言い直そうとするけ

いつも通り少し困った顔をして微笑む田村くんを見て、わたしは少しほっとした。

「そんなことで。なんだか美奈ちゃんのほうが可哀想に思えてくるよ」

「えっ」

びつくりして口が空いてしまった。

「はるかはそのうちあるよね。自分を悲劇のヒロインにして同情を求めようとする」

「え……わたしそんなことしてきたっけ……」

いつも優しいことばかり言う田村くんがそんなことを言うのは意外だった。

「そんなつもりはないのかもしれないけど、何かミスしたり、心配ごとがあると自分のことで精一杯になって、周りが見えてないよね」

確かにそうかもしれない……。だけどわたしは自分の事じゃなくて、美奈ちゃんのことについて話しているのだけ。

「美奈ちゃんだっただけはかっこいいから真似しちゃうだけで悪気はないんだから。はるかさんは心が狭いなあ」

わたしが黙っていると、田村くんは気持ち良さそうにどんどん説教のような話を続けた。あることないこと、少し話を盛っているように聞こえる。そんな話をわたしが食べ終わっても続けた。

わたしは田村くんにあまりよく思われていなかったことになかなかのショックを受ける。楽しみにしていた田村くんのご飯が、美奈ちゃんの話を理解してもらおうこともできずにただただ説教されるという全く楽しくない会になってしまった。

わたしは田村くんの話の区切りがいいところで、「そろそろ帰ろうか」と提案しようとしたら相槌を打ちながら待ち構えていた。

「やっぱりさ、はるかとはひとりだと不安だろうから、これからも俺のアドバースが必要だと思うんだよね」

急にまたいつもの優しい顔に戻り、田村くんはそう言った。

「だから俺と付き合ったらいいんじゃないかな。これからもまた今日みたいに話を聞いてあげるよ。ね？」

そう言って田村くんは私の手に自分の手を重ねた。その瞬間わたしは全身に鳥肌がたった。

気持ち悪い。もうその感情しか沸いてこなかった。

「田村くんがいなくても大丈夫だよ！ 私帰るね」

わたしは張り付けたような笑顔でそう言い捨て早歩きで店を出た。つい何時間か前まであんなにカッコよく見えていたのに、今はもう嫌悪感でいっぱいだ。

少し歩いて落ち着いてから田村くんのことを思い出すと、今度は自分への嫌悪感も出てきた。わたしは田村くんは

「それは美奈ちゃんがよくないね。嫌な思いをしたね」

って慰めてほしかったんだなと気づく。今まで田村くんが自分

況なのに誰も助けてくれない。

頭の中には「どうしよう」という言葉しか出てこない。

「あれ！ 田村くんとはるかさんじゃないですか？」

聞き覚えのあるかわいい声があった。この張りつめた雰囲気の方無視して話しかけてきたのは美奈ちゃんだった。

「え、なんで美奈ちゃんがいるの？」

田村くんの声は動揺して裏返っていた。

「ほんと偶然ですね！」

美奈ちゃんはいつも通りの、むしろいつも以上に明るい声でそう言った。

「何してるんですか？」

「ああ。ご飯食べに行ってたただだよ」

田村くんはすぐいつもの優しい雰囲気に戻ってそう答えた。

「え。いいですね！ あ、もしかして帰りですか？ はるかさん京王線でしたよね。一緒に帰りましょうよ。ね！」

「あ、うん」

美奈ちゃんに話しかけられてわたしはやっと声が出た。

「田村くんは違いますよね。それじゃあまたバイトで！ お疲れ様です」

そう言って美奈ちゃんは私の手を引いてずんずん歩いていく。あんなに嫌だったわたしと同じ色の爪をした手が、今はとても頼

もしく感じる。

にとって都合のいい人だったから、優しい人だったから好きだと思っていたのだ。自分がどうされたい、どう思われたいという気持ちばかりで、相手に理想を押しつけていたんだ。もう今までの人間関係がすべてそんな感じだったような気がしてくる。わたしに落ち度はあった。だけどやっぱり今日の田村くんは異常なだった気がする。いろいろ考えながらとぼとぼと歩いていると、誰かに腕をつかまれ大きく後ろに引つ張られた。

「おい！」

田村くんだった。

「何勝手に帰ってんだよ。金も払わず、俺を置いていきやがって！」

田村くんはここが路上だということにも関わらず、びっくりするほど大きな声で怒鳴り散らかした。次々に罵倒の言葉を投げかけられる。

わたしは田村くんが言っている言葉が全く頭に入らず、放心状態になっていた。

「おい！ 聞いてんのかよ！」

田村くんは腕をつかまれて初めてハツとした。

ヤバイ。殺されるのではないだろうかと思ってしまった。

「まだ話は終わってねえんだよ」

そう言ってわたしの腕を思いっ切り引っ張る。体が硬直してうまく動けない。声が出ない。周りから見ても明らかにおかしい状態。

「え！ ちょっとどうしたんですか！」

振り向いてわたしの顔を見た美奈ちゃんはぎょつとした顔をした。

「え」

何回瞬きしても美奈ちゃんの顔がぼやける。わたしは自分が泣いていることに気づく。

「もー。泣かないでくださいよ」

美奈ちゃんは悲しそうに、困ったような顔をして、ハンカチでわたしの涙をぬぐってくれた。

「だから言ったじゃないですか。気をつけてくださいねって」

美奈ちゃんは膨れ顔をしながら言った。

「あーゆうタイプの男は本当に危ないんですから。……でも無事で良かったです」

美奈ちゃんがあまりにも優しい顔をするので、わたしは余計に涙が止まらなかった。

そのときは美奈ちゃんが私たちの場所をどうして知っていたのかなんて、全く気にならなかった。彼女が偶然居合わせたわけではないということは何となくわかっていただけ、そんなことはどうでもいい。

わたしは子供みたいにわんわん泣いた。

「はるかさん。いつまで泣いてるんですか」

美奈ちゃんはそう言いながらわたしが泣き止むのを待っていてくれた。なかなか泣き止まないのでお水まで買いに行ってくれた。「はい。お水飲んで落ち着いてください」
お水を飲んでわたしは少し落ち着いた。たくさん泣いて火照った身体が外の空気に冷やされて気持ちいい。美奈ちゃんは黙って私のそばにいてくれた。

「はるかさん、目を閉じて少し口を開けてください」

美奈ちゃんはわたしの目をじっと見て、ちよつと照れくさそうにそう言った。

いつもなら絶対従わないけど、わたしは美奈ちゃんに言われた通りにする。

「いっていうまで目、開けちゃダメですよ」

美奈ちゃんは楽しそうにそう言った。わたしは少しドキドキしていた。

次の瞬間、口に何か異物が入ってきた。わたしは少しむせて目を開く。懐かしい味がした。

美奈ちゃんがわたしの口にくわえさせたのはツツジの花だった。

「じゃーん！ この花懐かしくないですか？ お口直しです！」
目の前にいる美奈ちゃんもツツジをくわえている。

正直キスでもされるのではないかと思っていたので、美奈ちゃんの無邪気な考えを聞いて口元が緩む。

「このお花、なんて名前なんでしょうね」

「ツツジだよ」

「へー。お水買ってくる途中に咲いていたのでとってきちゃいました！」

「ありがとう。わたし、小さい頃めちゃくちゃこの花吸ってたよ。甘いよね」

今までもすっかり忘れていたけど、幼い頃を思い出してなんだか温かい気持ちになる。

「知ってますよ。だからとってきたんだもん」

嬉しそうに笑っている。そんな話したことないのになぜ知っているのかとツツコミを入れたい。ふと、ふしぎな気持ちになった。いつもの美奈ちゃんに対する不信感ではなく、もつと、温かいものだ。

美奈ちゃんは私への執着が異常だ。なぜそんなに私にこだわるのか全く分からない。この気持ちもなんだか危ない気がするし、本意だ。けどわたしは、嬉しそうに笑う彼女を見て、たまらなく愛しいと思ってしまうた。

あれから一ヶ月が経った。田村くんは今日でバイトを辞める。

「田村がいなくなるなんて寂しいじゃーん」

「いつでも復帰していいからな」

バイト仲間たちは田村くんを囲んで盛り上がっている。今日は

田村くんの送別会だ。

「てかなんでやめんだっけ」

「新しくバイト始めるんだっけ？」

つい田村くんと目が合ってしまったがすぐにそらされる。わたしはゆっくりと目線を手元からあげに戻す。あれから田村くんとはほとんど話していない。多分わたしが一方的に避けられているのだと思う。

「せーんばーい。わたし酔っちゃいました」

そう言って彼女はわたしの肩に寄りかかってきた。

「ごめん、先あがるね！」

わたしは酔ったふりをする彼女を連れて店を出た。

「田村くんじゃあね」

自分でもびっくりしたが、笑顔でそう言うくらいには余裕があった。

「もー。あんな奴なんか話しかけなくていいんですよ」

帰り道、彼女は頬を膨らませながらそう言った。あまりにも頬が膨らむのでつい笑ってしまう。わたしが田村くんに対して何の感情も抱かなくなるくらいに私の中の彼女の存在は大きかった。あんなに私を悩ませていたのに今では心のよりどころになっっている。

「美奈ちゃん！ もう一軒行かない？」

わたしははっちゃけて言った。自分でも心が軽いのが分かる。

美奈ちゃんはやったー！ と言ってその場で飛び跳ねる。

そんな彼女がわたしは好きだ。

未来を想って

枢木

よこわ

あなたがこの手紙を見る頃にはきつと、私はこの世にはいないと思う。だからせめてこの花と一緒に私の想いがあなたに届きますように。

もう私が長くないということを知ったのは去年の夏だった。とても暑い日でセミがうるさいほどに鳴いていた。

生まれた時からずっと心臓に疾患があった。移植という選択肢もあつたがでさず、高校三年の夏、ついに私の命はあと三ヶ月、持つても半年だと宣告された。薄々そんな感じはしていた。自分の体だ。自分が一番わかっている。最近、少し動いただけでも息苦しい。どんどん動けなくなつて弱つてきているというのはいわづかっていた。だから今更、医者から余命宣告されても、悲しいとかそんなことはなかつた。ただ、また夏を迎えることができないことが少し寂しい気がした。

その心臓のせいで学校にほとんど行くことができなかつた。もちろん友達なんていない。ごく稀に学校に行くことがあつたけど、みんな私を異常者かのように扱つた。

「『病氣』だから学校に行かなくていいなんて、ずるい」

「やめなよ。『病氣』だからつて可哀想だよ」

「早く『病氣』治して遊ぼう」

『病氣』『病氣』『病氣』……。『病氣』という言葉が行き交う。

そう話す声が嫌でも耳に入った。私をまるで足枷のように、邪魔者扱いしてきた。私だつてなりたくて病氣になつてゐるわけではないと強く思ったが、引き取つてもらつた手前そんなことは言えなかつた。

その代わりに『病氣』じゃなかつた姉は可愛がられていた。大層も行きたいところに行かせてもらつていたし、何でも買ひ与えてもらつていた。私は自分にたくさんのお金をかけてもらつてゐることを知つていた。だから何もわがままを言うことはできなかつた。

姉が少し羨ましかつた。私が普通なら、姉と同じようになつたのかと思うと腹立たしかつた。しかも両親とは違つて、親戚は学校に行くことも強要してきた。

「学校に行きたくない」と言う決まつて、

「なに贅沢なこと言つてゐるの。ただでさえ高い治療費を払つてやつてゐるのに、学校にも行きたくないなんて、ありえない」

なんて言われた。仮に姉が行きたくないと言つたら、多分、休ませてくれるのだろう。中学生にして、理不尽という言葉の意味を身をもつて知つた。

また『病氣』『病氣』『病氣』。と言われる生活が始まつた。中学になると行事も盛んに行われるから余計大変だ。行事なんて心

まるで私が『病氣』そのものかのように。人間として扱われていないような気がして苦しかつた。

そこから私は、学校に行けそうな時があつても、行かなくなつた。というより、行けなくなつてしまつた。

幸いにも私の両親は優しく、学校に行きたくないと言つても、無理に行かせるようなことはしなかつた。学校に行かなくても買つてきた教材で勉強はできるし、両親もいる。姉もいる。それだけで十分だつた。

そんな日常が壊れたのは、私が中学生の時。両親が事故で死んだ。即死だつた。咄嗟に両親が姉を庇つたおかげか、不幸中の幸いにも姉だけは一命を取り留めた。

悲しいなんて言葉だけでは表せないほどに、両親ともう会えないということの辛さを知つた。私と姉の二人だけになつてしまつた。姉はまだ高校生だ。しかも私は病に犯されている。治療費もかかる。当然、姉一人で私の治療費、生活費を稼いでいけるわけはなく、私たちは親戚に引き取られることになつた。が、私の治療費や病氣のことでかなり揉めた。

「健康な子供だつたら」

「病氣じゃなかつたら」

「そもそも事故なんか起こすから」

「病氣の子供を引き取るなんて」

臓に疾患のある私は、絶対に出られない。普段の授業でさえまともに受けられないのに。

「『病氣』だから体育やらなくてもいいのずるいよね」

「実は『病氣』じゃなくて、ずる休みしてるだけじゃないの？」

「『病氣』でも少しくらい運動できるでしょ」

周りの女子は聴こえるような声で私にそう言う。それでも私は気にしなかつた。どうせあんまり学校には行けないのだから、勝手に私の悪口で盛り上がつていればいいと思つていた。

実際、中学生生活のほとんどを病院で過ごした。三年間あつたが、半分も行けなかつた。病院は退屈だ。私は特に症状が重いらしく、個室で入院をしていた。

ドラマで見るとような六人部屋で、友達ができて、楽しく話すということが憧れた時期もあつて、様子を見に行つたが、カーテンは閉めっぱなしで、誰一人として会話をしてゐなかつた。もしかしたら友達ができるかもしれないと思つてゐたが、理想と現実の違いに嫌気がさした。学校に行つたつてつまらないし、病院にいたつてつまらない。だけど、あの親戚から逃げられる分には学校や病院は悪くないと思つた。

病院では何をして過ごしているのかというと、だいたい絵を描いてゐる。幼い頃から入院をしてゐた私は、白い紙や、カレンダ

ーの裏によく絵を描いていた。初めは遊びでやっていたが、毎日書いているうちにみるみる上達していった。中学の頃には、暇で書いた水彩画が、小さな賞をとった。確かその街の中学生のコンクールだったと思う。金賞だった。そのためか、病院のロビーにでっかく飾られた。見る人みんながすごいと口にしていくのをみて、私は誇らしかった。

親戚は優しくなかったが、姉は私を気遣ってくれていた。毎日見舞いにかけては、私の好きなプリンを買って持ってきてくれた。親戚には姉からも「優しくしてあげて」と言っていてくれたみたいだが、そればかりは聞いてくれなかったらしい。

姉はよくこう言っていた。

「私の大事な妹をいじめる奴なんて、いくら私によくしてくれてたとしても嫌い」

姉だけは私の味方でいてくれるような気がした。でも、恵まれている人のセリフだなとも思ってしまった。

そして私は、あまり学校に行けないまま高校生になった。姉は大学生になって、一人暮らしを始めていた。

「毎日はお見舞い行けないけど、行ける日は必ず行く」

姉はどんどん弱っていく私を元気づけてくれた。けれど、どこか気を遣わせているような気がした。

「そんなにお見舞いに来てくれなくても、大丈夫だから。大学が

高いお金を払ってまで移植手術を受けさせてくれるとは思えない。こういう時に亡くなった両親が悲しくなる。きっと私に生きていてほしいと思っただろう。

「ただどの親戚だ。私が死のうが、どうなるうが、関係ないと思っただけだ。結局、あの人たちは私の移植手術を許してはくれなかった。」

「そんなに高い金を払ってまで、お前に生きていてほしいとは思えない。なら、治療費を払っている方がマシだ」

その言葉が私の頭に響く。生きることさえ許されていないと実感した。もう生きていたくないと思っただけで、本当は生きたかったのかもしれない。本当は手術を受けていいよと言われたかったのかもしれない。一瞬にして目の前に見える未来が、真っ黒に染まってしまった。

自殺も考えた。何度も生きていたくないと思った。だけれども、私が今まで生きていられたのは、姉のおかげだ。ドナーが見つかったけど、手術を受けさせてもらえないという連絡をした時、姉はすぐさま帰ってきて、見たこともないくらい泣きながら叫んでいた。

「なんで！　なんで！　なんで……どうして受けさせてくれないの」
その姿を見て、私は少し救われた。

んぼってね」

本心だった。けれど、少し気を遣ったように思ったのだろう。

「寂しいからそんなこと言わないで」

姉は少し泣きそうになりながら言っていた。

永遠の別れじゃないのになんでそんなに泣きそうなのか、とその時は思った。けれど今ならわかる。姉は知っていたのだ。私が大人になれないことを。そして、高校卒業まで生きられないことを。

私の味方でいてくれた姉も私のそばを離れてしまって、ついに一人になった。けれど、そんなに私の生活は変わらなくて、入院生活は続いた。

高校生ともなるとおしゃれして放課後に友達と遊んだり、とにかく笑ったりする。何もなくても楽しい。まさに『青春』を謳歌する時期だが、私は出来なかった。でも羨ましいとさえも思わない。どうでもよかった。親戚だの、病気だの色んないざこざがあつて、少し生きるということに疲れてしまっていた。心臓が少し重くなっている気がした。

ちょうど姉が一人暮らしを始めたタイミングとほぼ同時に、ドナーが見つかった。前々から探していたが、なかなか見つからなかったから幸運だったのかもしれない。けれども私は素直に喜べなかった。そして移植をするにはお金がかかる。あの親戚が

それ以来、姉は親戚の元へ帰ることはなかった。でも、私のところへは頻繁に来てくれていた。それが嬉しかった。

そのこともあり、私は自ら死を選ぶことなく生きてきた。

病気がだんだん悪化してきて、高校へは一日も登校することができなくなった。歩くだけで息切れがして、苦しくて、ついには歩くことすらできなくなった。

車椅子での生活が始まった。

そして今日、余命宣告を受けた。高校三年生の夏。八月の下旬で、夏の終わりが近づいている。

半ば諦めかけていた人生だ。散々だった。楽しかったことなんて一度もない。

余命宣告されたって、そんなに変わらない。なんて考えながら、車椅子に乗って、なんとなく外に出ている。

気温三十度を超える猛暑日だったためか、外には人があまりいない。私はもうこの暑さを経験することはないのかもしれないと思うと、外に出るのも苦じゃなかった。むしろどこか心地よかった。

車椅子を漕いでいると、同じ入院服を着た男の人がベンチに座って本を読んでいるのを見つけた。

そのベンチは日陰になっていて、私のいる日向よりは少し涼しくはなっているものの、やはり暑かった。

気づくと私は彼に話しかけていた。普段は絶対声をかけないのに。彼の持つ雰囲気は懐かしい気がしたからだろうか？ それとも夏の暑さにやられただけかもしれない。自分でもらしくないなと思つてそのことを少し後悔した。考えていても埒が明かないから全て余命宣告のせいにした。彼は眼鏡をかけていて、少し背が高く、細くて、私の同じ歳くらいの人だった。

「どうして外で本を読んでいるの？ 中の方が涼しいのに」

私は彼にそう話しかけた。

「あなたこそ、こんな暑い日に日向で何をやっているんですか？」

彼はキレ気味にだが、ちゃんと答えてくれた。聞き方がまずかったと少し思いながらも、返事をしてくれたことが嬉しかった。

「別に何をやっているわけでもないですけど、暇なので少し話しませんか」

「いいですよ」

彼は本を閉じてベンチに置いた。本のタイトルは『ライ麦畑でつかまえて』だった。

「へえ、それって面白いの？」

私は本を指しながら聞いた。

「僕は外の世界を知らないから、自由に生きている主人公が羨ましいから読んでいるだけですよ」

彼は少し悲しそうな顔をしながら言っていた。私と同じだ、と思った。

幼い頃から入院してきた私は、絵という方法で外の世界を知っていた。それが彼にとつては本という存在なのだろう。少し彼に親近感が湧いた。

「私、生まれたときからずっと心臓に疾患があつて、学校にもろくに行けなくて、みんな私を『病氣』そのものみたいに思っているんで私普通じゃないんだろうってすごく思った」

「僕も。生まれた時から心臓病で、ずっと病院の中にいた。君の気持ち、わかるよ」

生まれて初めて私は私の苦しみを理解してくれる人に出会えた。嬉しかった。だけど彼は家族には恵まれていた。

「ドナーが見つかつて、それで今度移植手術を受けて、普通に生活ができるようになる。君はどうなの？」

「私は、そう長くは生きられなくて、あと三ヶ月だつて。長くてもあと半年しか生きられないってさつき言われちゃった」

そう言えは、彼は少し気まずそうな顔をしていた。

「私家族は姉しかいないし、ここが潮時なんだよ。嘆いたつてしようがない」

「本当に大丈夫だから。元気になったつて、ひどい親戚しかいないし、強いていうなら姉が悲しむかもしれないけど、私は大丈夫だから」

やはり無理があつたが、それでも少しでも彼を感じる申し訳な

さというものが減ってくればいいなと思つた。

少し重たい空気がなつてしまつたので、別の話をしようと思つたが、そろそろ病室に戻らないといけない時間になつてしまつた。

「明日もここで待ち合わせしよう。今日と同じ時間に」

私はそう言つて、病室に戻つた。余命宣告を受けて、最悪の一日のはずなのに、人生で一番楽しいと思える日になつた。

次の日もまた彼と会つて話をした。自分のこと。病氣のこと。苦労したこと。色々話して彼と分かり合えた気がした。特に学校の話では「体育できないことが一番辛かった」と言うと彼も共感してくれた。『病氣』だからできないとか『病氣』だからつていう理由で特別扱いされるのも辛かつたという話もしてすぐに意気投合した。それから毎日彼と会つて話すが日課になつた。

彼と話していくうちに気づいたことがあつた。それはちょっと昔の記憶。小学生くらいだつただろうか。私が入院している時に出会つた男の子。色白で、クリツとした目が特徴的で、すぐ頬が赤くなる女の子みたいな子。

初めて見た時は、人形みたいだと思つた。その彼は見た目とは打つて変わつて、活発で遊びまわつているような男の子だつた。いつも私の手を引つ張つてくれて、あまり外には出られなかつたけれど病院の中を一緒に探検してくれた。本当はそんなこと許さ

れないけど、大人の目を盗んで病院の中を歩き回つていた。

多分、彼を忘れていた理由。それは、私の前で彼がいきなり倒れたからだと思う。彼は見たこともないような青白い顔で苦しんでいた。私は、怖くて声を出すことさえもできなかった。その場にたちすくんでただただ大人の人が気づいて助けてくれるのを待っていた。幸いにも倒れた音で気づいた大人がいて、すぐに彼は運ばれていった。

彼も私と同じ心臓病だつた。

あの後彼がどうなつたのかはわからない。私は彼の病室を知らなかつたし、その後すぐに退院することが決まつていた。

あの日、彼が倒れた日から私は彼に会えていない。生きているかどうかもわからない。私は助けてあげられなかつた。彼が死んでしまつていたらどうしよう。頭の中で考えていくうちに私はいつの間にかその記憶に蓋をしてしまつていた。

どうして話しかけた時に懐かしいと感じたのか。どうして思い出したのか。わからない。色の白い肌、眼鏡をかけているからわかりにくいけれど、あのクリツとした目と長いまつ毛が彼に似ていたからだろうか。

彼に聞きたくても、私には聞く勇気がなかつた。もし違つていて、あの男の子が死んでしまつていたらと思うと怖くて何も聞けなかつた。

それでも彼と過ごす時間はあつという間で、すぐに終わつてし

まっていた。

私が余命宣告を受けてから三ヶ月後。彼の移植手術は少し先のよう、私が生きているうちに行われるかはわからなかった。

私の命がどんどん短くなっていく。一緒に日々を過ごしていくうちに生きたいと思うようになっていた。わがままかもしれない。だけれども、少しでも長く生きたかった。

季節は冬だった。

私は自分が死んでしまっても、彼に私と過ごした日々のことを少しでも覚えていて欲しくて、彼宛に手紙を書くことにした。怖くて聞けなかったことを彼に伝えるためにも。ある花を添えて私はこう綴った。

あなたがこの手紙を見る頃にはきつと、私はこの世にはいないと思う。

だからせめてこの花と一緒に私の想いがあなたに届きますように。

あなたと初めて会ったのは私が余命宣告を受けた日でした。

もしかしたら初めてじゃないかもしれないんだけどね。

もう生きているのが辛くて、どうにでもなれと思っていただけに、あなたを見つけてました。

私は普段人と話さないし、話そうともしないけれど、あなた

を見つけた時はなぜか話したくて、たまらない気持ちになったの。

あなたと話してみても、共感することが多くて、私のことを一番理解していてくれる気がして、とても嬉しかった。

あなたと話した時間はかけがえのない大切な時間です。

こんな私と話してくれてありがとう。

少しは仲良くなれたと思うのだけど、君はどうかかな？

勝手に仲良くなったって思っておくね。

私、あなたと出会ってなかったら、あの時話しかけなかったら、今こんなに笑えてない。

本当は君ともう少し一緒にいたかったけれど、生きることはできないみたいです。

移植手術が成功して、病院じゃない外の世界に出て、私の分まで生きてね。

じゃあ、天国からいつまでも見守っているから。

悪いことしようものならこっちにきた時にとっちめてやるから覚悟しておきな！

じゃあ、元気でね。

PS 生のお花だと枯れちゃうから、しおりにして入れておいた。

ウチワノキっていう花だよ。ちゃんと使ってるね！

のかもしれない。辛かったけれど、支えてくれる人がいた。その事実だけで、私は幸せだ。

届くかわからないけれど、私を支えてくれた全ての人の未来が、明るいものであることを祈って。

書き切って、いよいよ私の人生に終わりが近づいていると思うと、悲しくて仕方がなかった。書いているうちに泣きそうになっただけ必死に堪えた。最後に付け加えようとした言葉があったけれど、それが彼の重荷になってはいけないと思って、あえて何も書かなかった。

姉にも遺書を書いた。

今まで、たくさん迷惑かけて、でも守ってくれてそれが嬉しかった。

いつまでも私の味方でいてくれて、本当にありがとう。

あと、親戚の人たちと仲直りしてね。私を除け者扱いしていたけど、ちゃんとお金払ってくれて、治療受けられたから。

私はそれだけで十分だから。

幸せに生きてね。

天国から見守っています。

それから少しして、私は息を引き取った。姉はひどく落ち込んでいたし、彼も悲しんでいた。

私は、短い人生だったけど、なんだかんだ言って、幸せだった

彼女が息を引き取ってから、少し経った頃、僕は引き出しに手紙が二通入っているのを見つけた。一通は彼女のお姉さん宛に、もう一通は僕宛だった。三ヶ月くらいしか一緒にいられなかったのに、僕にも書いてくれていることが嬉しかった。

僕は何もしてあげられなかった。できていたとしても彼女と話してあげることくらいしか。もつと何かできたのかもしれないと不甲斐ない気持ちになった。声をあげて泣きじやくっていた。彼女は死ぬ直前まで、僕の幸せを願っていた。なんて優しく、なんて強い人なのだろう。余計に彼女の優しさが身に染みて辛くなってしまう。彼女と過ごした三ヶ月間は短くも、濃いものだった。彼女ともっと一緒にいられたら、彼女のそばにいられたら。なんて願っても叶わないけれど、叶わなくとも、願わずにはいられなかった。

懐かしい記憶があった。ぼんやりとしか覚えていないけれど。夏だった。病室はクーラーが効いているから涼しくて、外は猛暑だった。その夏に出会った女の子。顔は覚えていないし、その後僕は倒れてしまってその前後の記憶がほとんどないけれど、多分そういうことだったんだと思う。

そして彼女がいなくなってからちょうど一ヶ月。僕は移植手術

を受ける。彼女が見守っていてくれるから成功することしか頭にない。

彼女の分まで、生きて、僕が年老いて彼女のところへ行くまで、待っていて欲しい。未来への希望とそして、未来への想いを胸に。

それから僕の手術は成功して、健康な人間として生きることができるようになった。誰かの心臓をもらって僕はここに生きている。

これから僕は就職して働く。これから先、どんな女性に会おうとも、僕は彼女を忘れることはできないと思う。人に言ったらたった三ヶ月でとバカにされるかもしれない。それでもたった三ヶ月でもかけがえない時間だった。

「ちよっと。早すぎない？」

「でももう五十だよ」

「いくらなんでも早すぎだって」

「しょうがないじゃないか。交通事故にあっただから」

「しょうがないって言ったってね。私十八年しか生きてないから、百年くらい生きてもらわないと元が取れないじゃない」

「でも君に会えたよ」

「ちよっと老けた顔で言わないでよ」

「ひどいな。じゃあ君と会った時に戻ればいいの？」

「戻せるものなら戻して欲しいよ。神様かなんかに頼んでみれば？」

「それじゃ君と会った時と同じくらいに戻してもらおう」

「できたらいいけどね」

「したらまた君と話をしよう」

「そうだね。どんな話をしようか」

「今度は生まれ変わりの話をしようか」

「それはいいね」

「私、君が来るのを待っていたから」

「もし別々に生まれ変わったとしても、必ず見つけ出すよ」

「私こそ。絶対に見つけ出すから」

今度また会う時は、普通に、元気に。

君の未来を想って。

桃色椿

CROUS

変わらない日々。

当たり前障りなく、過ぎていく。

大きな問題もなく、傍から見れば間違いなく幸せだろう。

「おい優希、早く帰ろうぜ」

「なあ、俺達って幸せだよな」

「なんだよ気持ち悪い」

「そんな辛辣なことある？」

言葉のナイフが教室で待つていた友人から飛んでくる。

バッグを持ち友人の瑛人と共に教室を出る。やっと帰れる、と溜息をつく友人は言う。

「ま、幸せなんじゃねえの？他の人に比べたらさ」

「えっ気色悪」

「シバくぞコラ！」

確かに、人に幸せだのなんだのいきなり言われたら気持ち悪い。

だが俺はまだ大学一年生で就活の心配も無いし、実家から通えていて安定したバイトもある。友達もいる。これ以上無いほど恵まれているのだ。

「あと彼女だけだなあ」

「無理だろ、お前女子前にすると銅像になるじゃねえか」

「うるせー！ コミュ障舐めんな」

「威張ることじゃねえ」

間違いない。俺は異性に対し、極度のコミュ障なのだ。世間一

般で言われるものの度を越えた、本当に喋れないタイプの人だ。

今迄の人生でまともに喋れた異性など、母親がよつぽど年上の人、若い人になると物心ついたばかりの頃から近所にいた幼なじみくらいのものである。と言っても、その幼なじみとは今は殆ど会っていないため、ラブコメ的な展開も無い。

「来月には他学科との交流会あるんだろ？ 大丈夫なのかよ」

「無理に決まってるだろ！ 絶対出たくねえ！」

「でもあれ出ないと単位取れないんだろ？ やるしかないだろ」

うちの大学には、専門科目の授業の中に他学科交流が含まれる。サークルの先輩に聞いたその実態は『大学開催の合コン』。それを聞いた時は目の前が真っ暗になった。必修科目の、必ず出なければいけない授業で異性との交流？ 何の冗談だという話である。「マジでこれ知ってたらこの学校入ってねえよ！」

「どちらにせよお前のそのコミュ障は治らなそうだしなあ」

諦めろ。という本日何度目の瑛人からの言葉のナイフにうなだれながら、俺達は校門を出て駅に向かった。

大学生にもなると自分のゼミだったりサークルだったりで交流のある学生くらいしかハッキリとは覚えていないものだが、うちの大学は比較的特殊な学生が集まるので、駅前にいる人間達も何となくだが、この人は同じ学校の人だなというのがわかる気がする。

駅前には何も無いこの土地だが、自分の地元が似たような雰囲気

気なので何となくこの街のことは気に入っている。

「で、今日はどっか行くのか？」

「あー、うーん……」

いつもだったら趣味の買い出しをしに池袋絳由で秋葉原まで行く所だが、今日はシラバスをよく読まずに取ってしまった苦手な理系の授業だったので、どうにも疲れている。

「いや、今日は帰るわ。疲れた」

「そーか。じゃ、またな」

瑛人とは帰りの路線が違うため、どこか行くのでなければここで別れだ。

素っ気なく別れの挨拶をする学友に苦笑いしながら改札に向かう。改札を通り、電車の時刻表を見る。最後の急行はさつき行ってしまったようだ。つまり急行でも一時間かかる所を各駅で帰らなければならぬ。憂鬱極まりないが、今日は携帯ゲーム機を持ってきている。乗り込むや否やイヤホンを挿し、最近お気に入りヤラが一回一回行動を選択して戦うゲームは爽快感がない作品が多く苦手なのだが、このゲームはターン制でも演出が派手で爽快感があり、ハマってしまった。

『次は 新宿 新宿』

ゲームに熱中しているうちに乗り換え駅に着いたようだ。辺りには疲れが隠せていない大人達、中には酒臭い男も歩いている。

こんなおっさんにはなりたくないな、と今は思っているが、きつ

とその男も俺と同じ歳の時に同じ事を思っていたはずだ。日本というストレス社会で働くサラリーマンの宿命なのだろう。

次の電車も各停で二十駅程。長い間になりそうだ。そう思い電車に乗りゲームをしていると、自分がいる車両の反対側からガン！ と何かを強く蹴りつけるような音がした。

「舐めんじゃねえぞお！ コラア！」

驚いてそちらを見ると、五十代くらいだろうか。顔を真っ赤にした男がなにやら喚き立てながら電車のドアを蹴り続けている。飲みすぎたのだろうか。それとも単純に素がやばい奴なのかもしれないが、どちらにせよ関わらない方が無難だろう。

こんな人間を産んでしまうのは社会のせいかな、元々のその人の人間性が原因なのか。そんな複雑な気持ちで掲示板を見ると、早くも菊川まで来ていた。あと十駅、このダンジョンはクリア出来そうだと視線を手元に落とそうとした時、ここで降りるらしい先の暴走サラリーマンのポケットから何かが落ちた。

そっとしておきたいところだが、なにかトラブルの元になってしまふ可能性もある。立ち上がり拾い上げると、どうやらギフトカードの類の物のような。会社名が印字されており、サラリーマンが会社の関係で受け取ったものだというのが伺える。

既に出てしまったようで、ホームに降りて一番近くの階段を走って登る。改札前のベンチで大の字になっている。出来れ

ば関わりたくないが、手に取ってしまった以上渡すしかないだろう。

「あの、落としましたよ?」

「あ?」

駆け寄って話しかけると、真つ赤な顔を上げてこつちを睨んできた。さつきは後ろ姿しか見えなかったので分からなかったが、顔が凄く怖い。もしかしたらそっち系の人かもしれない。

俺の手にある物をジーツと見つめるとひとつ舌打ちをし、払い除ける。

「けっ、クソ会社の金なんざ使いたかないね。持っつけ。要らねえなら捨てろ」

「えー……」

そう言う怖いおじさんはフラフラと立ち上がり帰ってしまった。

開ける気になれなかった俺は再び帰りの電車に乗り込み、自宅に向かった。

自宅の最寄り駅に着く頃には外は真つ暗になっていた。瑛人と別れた時はまだ夕暮れだった。暗くなるのが早くなると、まだ気温が暖かくとも冬の訪れを感じる。日課の中古ゲームチェックを済ませ、徒歩で家路につく。いつもなら自転車なのだが、金欠なのと運動不足を感じた為、徒歩で行ける所は出来るだけ最近は徒歩にしている。

昔から街を歩いたりするのは嫌いだ。夜でも昼でも、街並みやそこを歩く人々は色んな顔を見せてくれるからだ。悲しみであったり、喜びであったり。大多数は同じ顔をする。この社会

では、世間と同じ顔をし、同じ考えを持って行動する。言わば「世間に流されていれば」楽に安定を手に入れられるのだ。目立つ事はしない。誰かの元で、言われるがままに何かをする。悪くは無いが、自分はそういう生き方を嫌う、面倒くさい性格の持ち主なのだ。

そんなことを考えていると、繁華街を出た辺りで地面に座り込んでいる女性を見つけた。

なにやらうなだれていて見ているだけでは何が何だか分から無い。またもやそっとしておくことの出来ない状況だ。とりあえず意識を確認しようと駆け寄った。

救命講習は高校の時に受けたことがある。もしそういう状況になってもできるはずだ。そう決心し、話しかけようとした。

「あ……えつと……」

口が動かない。やはり俺に異性の救命は早かったか。とりあえず瑛人に電話しよう

スリーコールなった後、接続の音と共に眠そうな声が聞こえてきた。

「あい。もしもし」

「な、なあ。目の前に女の人が倒れててえつとえつと」

とんだ災難だな、と溜息混じりに言った彼は、一つ咳払いをして続けた。

「とりあえず落ち着け。状況は? 意識ないの?」

「わからん」

「はあ。スピーカーフォンにしろ。俺が声をかけるから、お前はその人の腕の脈を確認しろ」

「マジで言ってる……?」

女性の腕を触る? こちとらまともに話せもしないのに、そんなこと出来るはずがない。だが、場合によっては人命に関わる。そうは言っていられないだろう。

ええい、ままよとスピーカーフォンにし、女性の腕を掴む。

「大丈夫ですか? 大丈夫ですか?」

自分のスマホから聞こえる瑛人の声に反応はない。脈は飛び飛びで、明らかにおかしい状態だ。その事を伝えると、今すぐ救急車呼べと言われ切られてしまった。

「えつと救急車って何番だったっけ。あ、百十九番か」

何回かタップミスをしながらもどうにかかけることが出来た。

「火事ですか? 救急ですか?」

「あつ、えつと、救急です! えつと、市川文化会館裏で女性が意識不明です。脈が飛んできません」

「分かりました。直ぐに救急を向かわせますので、そのままお待ちください」

ガチャ、という音と共に電話が切られる。

よく俺あんな的確に報告できたな……これが火事場の馬鹿力か? とそんなことを考えていると、女性の手に握られている手帳の小窓部分から学生証が見えた。

それは学科と学部は別だが間違いないうちの学校のものであり、学年も一緒だった。うちの学校は全ての学部合わせると日本一の学生数を誇る大学なので珍しいことではないが、こういう所で出会うと特別な何かを感じてしまう。

そんな柄にもない事を考えていると、救急車が到着した。慌てて手帳を彼女のカバンに戻し、こっちはです! と手を挙げて誘導する。

流石と言うべきか凄く速さで丁寧な彼女を担架に乗せ、俺に名前と電話番号を聞き、けたたましくサイレンを鳴らし去っていった。

連絡先を開示していいかとの質問があったが、これからも何かしら連絡が来る可能性があるのだろうか。

「これで良かったのか……?」

正直まだ半分パニック状態だが、これ以上はどうしようもないだろう。俺にやれる事は無い。後は救急隊の人や搬送先の病院のスタッフが最善を尽くしてくれるはずだ。

俺にしてはよくやった、頑張った! と自分に言い聞かせ、俺は再び家に向け歩を進めた。

家に帰るのが遅くなり、夕食は一人になってしまった。一人での食事というのも悪くは無いが、万年実家暮らしの俺にはやはり少し寂しく思えてしまう。どこか食パンのような匂いのする衣で包まれたエビフライを味わいながら、夜のニュースを見る。

「しょうもねえ……」

いや、しょうもない、というのは少々語弊があるか。俺は夜のニュースがそこまで好きではない。そもそも一部のコンテンツを除きテレビ自体苦手なのだが、夜のニュースというのはどうにも好きになれない。理由は分からないが、なんか嫌いなのだ。

果たしてこの感情の正体は何かと考えながら、片付けをし自室に戻る。

大学生になって好きな事が好きなように出来るようになったのは大変喜ばしい事なのだが、何故か人間というものはやれる時にやりたかった事を忘れがちなのだ。現代人がよく体験するところでは「友達とカラオケに来たけど、何歌おうとしてたか忘れてしまった!」ってやつである。

何か、何かしようとしてたはずだ。部屋に積まれた未組立のプラモデルを見ながら考える。

思考に気を取られていた俺は、スマホの着信で我に返った。瑛人からだ。

「よ、ちゃんと家に帰れたか?」

「おう、大丈夫大丈夫」

「もしもし。東雲優希様のお電話でお間違いないでしょうか」

「え、ええ、はい……」

電話の相手は声的に初老の女性だろうか。俺の親と似た声質だ。広場のど真ん中に居たため、人気の少ないホールの裏に移動する。人前で電話というのは俺には少々難易度が高い。電話口の相手が知らない人なら尚更だ。

「ええと……どちら様でしょうか?」

「これは失礼しました。私、昨日救急車を呼んでいた者の母です」

「ああ……はい」

ここでようやく昨日の事を思い出し、納得した。随分と早い対応である。そこで気になるのはやはり彼女の容態だろう。

「ええと、娘さんは……?」

「お陰様で無事でございます。つきましては、改めてお礼をさせて頂きたいと思っておりますが」

「そうですか、良かったです。すみません、まだちょっと予定が見通せなくて」

「かしこまりました。では、後日またご連絡ください。この度は本当にありがとうございました。失礼します」

「え、あ、失礼します」

そう言い残し、電話は切られた。お礼という事は当事者の彼女とも話す事になるだろう。今回は先送りになったが、今後必ず会

「そいつア結構」

帰った後にこうして通話することは珍しいことではない。一緒にゲームをしたり、課題をやったりと、俺の生活の中の最も大学生らしい時間だ。本当はサークル等に所属するのが健全な大学生の楽しみ方だろうが、生憎俺にそんな勇氣はない。サークルの新歓の際、集合した所でもコミュ障ゲーが限界に達し、トイシに行くふりをし帰った。周りがあまりに明る過ぎてキツかったのだ。

ふう、と溜息が聞こえた。

「で? あの人はどうなったの?」

「あー、救急車で運ばれて行ったよ。うちの大学の人だった」

「凄いこともあるもんだな……まあ、うちの大学生徒多いし、そんなこともあるか」

その日は通話をしながらゲームをし、日付が変わるくらいで寝た。翌日も学校だったので、夜更かしをすると寝坊しかねないからだ。

翌日、学内にて。

突如として俺の携帯に知らない番号から電話がかかってきた。樂觀主義の俺は昨日の事を忘れていて、謎の詐欺電話かと疑った。恐る恐る電話に出てみる。

「はい、もしもし?」

う事になるだろう。来るべき俺のコミュ障による沈黙の地獄絵図が頭に浮かんでいるが、礼を言われるようなことじゃない! と言いつつ、断る男らしさは持ち合わせていない。青々と広がる空を見上げながら、諦念混じりの覚悟を決め、カレンダーを開き日取りを決めた。

電話を受けた後は授業が無かったので、大学の最寄り駅とは別の路線の駅がある方に行き、昼ご飯を食べて帰った。いつかこの周辺の街を食べ歩きでもしたいものである。だがそれには時間もお金もないので見送りだ。

家に帰って、どういう感じで伺えばいいのか考えていた。菓子折りとか持っていくべきなのか? いや、どちらかと言うところらからもう側なのか? だが葬式でも香典返しみたいな文化があるし、やはり何か……。

いやいや、考え過ぎてしまうのは俺の悪い癖だ。折角の機会だ、気合を入れてコミュ障を少しでも克服しよう。この先来る交流会という名の地獄を乗り切る為にも、少しでもマシにしておくのは有益な事はずだ。最悪の場合の覚悟は出来ている。……と、思っていたのだが。

「いやいやいや、やつぱり無理だつて」

男一人、病院の受付の前で立ち竦んでいた。

若い看護婦さんが受付をしていたのだが、記入台が埋まってしまっており、受付で書類を書くしかない。名前と電話番号くらい

の簡単なものだが、見られていると手が震える。
 どうにか記入し、来院者用のカードを貰う。一瞬名前の字が汚
 過ぎて微妙な顔をされたのは忘れない。エレベーターに乗り、件
 の方がいる階層のフロントで足を止めた。

由紀子、というこの前学生証を見た時の記憶を頼りにフロアを
 歩く。受付で部屋の番号は伝えてもらったはずなのだが、正直も
 う覚えていない。

五分ほど歩き回りやっと病室を見つけた。「里中 由紀子」。古
 風過ぎず、尖り過ぎずの中々良い名前だ。色々考えてしまうが、
 あまり扉の前に立ったままだと不審者扱いされかねない。そろそ
 ろ行かなければ。

「よし、覚悟を決めろ、俺……!」

トントントン、と扉を叩く。二回だとトイレの叩き方になって
 しまう、というのはいつしか資格の面接の本で読んだことがあつ
 た。

「はい、どうぞ」

「しししし、失礼します……」

声が震える。起き上がってこちらを見る彼女はセミロングの黒
 髪が似合う中々の美人だが、そんな情報は今俺の脳内には入って
 こない。目の前に同い年と思われる異性がいる。それだけで俺の
 脳内はオーバーフローだ。

そんな俺の様子を察したのか、彼女は笑顔で手招きしてくれた。

を彼女はちらりと見て微笑むと、また話し出した。

「私も人と話すの苦手だったんです。最近になって多少マシには
 なったんですけど」

「そ、そうなんすね……」

「お時間良ければ、少しお話しませんか?」

「えっ」

これはどういう意図なのか。いや、普通にこちらを気遣ってく
 れているだけなのだろうが、男という生き物はやや早計なところ
 がある。やっと落ち着いてきて顔を見て話ができるようになった
 所でそのような事を言われては、またパニックになること請け合
 いである。

その後は彼女の押しに負け、訓練と化した他愛ない会話が繰り返
 広げられた。どこ出身、趣味が何なのか等。大学がどこなのかと
 という話になった時は変に焦ってしまった。その後流れで連絡先を
 交換し、それから退院してからも会うようになった。

三週間程たった頃の日曜日。今日は椿が有名な隣の県にある観
 光スポットへ由紀子と行くことになった。彼女とは秋葉原で合流
 することになっている。秋に咲く椿、秋咲き椿というらしく、そ
 れを見に行きたいとの事で、何故か俺も行くことになった。

目的地までは秋葉原経由で大体三時間。帰りにビックカメラで
 も寄って帰ろうか……と上野発の新幹線を待ちながら考える。

「ね、駅弁何選んだ?」

「そんな緊張しないでください。此方へどうぞ」

「はっ、はい!」

今すぐ漫画の様に反対側にある窓から飛び出した気分だ。だ
 が何とか耐えて椅子に座り、顔を向き合わせる。

風にたなびくカーテンと黄昏時の光が差し込み、彼女はどこか
 神秘的だ。思わず見つめていたことに気づき、再度パニックに陥る。

「あ、すすすみません!」

「もう、そんなに焦らないでください。今回は、本当にありがと
 うございました。つまらないものですが……」

「あっ、これはこれもどうも」

めちゃくちゃ高そうなお菓子を貰った。サツと貰ってしまった
 が良かったのだろうか。それよりも、これ以上どう話を広げてい
 いかわからない。変にプライベートに踏み込むと気持ち悪いと思
 われそうだし、同じ大学だつてことを話そうにもなんで知ってい
 るんだと言われたら言い訳のしようがない。どうする、どうする
 ……と色々考えていると、再び彼女の方から切り出してきた。

「優希さんでしたよね? その、言い方があれなんです……人
 と話すの、苦手ですか?」

「え」

バレた。いや、第三者が今の俺の状況を見たら火を見るより明
 らかな事なのだろうが、自分では出来るだけそうならないように
 努力したつもりだったのだ。コミュニケーションを見抜かれあつた

「あ、俺はこれ」

自分は概して、人気ナンバーワン! みたいな広告に弱かつた
 りする。今回もその典型で、少し高めだが人気なやつを買ってし
 まった。

「へえ、なんか普通だねえ」

「それ褒めてる……のか?」

褒めてる褒めてる、と笑う彼女の真意は少しも分からないが、
 こここまで自然に話せるようになったのもここ二、三回くらいのお
 出かけのことだ。敬語を解くのにかなり苦労した。

新幹線が来たので乗り込み、予約した席に座る。日曜日である
 からか、少し人が多い。子供の騒ぐ声が聞こえる車内から外を見
 ると、どこか自分が変わったなどという自覚のようなものが生まれ
 てくる。

今までの自分なら日曜日に新幹線まで使つて花を見に行く事な
 ど絶対に無かつただろう。ましてや女性と一緒になのだ。過去の自
 分がこの光景を見たら困惑するに違いない。

ご飯を食べた後寝てしまい由紀子に起こされた。その時上の荷
 物置きに頭をぶつけ笑われるという事件も発生したが、その後バ
 スに乗りなんとか目的地に到着した。

バスを降りるともう既に花の匂いが漂ってくる。自然の多い所
 は空気が良い。

「んーっ……いいねここ、落ち着く」

「だな。じゃ、行くか」

「あ、待つて待つて。先にあっち行こう」

そう言うて由紀子が指を指した先は土産屋。どうやら彼女は土産は先に見たい派らしい。

「あー、良いね。行こうか」

店はそのままで大きくなく、この県の特産品である納豆関連の食品がズラつと並んでいる。カウンターの傍には雑貨コーナーがあり、櫛のモチーフをあしらった雑貨が売られている。

しばらく店内を見て回っていたのだが、由紀子が雑貨コーナーで立ち止まっていた。気になるものでもあったのだろうか、と近づくと、彼女の視線の先には桃色の櫛モチーフのプレスレットがあった。価格は二千四百円。男ならここで買ってあげるべきなのか。いや、気を使わせてしまうか。と考えながら気付かれないように財布を見る。給料日前の懐は適度に寒く、今ここで消費してしまうと致命傷だ。電子決済なら、と思ったがここで使えるのは有名なクレジットカード会社のカード、もしくはギフト券。そんな都合良く持っていない。

「んー、もうちょっと考えたいな。行こー！」

「ん？ え？ あ、ああ。うん」

足早に店内を抜ける由紀子に手を引かれ、店を出る。

その後は櫛含め色んな花を見て回ったが、やはり何かモヤモヤする。どこかで聞いたことがあるのだが、男の脳は女性に比べキ

ツバリ諦める、ということが苦手らしい。自分の脳がとて

も忌々しいが、どうしようもない。少し経った後、お互いに疲れてきたのでベンチに座り、休憩する事になった。彼女は御手洗いに引っつくると言い席を立った。

「財布から忘れてた金とか出てこねえかな……」

無い物ねだりと分かっていても財布をいじってしまう。レシート入れをペラペラめくっているとある物が目に付いた。あの日に怖いおじさんに半ば押し付けられたギフトカードのようなもの。あの後開ける気にもましてや使う気にもなれずつとしまっていたものだった。

金色のシールを剥がし、中を見るとそれは有名なクレジットカード会社のギフト券三千円分だった。

「ただいま。優希は引っくるる？」

「あー、うん、引っくるる！」

サツとギフト券を財布の中に隠し、ポケットに突っ込む。ここではもう気を使わせてしまうか等という考えはもう無かった。まずは普通に用を済ませ、急いで土産屋に向かう。

息を切らしながら商品を手に取り会計を済ませ、迷惑にならない程度で速度で戻る。

「あ、おかえり。どしたの？ そんな息切らして」

出来るだけ我慢していたつもりだが、見抜かれてしまった。

「やー、ちょっと最近お腹の調子がね。あはは……」

「ふーん。ま、良いけど。そろそろ帰らないと暗くなっちゃうね。行こー！」

「あつ、はい」

凄くキビキビしてるなあ。と複雑な気持ちになりつつも、敷地を出てバス停に向かう。そこで俺は大きな問題に気づいてしまった。買ったのはいいが、どうやって渡すのか。素っ気なく渡してしまうのもなんか違う気がするし、某ネズミの国のお城の前で告白するが如く盛大に渡す勇氣もない。どうしよう、どうしよう、と考える内にもう最後の乗り換え電車に乗ってしまった。ここで渡さずしていつ渡す！ とガラガラの中を見回し、横にいる由紀子に話しかける。

「由紀子、渡したいもの……が……」

寝ている。何故こうも前途多難なのか。疲れているのをわざわざ起こすのも嫌である。どうしたものか。にしてもさっきの文言は告白みたいな感じで勘違いされ引かれかねないな。と再び思考の渦に囚われていると、追い討ちをかけるように車内アナウンスが鳴った。

『次は 市川 市川』

最寄り駅に近づいている。このままでは渡せない。ヤケになつた俺は眠る由紀子の手に袋ごと持たせ、立ち上がった。

「じゃ、じゃあ気をつけてな」

「んー？ ああ、じゃあね……」

寝ぼけているようだが、返事は返ってきた。最寄り駅が別の駅なので本当は見送りたいのだが、遅いからいと本人が言っていたのでここで降りることにした。直接渡せないまだまだ未熟な自分を恨みながら家に帰る。

帰った後由紀子からありがとう、というメッセージと共にプレスレットの写真が送られてきた。大きな安心と共に疲れがどつと身体に降りかかり、そのままベッドにダイブし寝落ちてしまった。

そこからの一週間は中々学業に身が入らなかった。週末には試験が待っていたからである。

試験当日。学校に行かなければならない。少しは克服したとはいえ、やはり大人数の集まる会場には未だに抵抗がある。入学式はかなり大きいホールで行ったのだが、終わった後に周辺で写真を撮ったりしている集団に完全に精神を持っていかれ、苦しみながら家に直帰した。今回もそうなるのではないかという不安から気が気ではない。

「おい、何死体の第一発見者になったみたい顔してんだ」

「待つて、今ツッコミ入れられん」

「はあ……少しは克服したんじゃないのかよ」

瑛斗が呆れ混じりに呟く。

「そんな簡単に解決したら苦労しねえよ！」

「そりゃそうだけども。もしかしたらその子に会えるかもだろ？」

みっともない姿は見せるなよ」

「それは……卑怯なり」

確かに、由紀子にこんな姿は出来れば見せたくない。いや、もう初対面の時にバレてはいるのだが、だからこそ自分が進化したところを見せたい。面倒臭い性格が出たといえはそれまでだが、我を貫くのが自分のいい所だと思っている。そこを曲げる訳には行かない。頑張れ、俺！

その後、班分けの表を貰い、席についた。六人で向かい合う並びになっている席には、明らかに理系で真面目そうな男や、言い方は悪いがそれこそ新宿の繁華街で夜遊びをしていそうな女性もいる。周りのキラキラしたオーラに入学式同様精神を持っていかれそうになるが、なんとか意識を取り戻し机に向き合う。

「では、始めて下さい」

講師のその一声と共に、交流が始まる。最初は、スクリーンに表示される写真について感想を話し合う、というものだ。その写真は極めて一般的な富士山の写真で、感想に困ってしまった。次々と多種多様な感想が出てくる他の班の人達に焦りながら、感想を絞り出した。

「ハイカラですね」

空気が凍りついた。意味がわからない。何故こんな意味のわからない感想が言える?! 逆に凄いわ! と心の中で自分にツッコミを入れる。

凍りついた空気の中、後ろから笑い声が聞こえた。凄く聞き覚えがある。聞き覚えがある、女の人の笑い声。恐る恐る振り返る。

「あはは、ごめんごめん……ふふふふ……」

由紀子がいた。

「あ……オハヨウゴザイマス……」

「あはは、なにおはようございますって。ほら、前を向いてグルーワークに集中!」

ついでにと言わんばかりに帰り、良かったら正門前で会おうね、と囁かれた。

そう言われ顔を掴まれ前に直される。周りの視線が痛い。

「おうおう、カッブルカー?」

「なっ……お前」

数メートル先にいる瑛人がニヤニヤしながらそう言うと、周りから笑いが巻き起こる。由紀子はそんな事も気にかけていないようだ。ヒューヒュー! などといった極めて古典的な事をしていやるやつもいた。瑛人、あいつは一発後で殴る。だが、今で色々吹つ切れた。何より、彼女の腕に付けられていたプレスレットが勇気をくれた。これ以上醜態を晒せない。そこからは初対面の人からも質問責めにあつたが、上手くかわすことが出来た。

正直帰る頃には暗くなっているかなと思っていたのだが、そんな事はなく正午過ぎくらいには解散になった。こういう時は大体瑛人はトイレの前にいるのだが、何故かこの階にも居ない。な

んか連絡あつたかな、と携帯の通知を見る。

『今日は先に帰る。お二人さんで帰りな。追伸、進展あつたら教えろ』

という瑛人もといクソ野郎からのメッセージの通知が来ていた。あいつは今度会つた時には二発は殴る。由紀子は確か正門前に居たはずだ。いつもの事とはいえ待ってくれている女性より男友達を優先した事を反省しつつ、正門に向かう。

門の前にいる由紀子は夕日を受け、少し話しかけづらい感じがある。

それでも、少しでも変わった自分を信じ話しかける。

「お待たせ、由紀子」

「あ、やっと来たね。帰ろうか」

駅へ向かつて二人並んで帰る。ここまで急速に仲が良くなった女性は初めてだった。これからは友人を増やせるように努力しよう。

「ねえねえ、さつきから気になってたんだけどさ」

「ん? でした?」

由紀子が真面目な顔で聞いてくる。

「ハイカラって何?」

「さあ……?」

こちらも真面目な顔で見つめていると、同時に吹き出してしまふ。

何も無い、平凡な日々が好きだった。

だけど。

「こんな毎日も……悪くないな!」

プリムラ

高尾
憩

幼い頃から、人の感情が色として見えた。
物心つく頃には、どの色がどんな意味を持つのか、なんとなく把握していた。

うんざりすることもあった。
これはそんな俺の、物語である。

四月六日。

この春、俺は晴れて高校生になった。家から歩いて三十分しないくらいの所。対して偏差値が高いわけでもないから、小中の友達が結構いる。

「よー、伊織」

今話しかけてきたのがその友達の人洋介だ。洋介は小学校からの幼馴染で、いつも明るく、簡単に言うとお調子者だ。

「よー、洋介。何組だった？」

「一組だった。お前は？」

「おんなじ」

この洋介ともう一人、ミチという子がいるのだが、二人と俺は小中ずっと同じクラスで家も近かった。はず。所謂幼馴染み、腐れ縁ってやつだ。

「そういえば伊織、ミチのこと見た？」

「いや？」

確かにミチのことを見ていない。どうしたのだろうかと思い、辺

りを見渡した。すると、

「やあ、諸君！ 元気にしているか」

と一人の女の子が台風のように現れた。この子がミチだ。見たらわかる通りの、お天馬娘。

「俺は、ずっとこのうるさい二人に囲まれてきた。」

「幼馴染くんたち、初めてクラス離れちゃったな。私がいなくて悲しむなよ！」

「うるせえ」

洋介と思わず声が揃った。

後でクラス表を見た時、俺と洋介は一組で、ミチだけ二組だった。何かが心の中で悶々としていたのを今でも鮮明に覚えている。洋介も同じ気持ちだったのだろう。俺には黄色が見えていたから。

入学式を終え、いつも通り三人で帰っていた。帰り道もほぼ同じで、互いに交際相手もいない。一緒に帰るのが当たり前のようになっていた。

歩いていると洋介が、

「お前らさ、好きな人いる？」

と急に聞いてきた。すかさず俺は、

「入学式今日じゃん。できるわけ」

と言ったら、洋介から黒が出てきた。何を疑っているのだろうと思っただけ、強くは言及しないようにした。なんとなく察しがつ

いていたから。

「ちげーよ。新しい学校で、じゃなくて中学から継続して好きな人とかの事だよ」

ミチはボカンとした顔で聞いてくる。ああ、なるほどそういう雰囲気を持っていききたいのかと思い、少し腹が立つてきた。

「洋介はいんの？」

聞き返した。

「いるよ」

ビンゴ。さつきから赤がチラチラ見えているわけだ。

その後、たわいもない話をし、帰宅した。

ちよくちよく出てくる『色』が何か気になっっている事だろう。

簡単にいうと人の感情が具現化して見えるものに、俺が勝手に名称をつけたものだ。大まかにカテゴライズされ、俺にはその人の心情を色付きで見ることが出来る。

一見、人の感情がわかりやすくなるのは良いじゃないか。と思うかも知れないが、そんなことは一切ない。知らなくても良い感情というものはたくさんある。常時見えているわけではないので、そこは幸いだった。

この話は、そんな俺の物語、なのだろう。

高校生になって一ヶ月が経った。この間に親睦を深める宿泊行事があったり、新しく出来た友達と遊んだりして過ぎていった。これが所謂青春というものだろう。今日の帰り道には、ミチと洋介、プラス何人か友人達がいた。知り合いも含まれていたけれど、「俺、彼女出来たんだよね。この一ヶ月デート繰り返したりして」と、照れながら洋介が言う。まさかミチか？ と勘繰ってしまつた。続けて洋介が、

「三組の野原さん、知ってる？」

知るか。と思いつつもめだたいので、それなりに明るく返した。

ミチは黙っていた。家に帰ってから、そのことと同時に青が覗いていたことも思い出した。

あの時、ミチは何故青かつたのだろうか。

色には意味があると言った。そう、意味があるのだ。

赤には貪欲、青には瞋恚、要は悪意や憎しみ、黄には心の動揺、緑には健康、黒には疑いなど、俺には色に意味が乗っかって見える。俺の中での大まかな括りなので、時々意味合いが違い、こんがらがってしまう時がある。

そして時々、覗いた時に、なんの色も見えない人がいる。大体その場合、霊感が強いとか、動物と会話できるだとか、何らかの力を持っている。前にテレビの撮影見学に行った時、犬と会話できる女性を覗いた時に、何も見えなかったのだ。

これで俺の言っていることが少しわかりやすくなったことだろう。

次の日、登校中に偶然洋介と会った。まあ家が目と鼻の先だからそりゃそうだろうが。

「ずつと昨日の帰りのことがモヤモヤしていたので聞いてみた。」

「お前さ、ミチとなんかあった？」

「え、いや、何も？」

そこから少し無言が続き、「昨日アレ見た？」と別の話題を出してきた。黄色が覗いているよ、と言いたかったが、俺以外に言ってもわからないので、唾と一緒に飲み込んだ。

その日一日、モヤモヤして授業に集中出来なかった。洋介とミチの間に何かあったのだろうか。告白とか？ いやでも、今日付き合い始めたって言ってたな。訳がわからなくなってきた。なんで俺はこんなことにモヤモヤしているんだろう。鏡を見ても自分の色はわからない。魚の骨がつかえたようだ。

夜、一人で近所を散歩するようになってから色々と考え事をするようになった。これから無難に部活やら遊びを繰り返して、勉強を頑張つて、良い大学に入り、いい所に就職する。誰が見ても順風満帆な人生。これが嫌で芸術やります、お笑いやります、ユーチューバーやります、はいはい。誰しもが言う普通の人生は嫌だ

「ミチ先週？ 先々週？ かわからないけど、洋介となんかあった？」

「いや、何も無かったよ……」

「やっぱり何かあったのか。心の奥でモヤモヤがまた湧き上がってきた。」

「教えて」

「うん……わかった」

聞くと、少し前に洋介はミチに告白まがいの事をしたらしい。そして後日一緒に帰った時、彼女が出来たと言っていたので、どういうことだ？ となつてしまったらしい。

確かに時系列がおかしい。二人とも好きだったのだろうか。モヤモヤと同時に、イライラが湧き上がってきた。何故その感情が湧き上がったのかはわからない。

何日か経ち、また一緒に登校していた。今日のテスト面倒くさいな、野原さんどうなのか、といつとも同じ会話が續いていた。「そういえばさ、伊織の家行った事ないよな」

と、洋介が言う。確かに呼んだことはなかった。特に理由があったわけではないが、なんとなく父に気を遣っていたのだろうか。そして洋介が家に来る事になった。ミチは予定があるらしく、今日は来なかった。

「今日、父ちゃんいないの？」

「うちの親、いつも仕事で帰り遅いんだよね」

つてやつね。どうせ俺も大学三年にでもなれば就活に焦るようになる。成功する人なんて、一握りしかないよ。いや、でも、やってみないとわからないじゃん。じゃあ死ぬ気でやってみな。の繰り返し脳内で行われる。寝言は寝てから言えとはこのことだ。そんなことを考えながら歩いていると、いつの間にか家から一番近い、と言ってもそこそこ遠い公園に着く。

公園に来ると両親との思い出が蘇る。母は小学生の頃、突然いなくなった。当時は悲しさが沈み過ぎて、理由は浮いていた。放置された、ガムシロ入りのアイスコーヒーのように。

母の死が現実になってしまふのが怖く、理由は今でも聴けていない。母がいなくなつてから、父は寡黙になり、俺を避けるようになってしまった。

入学式の日も、朝ご飯の横にこつそりと、『入学おめでとう』と書かれた紙が置いてあるだけだった。冷たいな、とも思いつつ、朝食を済ませ家を出た。

モヤモヤしてから一週間くらいが経った。この一週間は何事もなかったかのように、ミチと洋介は仲良くしていた。だからこの前のことを忘れていたが、ふと思いついてしまった。思い出してしまったからには気になって、もういつそのことミチに聞いてしまえ、と思った。しかし、直接は何か地雷を踏みそうなので、チャットで聞く事にした。

今までこんなに一緒にいるのにも関わらず、家庭のことを話したことがなかったので、ムズムズとした。その時の洋介の色は何か、怖くて見る事ができなかった。

「お前、ミチの事好きなんだろ」

洋介に言われた。

「え、いや好きじゃないけど……」

驚いた。好きじゃないと言ったとき、シャープペンスルの先端で、皮膚を刺したかのような痛みが胸付近に響いた。俺はミチが好きなのだろうか。

「お前が好きじゃないって言うなら、俺が告っちゃうからなー」

お前、告白したんじゃないのかよ、と思つたが口をつぐんだ。

その後、テレビゲームやたわいもない話をして楽しんでいると、ガチャッと、父が帰ってくる音がした。

「おじゃましてまーす！」

「ゆつくりしていつてね」

と一言言うと、自分の部屋へ父は向かった。そしてドアがチャツと開き、「伊織来い」と呼ばれたので向かった。

「あんまり騒ぎすぎるなよ」

うるさいなと思いつながらも「わかった」と言い、戻ろうとしたところで、捨て台詞のように、

「こつちは疲れてるんだから」

と言われ、怒り心頭だった。

それから、大体一時間後に「また明日な」と洋介は帰って行った。父がいるときに友達とは呼ばないようにしようと誓った。

母の命日が近づいてきた。母は俺が小学生低学年の時に、亡くなった。らしい。生まれてから、小学生低学年の頃の思い出がほぼない、よく怪我をしていたことくらい。なにも等しいだろう。サンタなど来たこともないし、俺にはヒーローがない。一つ残っているのは、母への嫌悪感のみ。母の色を常に覗いていたことだけ、刻まれている。だから青があまり好きではない。最近はずも青く光っているから、腹立たしい。毎年、命日に父はリビングで一人晩酌をする。俺も毎年一応家にいるが、部屋にこもっている。

母の命日当日、平日なので当たり前に学校がある。いつもなら帰るのだが、カラオケに行こう、と誘われて来てしまった。色が踊っているかのようにみんな楽しんでたし、俺も心の底から楽しんで帰路についた。正直、命日のことなんか忘れていた。るんで帰ると、家の空気が泥を被ったように重く、嫌でも今日が命日だと言うことを感じさせられた。リビングには酒を飲んだ父が授業中寝ているかのように、机に突っ伏していた。

「ただいま」
「こんな時間まで何してたんた」

やっぱり、俺にはサンタも来なければ、ヒーローも来なかった。

目が覚めた。

今日は何曜日だっけ。

金曜日だ、学校行かなきゃ。

部屋が汚かった。

なんでだっけ。

久しぶりに外に出た気分で、朝からとても気分がいい。

洋介とミチだ。

なんだか久々にあった気分だ。

気分ばっかだな。

昼休みはみんなで、ソシヤゲをしていつも遊んでいる。

「サクラ、左に敵」

「ソーちゃん、右にもいるよ」

洋介とミチがいう。サクラやらソーちゃんというのは、僕の名前だ。このゲームでの名前もサクラソウにしている。洋介は桜が好きだから、ミチは単純に呼びやすいから、そう呼んでいるらしい。にやけてしまう。

昼休みなんてゲームをしていたら、一瞬で終わってしまう。悲しいな。

今日はなんてことない一日だった。特に何かイベントがあるわ

「なんでも良いでしょ」

「何をしていたか聞いているんだ」

「友達と遊んでた」

それから父は立ち上がり、怒鳴り散らかしていた。そして疲れたのか正気に戻り、座りながら「お前が殺しておいて」とボソツと呟いた。

「は？ 何言ってるの」

俺が殺した？ 母さんが死んだのは、まだ俺が九歳や、そこの年齢だったじゃないか。

父が続ける。

「お前が母さんを突き飛ばしたんだろ。私はその場にいなかったからわからんが、仕事が終わって、家に帰ったら血を流した母さんと、気を失ったお前がいたんだ。覚えてないなんて言わせない」俺は何も覚えていない。それどころか、俺が母さんを殺す訳が無い。だって母さんのことが好きだった……？ 好きだったっけ。あれ、どうだったんだっけ。

ズキッと頭が痛くなった。次第に割れそうなほど強くなっていた。

早く横になりたい。父さんが何か言っているけどそれぞれどころじやない。

やつとの思いで自分の部屋について、色々なものをかき分けながら、力尽きた。

けでもなく、つまらない日常。まだ泥まみれにでもなった方が、マシだった。

家に帰ってきてても暇だったから、物理のノートに日記を書く事にした。少しふざけるか。

さあ、今日からゲームのイベント開始だ。

苦じゃないぞ全く。

ラクに終わるものでもないけど。

ソー様の手にかかりや、朝飯前よ。

ウタでも歌って、サクツとやりますか。

ガムでも噛みながら。

父さんにはバレないように、深夜も使おう。

ヲタクの鏡ってやつだな。

殺つたりますか！

完璧。我ながら良い文章。

今日、珍しく総合の授業から宿題が出た。『小学生の自分』ってお題。毎日怪我していたし、あざだらけだったな。母さん怖い。適当に有る事無い事書いて、床に就いた。

三ヶ月に一度、土曜日に学校がある。今日がその日だ。昨日のことを覚えていない。疲れていたのだろうか。

「よう、伊織今日なんか元気ないな」

洋介が寄ってきた。

「多分、疲れてるんだと思う」

「ちゃんと寝るんだぞ。授業中でもバレなきゃ良いんだから」

洋介、良いやつだなと思いつつ「ありがとう」と言った。

そして何事もなく全授業が終わり、家に帰ってきた。父とは朝すれ違ったのだが、気まずかった。何も声をかけられなかった。どう思っていたんだろう。と同時に最近、人の色を覗いていないことを思い出した。覗かないで済むならそれでいいか。

いつの間にか寝ていたが、起きた。日曜日なので今日は学校が休み。日曜日はお昼に起きて、昼食からとるのが、マイルーティーンとなっていた。

なんとなく机の上に目をやると、変な日記と、それから、『僕が母さんを殺した』と言う文字。足の指から、頭の先まで、鳥肌がたち、寒気が止まらなかった。思い出した。父さんに言われたことだ。本当に俺がやってしまったのか。頭を掻きむしったが、何も状況は変わらなかった。今こそヒーローが現れてくれ、と願ったが、そりゃあ来るわけがない。

心が淀んだ。淀川のように。

息が荒くなり、正気を保てなくなりそうだったので、ハードコアをスマートフォンから流した。攻撃的な音楽は淀んだ感情を打

ち消してくれる。落ち着いてきた。意識が飛びそうだ。

俺の頭の中に映像として流れてきた。頭から血が流れている母さん。

まだ少し息があって、真っ青が覗いている。

見えるはずのない、紫色が見えている、不思議な日。

手にはナイフの感触。ナイフの感触。

ナイフの感触？

あたり一面、血の海だった。

俺の手には、ナイフが握られていて、血の海を中心に父さんがいた。

そのデジャブを目の当たりにし、母さんの時のことを、鮮明に思い出した。

母さんを殺したのはあいつだ。

そして、リビングの食卓の上にケータイが置いてあり、メモが開かれていた。

母さんと父さんを殺したのは僕だよ。

ミチにも告白しといたし、無事振られてきた。

今まで辛かっただろう。

でも安心して、ずっと僕がついてる。

僕の色はあいつらみたいに汚くないだろうか？

サクラソウより

と。

どの感情よりも、怒りが先行した。絶対に追いつけない徒競走が、感情の中で行われていた。

あまつさえ、俺は今、運の良いことに、ナイフを持っている。

また、運の悪いことに、ナイフを持っている。

この千載一遇のチャンスかつ、失うものがない俺にとって、やるべきことといえば、サクラソウを殺すことだった。

そして、一瞬の隙を見て、サクラソウの心臓にナイフを突き立てた。

これはそんな俺たちの物語である。

サクラソウには色々な、花言葉が存在する。

運命を開く、愛、恋、素朴、そして……。

思春期の始まりと終わり。

シオンの花を喰らう

陽村 恵

美味しい。美味しい。
おいしい。おいしい。

この青い花はしょっぱい。あそこにあるピンクの花は甘酸っぱい。

ああ、でもどうしてだろう。いくら食べてもお腹が減るんだ。

いくら花以外の美味しいものを食べても、お腹がタプタプになるまで飲み物を喉に流しても、決して私の体が満足することは無い。

この空腹を、どうやって埋めることが出来るか。

1

菜緒は好き嫌いをせず、風邪ひとつひかない、健康的な体をもつ、至って普通の女の子だった。両親も彼女を蝶よ花よと大切に育て、元気にすくすくと育っていった。

しかし、小学校高学年くらいの頃。学校生活にやっと慣れ始めてしばらく、それは突然起こった。

登下校中、道端に咲いていたタンポポを見て、ぐうとお腹が鳴ったのだ。

その時一緒にいた幼馴染の母には、

「お腹が空いていたのね。いっぱいお外で遊んだからかしら」

今度は初期衝動とは比べものにならないくらいに心臓が動いた。
「おい、しそっ」

足は自然と花屋へ向かっていた。夕飯の食材を買おうとしていた母に対して、彼女ははつきりと言ったのだ。

「ママ。これ、美味しそうだね」

母は目を見開いた。もちろん、接客をしようとしていた店員さんも、一〇歳にも満たない女の子が突然変なことを言い出したのを見て、驚きを隠せていないようだった。

「な、何言ってるの。訳のわからないことを言わないで」

そう言っただけ、苦笑いをした母は、ダイニングテーブルに飾る立派なスイートピーの花を買って、袋を菜緒に渡した。その帰り道、母が買ったスイートピーを見て、見た目もググルルとお腹が鳴った。それも前よりひどい腹の虫だった。口の端から垂れる涎を拭くが、止まらない。

ごきゅりと喉がなる。その甘美な誘惑に負け、菜緒はおもむろに花柄の部分をもしり取り、口に入れた。母はギョツとした顔で彼女の肩を掴んで揺さぶった。

「何食べてるの！ べつてしなさい！ ほら、べつっ！」

肩を揺さぶられている間も、咀嚼をやめない。人の身体に害がある花かもしれない、それでも咀嚼することをやめられなかった。

(……おいしい)

甘く感じたのだ。ツツジのようにあからさまに甘い蜜が出てい

と微笑まれたが、幼馴染は菜緒の学校内での行動と食欲を知っているため、絶対違う、と視線で語ってきた。そのじつとりとした目に何も言えなくて、菜緒は彼から目を逸らして「そうかもなあ」なんて答え、先程の衝動は気のせいだと思おうことにした。

ある日。いつも通りにうちに帰って、母が用意してくれた晩御飯を食べた途端、猛烈な拒否反応が全身を襲った。咄嗟に口に両手を当てる。食事中青白い顔になっている娘を見て、只事ではないと気づいた母は、父にポリ袋を持って来させて、菜緒の口元へと運んだ。そして彼女は、ポリ袋に戻したものを吐き出した。

なんで、どうして。ママの料理は世界一美味しいはずなのに。頭の中は何かにかき混ぜられたようにぐちゃぐちゃで、まともに考えることができなかった。

父は母を、

「お前が料理に何か仕込んだんじゃないのか」

と疑ったが、当然母がそんなことするはずもなく、食物アレルギーに該当するものも一つも見当たらないため、彼女がどうして吐いたのかも、誰一人わからずじまいだった。次にまたこんなことが起こったら病院へ行こうと約束をして、今日の晩御飯はどりあえず抜きになった。

その翌日は、休日だった。母の買い物に付き添うようにして歩いていたら、偶然花屋の前を通りかかった。

どくん。

るわけでもない。けれど、確かにそのスイートピーは料理されたような味がしたのだ。

揺さぶられても何も言わず、その花を飲み込んだ菜緒に、母は顔を青白くさせ、彼女を抱えて病院へと急いだ。

2

「うーん、お宅の娘さんのことなのですが……お腹がすいていただけだと思います」

「そ、そんなはずありません！ その証拠に、昨日、娘は晩御飯を食べられませんでしたよ!？」

「多分、何かしらの食当たりでしょう。うちの設備では病名を断定するのはいたしかねます。一応大きな病院へ紹介状を書いておくので、詳しく知りたいのであれば、そちらを受診して下さい。一週間分のお薬は出しておきます」

病院の診察時、医者はだるそうにカルテを持って二人に向き合う。菜緒の奇行は、近所にある病院で病氣だと断言するのは明らかに厳しかった。

母は眉毛をハの字にして、俯いている菜緒を見た。その表情は、感情全てがすっぽりと抜け落ちているようだった。

母親に手を引かれ、帰路についた菜緒は、電池が切れたロボットのようにな動けなくなった。

信じられなかった。また、母の美味しい手料理を食べられると信じて止まなかった。

病院に行けば、自分のことが少しでもわかると期待をした。しかし医者からの返答は、自分のそれが病気がまだわからないということだけ。

「ママ。私、またママのご飯、食べられるよね……？」

母は何も言わず抱きしめた。背中に回った手が小刻みに震えている。

「大丈夫だよ。きっと、また食べられるよ」

母が言った、その言葉を信じて。

後日、菜緒と母は街で一番大きい総合病院へと赴いた。今度はしっかりと、自分の抱えているそれが何なのかをはっきりさせようと母は意気込んでいたが、菜緒はどこか諦めた表情をしていた。

「花村菜緒さん。あなたは『花食症』を患っています」

精密な検査をして、医師の出した答えは、全く聞き覚えのない病名だった。

曰くそれは、花しか食べられず、年々病状が悪化すること。花を食べる毎に、自身の寿命が減っていくこと。そして最終的に、花になって死ぬこと。

なんてロマンチックな病気だ。笑えないジョークにも程がある。

ただでさえ情報過多で混乱している菜緒に、医者は更なる追い打ちをかける。

「それから、もう二度と、普通の料理を食すことはできないと思っただけだ。花食症とはそういう病気です」

絶望だった。一筋の希望すら絶たれ、菜緒の目は完全に光を失った。母が涙を流しながら屍のように動かない彼女を思い切り抱きしめた。

「ごめんね、ごめんね……」

何度も菜緒に謝る。どのような意味を含めて謝ったのかは、泣いた母のみぞ知る。

それから菜緒の食べるものは一新した。母が食用花を買ってくるようになって、彼女は衛生的にも安全な花だけを食した。最初は美味しそうに食べていたが、母が買ってくる量だけではすぐにお腹が空いてしまい、文字の通り道草を食べるようになった。

三歳も年が違ふ妹の紗良は、姉が花を食べても、態度を変えずに姉として接してくれた。

そんなある日、奈緒と紗良は喧嘩をした。きっかけは些細なもので、ほとんど覚えていない。小さな喧嘩は段々と論点をずらし、気がつけばぎゃいぎゃいと大きな口喧嘩へと発展していた。

「いつつもそうだよねお姉ちゃん！ 花食べるなんて、頭どうかしてるよ！」

「はい？ そんなこと、今は関係ないでしょう!？」

「前から思ってた！ お姉ちゃん、おかしいじゃん！ これじや友達にもお姉ちゃんのこと言えないよ！」

き、段々と学校へ足を運ばなくなった。

その中で、ただ一人、彼女の幼馴染である向井晴樹だけは、彼女のそばを離れなかった。

向井晴樹という男は、とても優秀な幼馴染だ。成績優秀で、運動もできる、まさに文武両道を体現したような完璧超人。さらにモデルやタレントとまではいかないが、人並みより上の整った顔立ちをしている。しかし彼は幼い頃から視力が悪く、ピン底眼鏡をかけているせいも、芋臭い印象を周囲からもたれていた。

菜緒とは生まれた時からほぼ一緒にいて、彼女の身に起きた異変も、苦しみも、一番近くで見ってきた、唯一の理解者だった。

「なあ。学校、行こう」

「……うるさく」

「みんな待ってる。お前のお母さんも心配してる」

「来ないで、もうほっといてよ！」

意地になって晴樹に対して心ない言葉を浴びせ、布団に包まれた。世界のあらゆるものが、菜緒にとっては敵に感じた。布団に包まることによって、それら全てが遮断されるため、菜緒はそのときだけ、安寧を覚えた。

「………また、来るから」

二度と来るな。

菜緒は心の中で悪態をついた。それからと言うもの、晴樹は来る日も来る日も、菜緒に声をかけ続けた。しかし、菜緒が出てく

菜緒は学校でも、腫れ物のように扱われた。最初は同級生から弁当の中身は何なのかを訊かれたことがきっかけだった。理由を聞いた男の子は、彼女が秘密にしていたものを馬鹿正直に話してしまい、あつという間に学校全体に広がってしまった。

『花村菜緒は花を食べるけけ物だ』

『彼女に触れると変なウイルスにかかって死に至る』

などという懇切丁寧な全くの嘘を尾びれにつけて。それから彼女に話しかける者はいなくなり、菜緒は完全に学校で孤立した。さらに中学も別の学校に行ったが、菜緒とクラスメイトだった一人が、また新たに噂を広めて、彼女はいく先々で孤独になってい

ることは一度もなかった。そして決まって、帰るときに「また来る」という。菜緒は諦めたように目を閉じた。

数週間経った。菜緒は花も何も口にしていない状態で、頬は痩せこけ、見るに耐えない状態まで衰弱していた。だが何も口にしなくなかった。自分のこの病気は、花を食べれば食べるほど病状が悪化し、寿命が縮んでいくと医者から聞いていたからだ。そのため処方された薬だけを頼りに、彼女は生活していた。しかしそれも、もう限界に近い。

「ごはん、食べにいかなくちゃ」

菜緒は虚な目をして、部屋の窓から飛び出していった。

4

晴樹は塾を終え、家路に向かっていた。その最中、制服の中の携帯が震える。画面を見ると、珍しく菜緒の妹からの着信だった。

「はい、もしもし」

「もしもし、晴樹くん!? お姉ちゃんがどこに行つたか知らない!?」

電話越しにも分かる通りに、ずいぶん焦っている。

「落ち着いて、紗良ちゃん。何があったの?」

「お姉ちゃんが……いなくなつて!」

それを聞いた晴樹は、草駄天の如く走り出す。あらゆるところ

その優しさが余計に菜緒の心を痛めた。

「何が、あった」

できるだけ優しく、彼女のストレスにならないように、晴樹は尋ねた。彼女はしばらく黙つたまま、震える手を虚な目で見ていた。震えが収まった頃、菜緒は微かな声で話し始めた。

「味が、しないの」

「え?」

「食べても、食べても。何も美味しく感じない」

どうしてだろうね、と彼女は力無く笑った。

「みんなみんな、私がいなくなればいいって。花しか食べられないから、人間じゃないんだって。……晴樹も、そう思ってるんじゃないよ?」

晴樹は、口をつぐんだ。

「……みんな、迷惑としか思つてないんだ。だったら私、もう、死んだ方が」

ばあん!

破裂音が響く。目の前にいる彼女は、赤くなった頬を押さえ、呆然としていた。叩いた手がヒリヒリと熱を帯びる。彼女に手を挙げた罪悪感もあったが、それ以上にこんなにも追い詰められていたのに、どうして何も言ってくれなかったのかという悔しさの方が強く胸にあった。

「なんで」

を探し回った。いつも遊んでいた公園、前まで通っていた学校、自分が知り尽くしている限りの場所は走り回った。しかし菜緒の姿はどこにもなかった。

「はあ……っ! くそ、あいつどこにいるんだ……!」

膝に手をつけて肩を上下に動かす。ずっと走り回っていたからか、酸素が脳に行き届いてない。

どこだ。あいつは、どこに行つた。

そこでふと、まだ探しに行っていない場所を思い出す。晴樹は流れる汗を乱雑に拭い、その場所へ全力疾走を決めた。

走り続けて、ようやく目的地に着く。そこは、あたり一面に花が咲いている小さな丘だった。何かが起きれば、必ず二人できていた秘密の場所。周りを見渡すと、すぐに人影が見えた。

「……おいつ! 何して」

そこで、晴樹は足を止める。よく耳を澄ますと、菜緒は何かをぶつぶつと呟きながら花を食べていた。

「……おいしい。おいしい、なあ」

晴樹はそっと菜緒に近づく。屈んで顔を覗き込むと、彼女は花を食べながら目に涙を溜めていた。

菜緒は動きをとめ、地面にぼたぼたと水玉を作っていく。

「なんで……?」

弱々しい声が零れた。花を持つ手が小刻みに震えている。晴樹は、何も言わずにただただ菜緒の背中を優しく撫で続けた。

「……」

「なんで、俺がお前に手を上げたかわかるか」

菜緒は目を下に逸らした。しかし、晴樹によつてそれは阻止される。

「俺さ。菜緒の病気について、調べてみたんだ」

「……」

「お前のそれは、花食症っていうんだって。花を食べる病、科学的に証明されていない病だ。おとき話みたいだけど、事実、お前はそれにかかつてる」

「……………」

「しかも、その病気は、症状が進行していくと、自分の体から花が咲くんذار? 知らなかったし、信じたくなかつたよ。お前の『それ』を見るまでは」

「え……?」

何が、という前に晴樹は菜緒の目元を拭った。そして、「ほら」と彼が拭いた手を見れば、何かの花びらが数枚、手のひらにあった。「その病気は進行し終わつたら、自分が花になるんだ。つまりお前、遅かれ早かれ、もう死ぬつてことだろ?」

菜緒は何も言わず、静かに唇を噛み締めている。どうやらそれは凶星のようだ。

「俺は、菜緒に死んでほしくない。絶対に治してやるから。だからもう、死ぬなんてこと言うな」

今にも死にそうな彼女に、晴樹は腕を回した。菜緒は静かに、彼の背中を握りしめた。

5

菜緒は、晴樹に手を引かれながら家に帰ってきた。その姿は見るに耐えられないもので、両親も妹も、怒るに怒れなかった。

「菜緒、無心に花を食べてました。多分、相当な飢餓状態なので、たくさん食べさせてあげてください」

晴樹のその一言が、家族の溝を埋めるきっかけだった。

それから菜緒は、久しぶりの食事にありついた。妹と喧嘩してから、まともにごはんも食べていなかったのだ。チラリと妹を見れば、彼女も少しバツが悪そうにこちらを見ていた。

「……前、あんなこと言ってごめん。思ってもないこと、言っちゃった」

「うん。……私も、ごめんね」

妹は、小さな声で「お姉ちゃんは、変じゃないよ」とはにかんだ。

そして、時間が許す限り、家族で多くの思い出を作った。行ったことのない場所に赴き、たくさんのお土産を作り上げ、たくさんのお写真を撮った。

しかし、その時間は長くは続かなかった。学校が創立記念日で休校、両親は働きに出ていて、妹は学校に行っていた日の事だった。

「……そんな」

「また、少しだけ。希望を見せてくれて、ありがとう。……晴樹には、感謝、しても、仕切れない、な」

彼女は口角を上げた。彼女の笑う姿に、思わず涙腺が緩む。

しかし段々と彼女の発する言葉が途切れ途切れになっていることに気付き、彼女の死がもうすぐ近くまで来ていることをじわじわと実感していく。

「お母さんにも、お父さんにも、紗良にも。悪いこと、しちゃった、なあ」

「は？ 何最期の言葉みたいに言ってるんだよ。なあ」

「私が、普通、だった、ら」

「やめろよ。お前の病氣、俺が治すって言っただろうが。だから生きててくれよ。絶対、絶対治すから」

ビン底の眼鏡は外され、彼の目からは大粒の涙が落ちた。彼女の頬に。パパタと伝う。菜緒は手を伸ばし、彼の頬に触れた。その手は枝のように痩せ細っており、腕の所々に花が咲き乱れている。

「……ははっ。綺麗な、カオ」

すぐく綺麗、と彼女は晴樹の顔を目に焼き付けるように頬を撫でる。

「晴樹。お母さん、たちに。伝言、お願い」

「いやだっ……お前が言え！ 生きてそれを言えよ！ 死ぬなん

菜緒は晴樹を呼び出し、あの丘に行こうと誘った。彼女から何かを誘うなんて久しぶりだ、と思つて二つ返事で了承した。丘につけば、あたり一面にコスモスが咲いていた。季節によって咲く花を変えるこの丘は、いつ来ても飽きない。そこで菜緒はあるお願いをした。

「ねえ、晴樹。膝枕、して欲しいんだけど」

だめかな、とおねだりする彼女に、晴樹は小さく頷いて地面に座った。菜緒はそれを見て、晴樹の膝に頭を乗せた。筋肉が硬いため、眠るのには適していない。それでも菜緒は何も言わず、彼の膝に身を委ねた。

「……私さ。多分、今日死ぬんだ」

「……は？」

突然言われた言葉に、晴樹は困惑した。

今日死ぬ？ どうして、なんで。疑問は次から次へと浮かんで消えていく。その様子を見かねた菜緒は、さらに続ける。

「ずっと花食べてるとわかる。ああ、この日に私死ぬんだって、そう感じた」

「……なに、言ってるんだよ。お前が、死ぬ？ 冗談やめてくれよ」

「冗談じゃ、ないよ」

信じなくなかった。死ぬなんて、思いたくなかった。しかし彼女の目は、本気だった。

「私、晴樹には感謝してる。いっぱい、迷惑かけて、ごめんね」

てこと許さねえからな！」

子供のように駄々をこねる。完璧超人が年相応に感情を曝け出しているのを見て、菜緒は可笑しそうに笑った。

そういうえば、笑うなんて久しぶりだ。しかもそれが、こいつの駄々か。

それも悪くない、と菜緒は顔を落としていく。

「紗良のこと、よろしく、ね。それと……大、好き。愛して、て」

「やめろ……っ」

愛してた。

彼女の口からは聞くことはなく、菜緒は散っていった。

6

「菜緒、来たよ」

季節は秋、晴樹は加工された御影石の前にしゃがむ。目の前には、『花村家乃墓』と彫刻されている。晴樹の特徴的なあのビン底眼鏡はもう姿を消し、凛々しい顔立ちが露わになっていた。そしてその手には、白菊やシオンの花が入った花束が握られていた。掃除をして、線香を焚いて、手を合わせる。たった二、三分が彼の時間を遅くさせた。

「……また来るから」

彼にとつてお決まりの言葉を投げる。微笑んでも、彼女の笑顔はもう見れないと思うと、ひどく悲しくなる。

びゅう、と秋風が頬を撫でた。喉が乾燥して、晴樹は一つ咳払いをする。

「けほっ」

彼の口から、一輪のシオンの花が零れた。

素敵な装い

杜
文城

「お父さん、お母さん、今までありがとう」
 アーシャは冷たくなった二人の頬をサラリと撫で、その顔に布をかける。棺ごと魔法で浮かせて墓地まで運び、用意されていた墓穴に丁寧に落とすと、周りからすすり泣きが聞こえた。
 優しく、子思いな夫婦だった。近所付き合ひも多く、村の中でも好かれていた。

「本当にいいのかい」

「ええ、いいんです」

心配するようなそんな言葉に、微笑んで返す。声をかけた男は顔くと、祈りを捧げてそっと火をつけた。

本当はただの土葬でよかったのだが、アーシャが火葬を望んだのだ。

魔法によってつけられたその炎は、棺を燃やすことなく中の二人だけを轟々と焼いていく。うねりをあげる炎に、彼は二人と過ごした日々を思い出していた。彼らは幸せだっただろうか。ふとそんなことを考える。

自分は幸せだった。ずっと欲しかった愛情というものを手に入れることができて、二人という存在に愛されることができて、幸せだった、はず。でも……。

どれほど考えていたのだろう、答えの出ることのないその思考は焼き上がり告げる声に止められた。

墓穴の淵にしゃがみこんだアーシャはそっと手を伸ばし、二人の

たけれど、所詮は旅人であることに変わりはない。ごめん、ごめんよ」

そっとつぶやいた赦しを乞うようなそれは、言った本人もびつくりする程か細く頼りない、寂しいものだった。

*

旅人には姿がない。

顔を隠しているとか、闇夜に潜み行動する為誰もその姿を見ることがない……と言うことではなく、文字通り旅人を個人たらしめる姿を持たないのだ。

生まれた時からそうであった。

ふと意識が芽生え己の存在を認識した時、それはそこに何かがあるかわかるだけの何かだった。母もなく、父もなく、もちろん名もなく、己の姿も種族すらもわからない。あるのはやけにハッキリとした意識と自我。そして、人に擬態し紛れ込むという、本能的に理解した生き方だけだった。

擬態すると言っても何にでも擬態できるわけではなく、見たことのある相手でなければ解像度や精密さにかけてしまうのだけだ。ども。

そんなそれが旅に出るといふ選択をするのはそう遅くなかった。より多くの人と触れ合うため、自分が何なのかを知るため、それ

骨を一欠片ずつ取る。手にした拍子にポロ、と破片を落としたそれはとても軽く、脆い。

ポケットから取り出したハンカチに優しく包み、そっと手縫いのお守り袋に入れた。それは、夫婦が生前アーシャのために、よく病に伏せる我が子のために二人で作ったものだった。

「旅に出ようと思うんです」

お守り袋を大事そうに胸に抱いて、アーシャは言った。唐突なその発言に周りの人々が驚き、戸惑う声が聞こえる。そんなに急がなくなつて、どうして旅なんか。

次々かけられる声。それもそうだろう、アーシャは小さい頃から病気がちな子だった。それに両親も亡くなつたばかりで、心配になるのは当たり前だ。

「僕は旅人だから」

答えになつていないそれに、村人たちは首を傾げた。アーシャはこの村で生まれ、この村で育つた。旅人だったことなど一度もないのだ。怪訝さと戸惑いを露わにする人々。中には、親を亡くしたショックで混乱しているのでは、などと言っている人もいる。そんな様子を尻目に、アーシャはそっと棺に蓋をした。

「スイ、セン。実はね、僕は旅人なんだ。君達のアーシャになつ

は旅人となつた。時には女、時には男に化け、行商や旅芸人に混ざつたこともある。姿を変えられるというのは便利で、行く先出会う人ごとに馴染みやすい姿に変えておくと、大体が円滑に進むというものだ。

一つ前に訪れた国でもそうだった。

若葉の国。若さ至上主義国家で、中でも少年少女の年頃が一番神聖で美しいとされ、大切にされている。そんな国を訪れた時、旅人は少年に擬態していた。

初めてとる姿なので少しの懸念もあったが、その国を訪れるにあつてはそうした方が何かと都合が良いと思つたからだ。

そしてそれは大いに正解で、国を訪れてから去るまで、一人旅をしているという少年は何かと気かけられた。何一つ不自由なく過ごす事ができたのでは無いだろうかと思う。今まで旅をしてきた中で、一番可愛がられたと言つても過言ではない。

「また来いよな、坊主。達者でな」

一週間ほど滞在し国を出る日、お世話になつた宿屋のおじさんはそう言つて饞別をたんと持たせてくれた。そんな風に送り出されるのは初めての経験だった。今までは大体が疲れにくく力もあるという理由で大人の男などの姿ばかりだったのだけれど、たまには少年の姿もいいなと思つた。

(ま、この国の国民性ってやつもあつたのだろうけど)

旅を始めたばかりの頃に比べて、人というものがわかってきた気がする。

旅人は饑別の中に入っていた焼き菓子のをさくさくと頬張りながらそんなことを考えた。風が涼しく、天気も良い。

次はどこに行こうか。穏やかな旅路だった。

……はずなのだけれども。

「余所者、しかも人間なんぞ何を考えているかわからない。探して捕まえるのだ。反抗するようなら死なない程度に痛めつけるくらい構わない」

男が大声で叫んだそんな指示を聞いた旅人は、見つかったしまわらないように細心の注意を払ってその場を離れ、深い茂みに隠れた。森を抜けようとして、うっかり獣人の集落に足を踏み入れてしまったのだ。

獣人。最近ではまだマシになって来たものの昔はひどく迫害されていた、人型でありながら獣の特徴も持ち合わせている種族である。身体能力にも獣の特徴が強くており、総じて人間よりも運動神経が良い。かつての名残か閉鎖的な集落で暮らしている事が多く、人間への敵対心は今尚強い。

そんな獣人、しかも本気で自分を狩ろうと狙ってくる相手に、無事に森から抜け出す術を考えなければならぬ。どうしたもの

て行くことになる。荷物は自分と違い見た目があるから。

うんうんと頭を捻り考えるものの、いい案は思い浮かばない。どうしよう、どうしよう、次第に脳内を占めていく焦りが旅人の思考を鈍らせていく。

そうしている間にも追手が近づいて来ているのだ。ガサゴソと音が近付いてくるのがわかった。背に腹は変えられない。少しでも時間を稼ぐために、目眩し程度に小さな魔法だけでも使ってみようか、と考えたその時。

ぐい、と後ろから腕を引かれた。旅人は思わず声をあげそうになったが、静かにとでもいうように口元を抑えられ踏みとどまる。相手は若い男だった。頭上のピンと立つ耳を見るに獣人、この集落の住人で間違いはない。

男はそのまま旅人の腕を引いてぐいぐいと歩いていく。追手が来ている方とは反対の方向へ進んでいるようだ。引き渡すわけではないのか。安堵するも、真意も分からぬ、ただ無言に自分の手を引き歩くこの男を信じてしまっているものだろうか。旅人は躊躇した。しかししっかりと腕を掴まれてしまっている今、振り解くのも容易ではないし……。

そんなことを考えながらも腕を引かれるままに着いていくとしばらくして、二人は木々が開けた空間に出た。一軒の家と小さな庭があり、少しの野菜なども植えられている。どうやら個人の敷地らしい。

かと旅人は頭を抱えた。

少年の姿の旅人では、純粋な追いかけてこでは負けてしまうことは火を見るよりも明らかである。

逃げ始めてどのくらいが経っただろうか、旅人の体力も限界に近づいてきていた。それもそうだろう。足場の安定しない森の中を、極力音を立てず気配を悟られぬように気をつけながら駆け回ったのだ。今までの旅で培った技術のなせる技である。

「見つかったか？」

「いや、でもこの辺りから嗅ぎ慣れない匂いがする」

しかし今回は追手が悪かった。隠れている近くで聞こえた声に、旅人はきゅっと身を縮こめた。いくら逃げ回ってもすぐに大まかな位置を探り当てられてしまうのだ。

一応自分は魔法が使える。もちろん攻撃魔法もだ。

しかし、兵士などではないにしろ一般的な人よりもはるかに身体能力に優れる獣人。下手に反抗や攻撃して向こうの警戒を煽るようなことは避けたい。

ならば今すぐに獣人に擬態して誤魔化すか。いや、それも不味い。このタイミングで見知らぬ獣人が出てきたら、それもそれでは不自然だ。

いつぞ擬態そのものを解くか。でもそうすると荷物は全て捨て

「入って」

ここに来て初めて男が言葉を発した。家の扉を開けそつけないそう言う男に、旅人は少しの警戒を見せる。家に連れ込まれてしまったらそれこそ逃げるのは容易では無いかもれない。やはり逃げるべきだったのだろうか。

扉を支えたままじつとこちらを見つめる男を旅人はじつと見つめ返す。見定めようとしているのだろう。しばらくの間はどちらも何も言い出せない様な微妙な空気が流れていた。

しかし、それは第三者の介入によって崩された。

「もう、そんな言い方をしたら怖いでしょう。旅人さん……でいいかしら？ ごめんなさいね、この人不器用なの。貴方に危害を加えるつもりはないわ、ただ、他の者たちから隠れるのに私達の家を使って貰えば見つかりにくいのではないかと思つて」

その声の主は扉から顔をだしてこちらを見ていた。女だ。男と同じような形の耳をしている。親子か兄妹か……、いや、夫婦だろうか。こちらを気遣うようなその様子に旅人は自分の警戒心が和らいだのを感じた。単純だと思われてしまうかもしれないが、それ程までに女の話口が優しくかったのである。

「いらっしやいな、お茶を入れましょうね」

そう言つて家の中に戻っていく女。旅人はそつと、恐る恐ると言う様子ではあるが一步踏み出した。続くような形で男も家に入り、扉を閉める。そしてそのまま奥の部屋に行つてしまった。女

もどこか違う部屋に行ってしまったのだろうか。どうすればいいのかわからない旅人は、入り口付近に立ったままぐるりと室内を見回してみる。木造りの家具が多い、シンプルだが何処か可愛らしい印象のある家だ。

そのままほけつと天井を見ていると、くすりと笑う声が聞こえた。お盆を持って女が戻ってきていた。カップとティーポット、そしてタオルをのせたそれをテーブルに置くくと女は手招きをする。おすおすと近寄ると、彼女はタオルを手にとった。

「顔に土まですつけちゃって、疲れたでしょう」

*

「なるほど、迷い込んでしまっただけだったのね」

ここに辿り着いた経緯を説明した旅人に、彼女はなるほど、といった風に頷きそう言った。暖かく濡れたタオルで頬に付いた土汚れを優しく拭かれ、さらに暖かいお茶とビスケットを差し出された旅人は、女の柔和な態度に完璧に絆され警戒心を解いていた。

あの後まずは自己紹介を話し出した女、スイに続いていつの間にか戻ってきていた男、こちらはセンと名乗った。旅人を匿う目的で連れてきたと言う。曰く、いくら人間だろうとまだ小さな少年を見捨てては置けないと。

「ね、うちに居たら闇雲に逃げ回るよりもいいでしょう？」

「無いよ、僕は生まれてこの方旅人だから」

「でもずっと旅人さん呼びでは不便よね……、うーん、どうしようかしら」

「何か私達で呼び方を考えてもいいかな？」

旅人は今までこんなにも近しく他の人と関わったことがなかった。それゆえに名前が無いことで困った事もなかった。旅人、旅人さん、それでこと済んでいたのだ。

すでに考え始めてしまっている二人には申し訳ないけれど呼び方は旅人のままで勘弁してもらおう。きつとここで新たに呼び方をもらってもすぐに反応できる気がしないし、はつきり言ってしまうえば今後使うこともないだろう。そうなる何だか勿体無いし、それこそ申し訳ない。

そう思った旅人は、呼び方についての申し出は断ってしまおうと思いい口を開いた。が、スイの声に遮られてしまう。

「ヴェーレ、ヴェーレなんてどうかしら！ 遠い国の言葉で生きるって意味なの。旅をしていると大変なことも、危険も、たくさんあったでしょう。でも、貴方は今生きている。そして、これからも病なく、健やかに生きていけるように」

そう言って笑いかけてくるスイに、旅人は固まった。

「ヴェーレ……？」

想像していた呼び方と違うそれに驚いたのだ。旅人が想像していた呼び方はニックネームの様なもので、言ってしまうと記号や

そう言って笑うスイと、不器用に笑顔を作って見せたセンに、旅人は気を張るのを辞めた。何だか大丈夫なような気がしたのだ。そして、自分がここに至るまでの経緯を話した。もちろん自分の出生の事は濁した、当たり障り無い経緯だけだけれど。

「やはりしばらくうちに居なさい、もしバレてしまっても私達がなんとかする」

黙って話を聞いていたセンがそう言う。一通り話し終え、両手で持ったカップの中で揺れるお茶を見ていた旅人はちらりと顔を上げた。

「しばらく……？」

旅人にはよく分からなかった。一日、二日匿ってもらうくらいならば……と思っていたのだけれど。しばらくとはどのくらいなのだろう、何日間くらいだろう。

困惑したような様子を見せる旅人に、スイが言う。

「旅もいいけれど、休息も必要よ。旅人ではなく一人の子供として過ごす機会もね」

やはりよく分からない。分からないけれど、何故か小さく頷いてしまう自分がいた。この二人の優しきにもう少し触れていたい気がしてしまった。

「旅人さん、お名前は？」

番号のような、誰を指しているのかが分かる最低限のものだった。しかしこれはどうだろう。もはや名前だ。スイが自分のために考えてくれた意味のある、気持ちのこもった名前。

「スイ、彼が困ってしまうだろう。気が早すぎだよ」

目をパチクリさせたまま動かなくなってしまった旅人をみてセンがそう言う声が聞こえたが、旅人はもはやそんなことどうでも良かった。

今まで長く旅をしてきた。誰でもないただの旅人として、自分が何なのかもわからぬままに。

道中多くの人と触れ合い、生き物を知った。どこから、何から生まれたのかすら分からない自分と違い、生き物は普通母から生まれること。両親がいると言うこと。周りと知り合い、友達を作り、遊び、触れ合いながら成長していくこと。たくさん学んだ。

旅人自身も、成長はしたと思う。友人もできたし、一人旅をする自分を気にかけてくれる者もいた。けれど、それは本当に初めのことだったのだ。

何と言葉に表せばいいのか旅人には分からない。分からないのだが、その名前を聞いた瞬間、これだと思った。自分が知らず知らずのうちに求めていたもの、足りなかったもの。自分だけの、自分が自分である証。

名前がなくて困ったことはなかった。欲しいとも、自分でつけようとも思わなかった。しかしそれは違ったのだと知った。自分

から頼むではなく、あくまでも人から。旅人としてではなく、僕に。僕を。

「大丈夫かい？」

「ごめんなさいね、私少しはしやぎすぎってしまったって……」

違う、嫌なわけではない。違うのだ。

旅人は言葉を発そうとするが、うまく声が出ない。何と言えはいいのだろうか。

「呼び方、無理にとは言わないわ。少しいきなり過ぎたものね」

「そうだ、無難にタビくんとかはどうだろう。今まで旅人と呼ばれていたのなら、そっちの方が受け入れやすいかな？」

そうセンが言う。

違う。嫌だ。タビと言う呼称が嫌なのではないが、でも、違うのだ。それが最初に聞かされた候補ならば旅人も頷いていただろう。しかし一度意味のある名前を聞かされてしまったから、自分の求めるものに気がついてしまったから。

「あ！……の、僕。ヴェーレって、呼んで欲しいです」

*

朝だ。窓から差し込む日差しで目が覚めた。もそもそとベッド

に、スイは笑いながら濡れたタオルを持ってきてくれる。

タオルを見つめたまま動かないヴェーレの代わりに、彼女は優しく顔を拭いてくれた。まるであの日みたいだ。ヴェーレはこの家に連れてこられた日を思い出していた。

まだお世話になって数日しか経っていないのに、何だか懐かしいような気持ちになった。

「ふふ、あの時と同じね。さ、おやつにスコーンを焼いたの、チョコとジャムもあるわよ。ほらほら、手を洗ってらっしゃいな。」

スイも同じことを考えていたのか。そう思うと、ヴェーレは何だかむず痒い気持ちになった。

そんな風にして過ぎていく毎日。一週間などあつという間に過ぎていき、二週間、三週間もすぐ過ぎた。しばらく匿ってもらおうと言う話だったのにズルズルと居座り、ずっとここに居たいときえ思ってしまったている。

スイの家事の手伝いをし、センと一緒に畑や庭をいじる。三人でおやつを食べたり、遊んだりもした。笑い、甘い、褒められる。ヴェーレは、今までで一番幸せな日々を過ごしていた。

日が経つに連れて二人への信頼感が増していき、ヴェーレはどんどん二人のことを好きになっていく。スイもセンも自分を、まるで子供が出来たみたいと言って可愛がってくれる。それが彼には、とても嬉しくて仕方がなかったのだ。自分にも親がいればこ

から起き上がり、寝巻きから着替える。まだ少し眠い目を擦りながら彼がリビングに出ると、キッチンに立っていたスイが声をかけた。

「おはようヴェーレ。人数分のカトラリーをだしておいてくれな

いかしら。あとグラスも」

「はい。任せてよ、スイ」

旅人、改めヴェーレがスイとセンの家にお世話になり始めて一週間程が経った。宿屋とは違い、人様の家にお邪魔するという点で最初は遠慮がちだった彼も、このしばらくの間でとても馴染んだ。お互いに距離が縮まったと言うべきだろうか。

三日目までは半はお客人として扱われていたヴェーレだったが、四日目に家事の手伝いを頼まれた。洗い終わったお皿を拭いてほしいと言う簡単なものだったが、人からお手伝い、しかも家事のお手伝いを頼まれるというのはヴェーレにとって初めてのことである。

流しに立つスイと、その隣に並び渡される濡れた食器をどこかソワソワした様子で拭いていくヴェーレ。そんな二人の姿を、センは微笑ましいものを見るような、優しい目で眺めていた。

五日目は、センに習いながら畑弄りをしていた。と言っても他の住人に見つかるわけにはいかないので短時間ではあったけれど、土に汚れた手で触ったのか、顔を土まみれにして帰ってきた二人

んな感じなのだろうか、そんなことを考えるようになった。さらには、お願いすればもしかすると僕の親になってくれるかもしれない、とも思うようになった。

初めて与えられた、旅人である自分へ向けられるようなものではない感情の一つ一つは、ヴェーレの心にしみていく。ヴェーレ個人へと与えられるとても穏やかで、広い慈しみ。それは彼を魅了するには十分すぎるものであった。

それだけ二人を好いており、懐いたヴェーレだが、最近一つ気にかかると事があった。

それは、ここだけは入ってはいけないと言われている部屋のことで。鍵のかかっているその部屋だけは、決して近付かないようにと初めの頃から言い聞かされている。

最初は、ヴェーレもそれを気にすることはなかった。自分は何謂居候のようなものだし、言えないことや関わらせたくない事の一つや二つあるのだと分かっていたから。この頃の彼ならばきつと例の部屋の鍵が、扉が開いていようと気かけすらしなかっただろう。

しかし、スイとセンが自分を我が子のように思うと言ってくれた今、彼の心に引掛かりが生まれてしまったのだ。我が子のよう

に思ってくれているならば、何故隠し事をするのだろう。自分のことを信頼していないからなのだろうか、と。

そんなことを思ったヴェーレは実は聞いてみたことがある。二人と過ごすようになって二週間と少し程の頃に、一度だけ。あの部屋は何なのか、何故入ってはだめなのかと。すると、二人ともすぐに取り繕ったものの、スイは酷く苦しそうな顔をしたし、センは泣きそうな顔をした。そんな顔をさせたかったわけではないヴェーレはとても慌てて、もう聞かないからと言った。その日はそれ以降少しもこちなくて、気まずい空気が流れてしまった。だからもうその話には触れまいと思っていた。気にしないようにしようとしていたのだけれど。

最近の二人の様子がおかしいので、ヴェーレはまたどうしても気になりだしてしまったのだ。

カレンダーを見て、例の部屋を見て、悩ましげに考え込むような仕草をするスイとセン。そしてそのあとは決まって自分と目を合わせようとしないのだ。二人揃って同じようなことをするのは、きつと二人して隠している事があるのだろう。しかもきつと、自分には都合の悪いこと。ヴェーレにはそうとしか考えられなかった。

そうでなければ二人が自分と目を合わせてくれないなんてあるはずがない。だって、自分は二人から実の子のように思われているのだから。思われているはずなのだから。

*

と考えるととても怖い。二人に嫌われるのも悲しませるのも嫌だ。そうは思っていないでも、一度歩を進めた足は止まらない。大丈夫、きつと謝ればスイもセンも許してくれるはず。悪い考えを振り切る様に首を横に振り、物音を立てない様ににじり寄る様にして歩を進める。扉はもう目と鼻の先、ヴェーレは緊張からなのか自分の手が震えていることに気が付いた。

「……しか方法………決め………もう……ない」

一歩近づけば小さく声が聞こえる。これはセンの声だろうか。「でも………そう………あんなに………ないわ………私には」

もう一歩近づくと、今度はスイの声。二人で何を話しているのだろうか。もう少しで聞こえる盗み聞きがバレてしまわないようにそつともう一歩近づく。

「僕も辛いよ、でも………為には、あの……人を身代わりに………いいんだ。わかっているけれど、でも」

先程よりもはつきりとしたセンの声が聞こえた。あと少し、あと一歩。ヴェーレはほとんど扉に添う様なところまで来た。

「どうしたものか、早く決断してしまわないともう時間がない」「助けてあげたいと心から思っている。思っているのよ。でも………」

センの声も、スイの声も、はつきりと聞こえる。

決断とは、助けるとは一体何のことだろう。ヴェーレは首を傾

その日、ヴェーレは何故だかうまく寝付けず真夜中に目が覚めた。何だかそわそわしてしまつて。羊を数えてみたり、ひたすらに目を瞑つてみたり、一度ストレッチをしてみたり。それでも再度眠りにつくことが出来ない。

お水を飲む、そしてまた横になろう。そう思ったヴェーレはベッドから起き上がる。窓の外を見るとどつぷりと暗い。森の夜の暗さには、少しの明るさなどは飲まれてしまいそんな不気味さがあつた。

なるだけ音を立てぬようにして部屋から出る。夜、勝手にキッチンへ行き水を飲む、なんてことを遠慮する事なくできる程にもうヴェーレはこの家に慣れていた。最初の頃からは想像できないな、そんな事を考えながらキッチンへと向かう。

明かりがついていた。自分以外寝静まつたであろうこの家中で、リビングでもキッチンでも、スイとセンの部屋でもない。例の、入つてはいけない鍵のかかっている部屋。その部屋だけ明かりが付き、少し開いた扉から細く光が漏れている。

ヴェーレは誘われるようにしてそちらへと進路を変え、歩き出した。部屋の中が気になっているのは確かだ。しかし心のどこかは躊躇しているのか、その足取りはどこかだもだとしていておぼつかない。

もし中を覗いたことがバレて怒られたらどうしよう。ヴェーレにはそんな不安があつた。それでも二人に嫌われてしまつたら

げる。ただ、二人がとても悩んでいると言うことだけは声色からわかつた。こんな時間に話し合う程には大きな事柄なのだろう。

その時彼はふと気が付いた。この悩みはもしかすると自分のことかもしれない、と。カレンダーや僕を見るのは、僕がここにしばらくお世話になる、というそのしばらくの期間について考えていたからで、悲しそうな顔をするのはこの家を出ていくのが寂しいからなのではないか。だって二人は自分のことを我が子のように可愛がっているのだから。

あまりにも自分に都合よく解釈したヴェーレだったが、そのひらめきに自分の願望が詰まっているのも理解しているのだ。でも、そう考えると何だか気分が軽くなった。部屋の事は、自分の気にすぎだったのかな。と、そう思えた。

大好きな二人が悩んでいるのは自分も辛い。明日、さりげなく聞いてみよう。自分で何か力になれることがあれば、と。そんなことを考え、部屋を覗こうとしていた事を今更ながら少し反省した。もう自室に帰ろう。

「でもだつてと言つたところで、アーシャの病を治す為にはあの旅人に身代わりとして病を背負ってもらうしかないんだ……っ。僕たちは決めなければいけない、あの旅人をとるか実の子を取るかを。心を鬼にして考えるんだ」

それはヴェーレが踵を返したのと同じタイミングだった。一際大きなセンの声。何と言った。今、旅人と言ったか。旅人を身代わりに、と。アーシャ、実の子、旅人、身代わり。ヴェーレは己の脳がその言葉を理解しようとすることを拒むのを感じた。だつて言葉をそのまま受け取るとしたら二人には実の子がいて、それがアーシャで、そして……。

信じたくない気持ちと、失望が胸に湧く。話の全貌を知らずとも察せしてしまうその内容に、強く拳を握った。いや、でもまだそうと決まったわけでは無い。一度自室に戻って落ち着こう。ヴェーレは今度こそ部屋に帰ろうとした。これ以上聞いてしまうといけないと、心が唸っていた。

「分かっている、分かっているわ。ヴェーレを、あの旅人さんをその為に貴方がわざわざ連れてきてくれたんだもの、それはちゃんと分かっているの」

しかし追い討ちのようにそれを聞いた時、もうだめだった。ヴェーレは己の心に穴が開くのを、奈落の底に突き落とされる、という感覚を感じた。部屋の扉を開ける。音を立てぬようにそつと、などない。ただ力任せに、叩きつけるように開けた。

「つづ、ヴェーレ。どうしてここに」
慌てたようにスイが言う。センは驚きすぎたのか、口を開いた

心を酷く弄ばれたように感じた。二人のことを好き慕っていた自分を見て、計画通りとほくそ笑んでいたのだろうか。我が子の様に思っているとわれ喜ぶ自分を、二人は一体どう思いながら見ていたんだ。

「よかつたな、実の子の身代わり役として連れてきた奴が何も知らず自分たちに懐いて。警戒して逃げ出されたら困るものね、そりゃあ優しくするか。すつかり騙されたよ」

自分でも驚くほど冷たい言葉が飛び出る。

「で、何だつたつ。実の子の病気を治すために僕にそれを背負わせるって言うていたつ」

スイとセンが何かを言っている。しかしそれはヴェーレには聞こえていない。彼には今、己の感情しか見えていないのだ。

「どうして優しくした。どうして子の様に接した。身代わりにする為に連れてきたと言うなら一思いに、連れてきた瞬間に拘束でもなんでもすれば良かったんだ。なんで、何でだよなんでどうして、なあ」

ヴェーレの頬を涙が伝った。そして、理解した。

「僕がアーシャになれば、二人は今度こそ本当に僕を愛してくれるの？」

成り代われればいいのだ。

ものの声を出さずただ空気を食んでいるだけだった。

そんな二人チラリと見た後、ヴェーレはぐるりと室内を見回す。小さな机に本棚、子供が遊ぶようなおもちゃ、そして部屋の真ん中にはベッドが置いてあり、誰かが寝ているのがわかった。頭上の耳と顔を見れば分かる、これが二人の子だ。

自分に与えられた愛情は全て偽物で、本当はこの子に向けられるはずのものだったのか。そう思うとあまりに憎らしく、妬ましい。二人は自分を我が子のように言うてくれた。しかしそれは全て、本当の我が子の為の生贄を繋ぎ止める為の嘘だったのだ。怒りと、悲しさと、失望と、悔しさと、色々な感情がヴェーレを蝕んでいく。

俯いたまま言葉を発さないヴェーレに、スイとセンは戸惑いと焦りを隠しきれない表情を向ける。

「そう、その子がアーシャ？」

しばらくして、絞り出すかの様に発したその言葉は淡々としていた。それに二人は目を見開き、ハツとしてヴェーレから隠すようにアーシャの横たわるベッドの前に立つ。それが酷く腹立たしかった。自分には大きな嘘を付いて騙しておいて、少しこちらが冷たくしただけで何をそんなに驚くことがあるのだろうか。そんなに自分から隠したいのか、大切な我が子を。

「ねえ、貴方たちにとってヴェーレは何だったの？」

姿を持たない己の生き方は他の生き物に擬態することだと旅人は思っていた。しかしそれは違つと、彼は今気が付いた。擬態は本当の力のおまけ、上澄みのようなものだった。

ここに来て初めて理解したそれは成り代わること。対象を殺し、取り込み、そして対象自身になる。そうすることで姿を手に入れる。それが何の生き物かも分からぬ、姿を持たないものの正しい生き方だったのだ。

そして自分として愛して欲しいなんて思い、そんな物そもそもが旅人の種族の生き方から外れたものだったと気付いた旅人は、ただ渴いた笑いをこぼすしかない。やつと自分自身を見て、愛してくれる人を見つけたと思つたらそれは嘘。しかも、そう願つた事自体が間違いだなんて。

奈落の底に落とされた気持ち、そう思ったが奈落の底など初めから無かつた。いや、違う、自分は元から底にいたのだ。過ぎた願いを抱き暗い穴底から這い上がるうとして失敗しただけ。己という物を持たない愚かな生き物が、日の目を見ることなんてあり得なかつた。

それこそ自分以外に成り代わらない限り。

そう思った時にはもう行動に移していた。ベッドに近付くと、そばにあった椅子の脚を持って思い切り床に叩きつける。荒く折れたそれは鋭いとは言えないかもしれないが、刺さると流血は免

れないだろう。脚だった木片を力を込めやすい様に握り直した旅人は、眠るアーシャに戸惑い無く振り下ろした。

うわあ、だかきやあ、だか、そんな叫びを上げたスイとセンが咄嗟にベッドと旅人の間に入ってアーシャを庇う。それは目標であるアーシャには届かずセンの腕に傷を負わせただけだった。旅人はそれに酷く腹が立った。

「親子愛ってやつ？ はは、当て付けかよ」

もう一度振り下ろす。またセンに阻まれる。振り下ろす、振り下ろす、振り下ろす。一心不乱にただ振るったそれは一度たりともアーシャを傷つける事なく、全てセンが受けた。痛いだろうに、歯を食いしばって我が子を守る姿に酷く不快感を覚える。

何なんだ一体、嫌がらせか。自分にあんな仕打ちをしておいてここに来てまで。旅人はもう我慢ならなかった。

*

その後の事はもう何も覚えていない。旅人がふと我に帰った時に目に入ったのは、血まみれになりながらも傷一つない自分。そして、自分を抱きしめたまま息絶えたスイとセンだった。二人の体は耳がもげたり腕がもげたり、と損傷が激しく見れたものではない。脈を囫と死んでいるだろう。

自分を騙して傷付けて、我が子を守ろうとしたスイとセン。ア

ましさだけは未だ残っていた。二人の本当の愛情を一身に受けたお前が羨ましくてたまらない。

そう思った旅人が、せめてもの三人への手向けとして花でも摘んでこよう。行ってくるね、とスイとセンの額にそつとキスを落とした、その時。

センの手がピクリと動いた気がした。旅人は驚いて動きを止める。

「せ、セン……？」

恐る恐る声をかける。う、だかうぐ、だか、そんな呻きをあげセンが目を開けた。

「うえ……レ、つ」

旅人は自分で起こした惨状の中、これだけの傷を負ってなお命のあったセンに思わず抱き着きそうになって、その傷の深さに踏みとどまった。まさか生きているなんて。嬉しくて嬉しくて、泣いた。

センは苦しうにしながらも上体を起こした。そしてスイに手を伸ばすと、肩を揺すった。腕がもげた傷口から血が溢れる。何を、と思ったその時、スイも目を開いた。旅人は信じられなかった。二人そろって生きているなんて。

起き上がった二人は、血濡れの顔で微笑んでヴェーレに手を伸ばす。ヴェーレは、身動きを取るたびにどこかしらから血を流す二人を慌てて支えた。

ーシャなんかを庇うからだ。そんなことを思いながら、旅人は自分にまとわりついている腕を雑に引き剥がそうとした。こんなに傷付いてまで守りたかったのか。二人にとって、子供とはそんなにも大切な存在だったのだろうか。

涙がポロポロと溢れる。いきなりのことに旅人は驚いて目元に手を当てる。止まらない。自分を利用してしてきた二人なのに、自分でしてしまった事なのに。その痛ましい姿が、死んでしまったという事実が苦しくなってしまう。

たとえそれが嘘だったとしても、二人と過ごした日々楽しさと幸せを感じていたのは事実だった。彼らに愛されたいと思ったのも。自分の本能を思い出し、それが取るべき生き方から外れた思いだったと知っても、それでも二人に愛されたかと思つた事は間違いでも嘘でもなかった。静かに泣いていたのが、次第に嗚咽が漏れる。二人が好きで、二人に好かれたかっただ。雑になんて扱えるはずがなかった。

旅人はこれ以上傷付けてしまわないように二人の手をそつと解くと、優しく横たえた。二人の頬を撫でる。二人に撫でられるのが好きだった。手伝いをした時、一緒に過ごしている時、ふとした時に撫でてくれる温かい手が。

旅人は次に、ベッドから転げ落ちる形で死んでいるアーシャを抱えてベッドに寝かせた。スイとセンが死んでしまった今、もう成り代わる必要はない。その体にもう興味は無かった。いや、妬

「ダ……じようぶ、よ。わたしたち獣人だ、から……人より、じよウぶ、なの」

スイが言う。無理をしているであろうそれに胸が痛くなった。

「うえ、ーレ、僕たちは、ね。最初は、あーしゃの代わりにすつためだけだけど、途中か……うッ」

言葉の途中で、センが血を吐く。それもそうだろう、獣人がいくらよりも丈夫だとはいえこの傷では致命傷だ。慌てたヴェーレは、二人に喋らないように言う。

「待つて、先に傷を直そう。治つたらその言葉の続きをきかせて、お願い」

少し考えたものの頷いてくれた二人を抱き締めて、まとめて治療魔法を使う。

傷口から勢いよく血が溢れ出した。二人の体と魂が余りにも傷つき過ぎていて、治療に耐えきれないようだった。このままでは逆効果だ、二人が死んでしまう。焦ったヴェーレは自分の魂と肉を削り二人の傷を塞ぐ足にする。お願い、治つて。お願い。治療の魔法をかけながら、ヴェーレはずつと二人と過ごした楽しい日々を思い出していた。あれが楽しかった、これが嬉しかった。

たくさんの思い出が思い起こされる。願うならば本物の様に、アーシャの様に愛されたかったが、たとえ本物の代わりだつたとしても二人から受けた愛情は心地よかつたのだ。だから二人に死んで欲しくない。二人は死ぬべきではない。

しばらくして、治癒が終わるとヴェーレは疲れのあまり二人の隣に倒れ込んだ。傷の修復に体力を使い過ぎたのか二人は起きない。自分も疲労感がすごい。大変な治療だったのだからそれもそうだろう。

ヴェーレは寝転がったまま体の向きを変えると、二人の頬にいたままの血を袖で拭いた。早く起きないだろうか。元気な二人の声が聞きたくて仕方がなかった。笑って欲しかった。

アーシャが死んでしまった、殺してしまっただけ体を張って守ろうとした子を殺した自分を、二人は恨むだろうか。もう自分のことは嫌いだらうか。

ちらりとベッドを見ると、アーシャの亡骸が眠っている。お前は死んでまで僕を悩ませるのだな。何だか悔しい気持ちになった。ヴェーレは、こんなに考えてしまうのであれば先に二人の言葉を最後まで聞いておけば良かったなど、少し後悔した。

体が重い。疲れ過ぎて眠れなくなったのだな。ヴェーレは働かなくなってきた頭でそう考える。少し眠ってしまおう。そして起きる頃には、二人も目をさましてればいいな。そっと目を閉じる。

ああ、そしてあわよくばアーシャの様に自分も、

(愛して欲しいな)

それならば何故二人は自分をアーシャと呼ぶのか。ヴェーレには分からなかった。

アーシャ、アーシャ、と泣きながら自分を抱き締める二人に心が締め付けられるような気持ちがある。二人が求めているのはやはりアーシャなのだ、ヴェーレは切なくなった。結局二人は僕を、ヴェーレをどのように思っていたのだろうか。

そう思った時、ヴェーレは眠る前の二人の最後の言葉を聞けていないことを思い出した。ヴェーレに向けた二人の言葉。

「つスイ、セン、あの、あの時の言葉は……!」

「どうしたんだいきなり」

「アーシャ、どうして名前を呼ぶの……?」
いつもお父さん、お母さんって呼んでいたじゃない。そう続いた言葉に苦しくなった。

「ね、ねえ。ヴェーレは、ヴェーレのことは……っ」

*

*

起きて、と肩を揺すぶられる感覚で目が覚めた。ヴェーレが薄らと目を開くと、そこには泣きそうな顔をしたスイとセンがこちらを覗き込んでいた。

思わず勢い良く起き上がったヴェーレは、恐る恐ると言ったように二人に手を伸ばす。手に触れ、肩に触れ、頬に触れ。その温もりを明確に認識した途端、涙が溢れ出した。ああ良かった、ちゃんと生きている。傷が治ったのだ。

そんな彼を見て、二人もはらはらと涙を流す。センはヴェーレとスイを二人合わせてきつく抱き締めた。そしてスイはとても嬉しそうな顔で泣きながら、ヴェーレの髪を撫でて言った。

「アーシャ、治ったのね」

ヴェーレは己の耳を疑った。今スイは自分のことを何と呼んだらうか。

「ああ、アーシャ。死んでしまうかと思った。生きていて良かった」
追い討ちをかけるようにセンがそう言う。何故、二人が自分のことをアーシャと呼ぶのか分からなかった。自分の姿に視線を下ろすが自分は少年の姿のまま、別にアーシャに擬態しているわけでもない。

そうだ、アーシャは。そう思ったヴェーレはベッドに目を向ける。いた。自分が眠る前と変わらずアーシャはそこに眠っていた。

ヴェーレがアーシャになってから、三人は本当の家族になった。スイとセンはアーシャの健康を喜び、アーシャも二人との暮らしを喜んだ。明るさに満ちた穏やかで楽しく過ぎていく毎日、笑顔の耐えることのないそれはきつと幸せだと言っていいものなのだろう。

しかしそう緩やかに進む日々と共に、スイとセンの魂の崩壊もじわりじわりと進んでいた。あの日ヴェーレが二人に治癒の魔法を施した時、傷付きボロボロになった二人の魂に自分の魂を繋ぎとして混ぜ込むことでその崩壊を食い止めた。その時は治癒の為に二人に注がれた魔力が魂の反発を防いでくれていたのだろうが、魔力が抜け切った今になって彼らの魂はヴェーレの魂との拒否反応を起こし始めていたのだ。

魂が崩壊してしまえば、いくら体が健康体であったとしてもあるのは死のみ。魔力を注いで再度補強を試みればいいのではないか、そう考えたこともあったがうまくはいかなかった。おそらくあの時は治癒という形で体内に自然に満遍なく自分の魔力を循環させることができた故の事象だったのだろう。もう手の施しようが無かった。

アーシャとして二人の子となった今でさえ、魂の不適合という形で二人との差を、自分が二人とは違う生き物なのだということをまざまざと見せつけられる。やはり自分はどう足掻いても二人の本当の子にはなれないのだと言われているようなものだ。

それでもそれを隠して、二人と笑って過ごすことしかできない。だっけ自分はアーシャなのだから。笑って、笑って、笑って。楽しく幸せな家庭で生きていく。

*

静かに雨の降るとある日。スイとセンは愛する息子に看取られながら息を引き取った。アーシャがアーシャでないと気づく事なく、最後まで本物の息子だと勘違いしたまま。ヴェーレの魂を受け入れられないまま。

「結局僕は、君たちと交わることはできない生き物だったんだね」

ゼミ誌委員 後記

この度は、小(神)野ゼミ「詞花のゆりかご」を手にとっていただきありがとうございます。

初めて本を作るメンバーが多数でしたが、作品はもちろん、表紙や裏表紙の写真的撮影、題名など、こだわりが散らばっておりますので、ぜひ細かいところまでご覧ください。

「詞花のゆりかご」は、一年生のゼミの中では珍しくメンバー全員が物語を書いたゼミ誌となりました。

全員が花をテーマに物語を紡いでいます。

ゼミ誌唯一の漫画作品『不可測の種序章』からはじまり、様々な花をテーマにした作品が集まりました。

ヒマワリ、シロユリ、オシロイバナ、クロユリ、ワスレナグサ、ツツジ、ウチワノキ、ツバキ、サクラソウ、シオン、スイレン。

みなさまのお気に入りの花がありましたでしょうか。

花は、人々の生活の傍に、ひっそりと佇んでいます。

特別な日には、花を贈ったり飾ったりします。

例えば誕生日、記念日、結婚式。

幸せな日の傍らに、花を携えます。

また、幸せな日だけでは限りません。

深い悲しみに沈むお葬式でも、たくさんの方が飾られます。私たちの人生の最期は、花に囲まれて見送られるのです。

世界中に約20万種類あると言われる花。

嬉しいとき、悲しいとき、

あなたのその時々、心に合った花が必ず見つかるはずです。そして、そのどんな心も花と同じように美しいはず。

私たちが大切に作り上げた登場人物たちの心の機微を、花にのせて、物語にしました。

ひとつひとつ、じっくり読んでいただけると幸いです。

読む度に新しい発見ができる作品もあるかもしれません。

気になった花言葉は、ぜひ調べてみてくださいね。

そして最後に、題名「詞花のゆりかご」について。

詞花とは、文章において、美しく飾られた言葉のことです。

まだ私たちは成長途中ではありますが、今後の成長に期待を込め、詞花のゆりかごと名付けました。

私たちの作品が、あなたの心に美しい言葉として刻まれますように。

ゼミ誌委員 阿佐比りい子・中条和音・CROUS

詞花のゆりかご

令和三年度 文芸研究Ⅰ 小(神)野ゼミ

発行日 二〇二二年十二月

発行人 小神野真弘

編集人 小(神)野ゼミ一同

発行 日本大学芸術学部文芸学科
東京都練馬区旭丘二一四二一

印刷 有限会社 国宗